

協同教育実践資料 1

豊かな心と学力を育み、
共に支え合い高め合う生徒の育成

米子市日吉津村中学校組合立箕蚊屋中学校 著
杉江修治 監修

日本協同教育学会

あいさつ

日頃は、本校教育にご指導ご支援を頂き、ありがとうございます。

平成 16・17 年度米子市中学校教育総合研究校に指定され、この度発表させて頂くことになりました。平成 17 年度は箕蚊屋中学校区人権教育発表校の指定とも重なり、同時発表となりました。何かと慌ただしく準備等も不十分で心苦しく思っています。

本校は、平成 15・16 年度に学力向上フロンティア事業の指定を受け、地域や生徒の実態、新学習指導要領の狙っている今日的課題等から「豊かな心と学力を育み、共に支え合い高め合う生徒の育成」を研究主題に取り組んで参りました。研究の推進に当たっては「豊かな心」「豊かな学力」「共に支え合い高め合う」の文言の共通理解と把握に留意し、生徒の現状を分析し、特にどんな場面での育成が可能か検討し、組織的に実践してきました。

研究主題に沿った学習方法として、協同学習を取り入れました。目新しい学習方法や形態を意識し、抵抗感もありましたが、つまるところ学級という場を生かし、生徒同士が関わり合いながら皆が高まっていくことを目指した学習方法と言えると思います。この学習にふさわしい学習規律の定着や学習の場としての環境の整備、何よりも生徒のより意欲的な主体的な活動を引き出す指導法の工夫改善に尽きるかと思えます。

米子市中学校教育史によれば、第 1 回の総研は昭和 32 年に尚徳中学校で開催され、従来の教科毎の研究発表会を、新制中学校創立 10 周年を記念し総合研究会として開催した、とあります。その後隔年での開催となり、半日の日程と規模も縮小しましたが、総研開催の意義は今も変わらないと思います。本校のささやかな研究発表が米子市中学校振興会の各教科領域等の研究材料の提供になれば嬉しく思いますし、何よりも率直なご意見、ご指摘を頂ければ有難く思う次第です。

終わりにになりましたが、これまで適切にご指導ご助言を頂きました、中京大学教授の杉江修治先生、島根大学助教授の高旗浩志先生、鳥取県教育委員会、米子市教育委員会の諸先生、並びにお世話になりました関係の皆様方に厚くお礼を申し上げます。

平成 17 年 11 月

米子市日吉津村中学校組合立箕蚊屋中学校校長 馬田真寿美

目 次

あいさつ	3
箕蚊屋中学校の研究の概要—全体会発表より	7
研究計画	
・2005年度校内研究計画	13
仲間づくり部会の取り組み	
・人権教育2005年度全体計画	13
・仲間づくりの意義	30
・朝の会、終わりの会について	33
・学級開きについて	36
・人権弁論について	39
・人権教育の授業(道徳・学級活動)実践	42
授業づくり部会の取り組み	
・国語科	47
・社会科	57
・数学科	64
・理科	72
・英語科	79
・保健体育科	85
・美術科	93
・技術・家庭科	95
・音楽科	104
実態調査部会の取り組み	
・家庭生活と学習に関する調査の結果	115
・学習集団形成度調査結果	120
・観点別到達度学力検査(CRT)結果	123
全体研究会記録	
・第1回(2004年7月1日、理科)	129
・第2回(2004年11月29日、社会科)	135
・第3回(2005年2月15日、数学科)	142
・第4回(2005年6月23日、国語科)	146
あとがき	152
監修者あとがき	153

箕蚊屋中学校の研究の概要—全体会発表より

本校は、平成15・16年度に学力向上フロンティア事業の指定を受けましたが、従来より同和教育・仲間づくりを中心に据えた教育を行ってきていましたので、これまで取り組んできた仲間づくりと学力向上を結びつけた取り組みはできないものかと考えました。そこで設定した研究主題が「豊かな心と学力を育み、共に支え合い高め合う生徒の育成」です。

本研究資料の14頁から15頁には、研究主題の意味するところを詳しく書いております。

「豊かな心」は主に人権教育の中で、「豊かな学力」は教科の指導の中で伸ばしていくものですが、これまでの一斉指導を中心とした授業形態では、生徒は受け身的な学習になりやすく、人権教育では自分の問題として考えにくかったり、教科では、理解の定着が、教師が思うほどよくなかったりします。それよりもむしろ、生徒が課題を持って主体的に学習に取り組み、生徒同士の関わり合いや高め合いの中で学習していく方が有効であると考えたわけです。そして、その考え方の根拠となるのが「協同学習」です。協同学習については、この後、杉江先生のご講演の中で説明があると思いますが、簡単に言いますと、協同学習というのは、学級全体が高め合い、協力して学び合うことによって、学習内容の理解と習得を目指すものです。そしてその背景には、生徒が「自分を高めたい」と思っていること、ほかの生徒の発言を認め合う「支持的風土」「自分の学習が他の人の役に立っている」という気持ちなどがあります。このことは、人権教育にもつながるものです。そして、この協同学習は、課題を設定し、見通しを立て、自分たちで取り組んでいく問題解決学習と関連づけることによって、より効果的になると考え、問題解決学習にも取り組むことにしました。また、「豊かな心」と「豊かな学力」は、それぞれ独立したものではなく、互いに関連づけながら伸ばしていくことが、より効果であると考えました。本研究資料15頁からの研究の重点（具体的な取り組み）においても、それぞれの取り組みの意図を人権と学力向上の両面から捉えています。そういった面からも人権教育と教科の授業を、本日同時に公開させていただきました。

(1)に示した具体的な取り組みでは、人権意識を高めることを狙いとしていますが、同時に自己肯定感を高めることによって、主体的に学ぼうとする意欲づけも狙っています。人権学習では、これまで読み物資料を使っただけの学習が多くありましたが、生徒が人権問題により主体的に関わるよう、生徒自身が外に出かけて調べたり、校外の人との触れ合いを通したり、生徒同士の話し合いによって考えを深めたりする活動を取り入れました。

本日公開させていただいた学活の授業は、このような考え方から行っています。

(2)は、普段の学級での取り組みについてです。④の仲間づくりの観点で行う「学級開き」と⑤の「学級人権弁論」は、以前より本校が力を入れて取り組んでいるものです。研究資料の仲間づくり部会の取り組みに詳しく載せておりますので、後でご覧ください。また、昨年、今年と全学級で取り組んでいるのが③の「学級の歴史づくり」です。これは、ただ

単にその日のでき事だけを書くのではなく、学級全体や個人で頑張ったことを、仲間づくりの視点で捉え、みんなで認め合っていこうというものです。また、学級掲示することで、自分たちの足跡を振り返ることもできます。各教室の後ろの壁面に貼ってあったのでご覧いただいたことと思います。

16 頁をご覧ください。(3)が教科指導における取り組みになります。

①の学習規律は、全教科共通の事項とし、「学習のきまり」という形で全学級に掲示し、生徒に意識づけを図っています。③学習内容の定着を図るための協同学習、④学習方法の習得を図るための問題解決学習、⑤指導と評価が一体化した学習指導については、国語科の取り組みを例にとって説明したいと思いますので、研究資料の 47 頁をご覧ください。

47 頁には、国語科の問題解決学習の取り組みの例を載せております。

小説「カメレオン」を読んだ後、感想を書かせ、その中から疑問点や課題を見つけ出します。そして、その疑問点や課題について、個人で考え、さらに小集団で話し合います。そして、最後に全体で確認します。教師の用意した発問に対して、いわゆるできる子が答えるという一問一答形式の一斉指導では、生徒はどうしても受け身的になりがちですので、自分から学ぶという姿勢が身に付きません。また、発問に対して全員が本当に考えているのかというのも怪しいものです。しかし、問題解決学習なら、自分たちの疑問から出発するので、意欲的、主体的に取り組むことができますと思います。

次に 48 頁をご覧ください。ここでは協同学習について述べています。小説「走れメロス」を 7 つの場面に分け、第 1 場面は全体でやり方を確認しながら読み進め、残りの 6 つの場面は各班が分担して読み取っていきます。そして、読み取ったことを全体で発表します。自分たちの学習が他の生徒の役に立っているという意識を持つことができ、より意欲的に学習に取り組めます。そこに書いてあるように、生徒の感想を見ますと、小集団による話し合いがいかにか有効であるかがよく分かると思います。

国語ばかりを例にとって申し訳ありませんが、50 頁の本時の指導計画をご覧ください。

指導と評価を一体化させた学習指導について説明いたします。ここでいう評価は、成績をつけるためのものではありません。本時目標が達成できたかどうかを確認するためのものです。まず、本時目標を生徒に分かりやすく提示します。ここでは、「筆者の文章を徹底解剖して、うまい表現を盗み、自分の表現に役立てよう。」です。生徒は、この課題を確認した上で、課題解決のためにまず個人で取り組み、次に班で話し合いをし、最後に全体で確認します。その過程において、本当に筆者のうまい表現を見つけることができているかどうか机間巡視によって評価していきます。このとき、個人で作業しているときは、特に学習が困難だと思われる生徒のようすを見ていき、指導・支援をします。その他の生徒については、班で話し合いをしているときに評価をします。個人だと、36 人いれば 36 回の評価と支援が必要になりますが、班だと 6 回の評価と支援で済みます。話し合いのようすを見ながら、うまい表現を抜き出すことのできていない班を中心にアドバイスをしていきます。このように、狙いが達成できているかどうかを評価して、すぐに指導・支援する

ことが、指導と評価の一体化となります。指導案では、☆印が評価となり、その状況に応じてABCの判断をし、Cの生徒をBに引き上げるための支援が下向きの▽マーク、Bの生徒をAに引き上げるための支援が上向きの△マークとなります。

同様に、他の教科の取り組みも載せておりますので、またご覧ください。

それでは、実態調査部会の取り組みについて説明します。研究資料をご覧ください。

実態調査部が実施したこの調査は、学級が共に学び合う学習集団となっているかどうかを見るためのもので、生徒自身にアンケートしたものです。122頁に、その結果が出ていますが、この結果を見て、各学級担任や授業に出る教員が、できていない所を中心にどう取り組んでいくのか考え、実践していきます。また、教員だけでなく、生徒にもこの結果のおおまかな傾向を伝え、自分たちの学級ではどういったところを頑張らなければいけないかを考えさせていきます。そのときに、なぜそれができないといけないかということも、協同学習の視点から考えさせていきます。生徒自身が意識することで、学級全体に共に学んでいこうとする雰囲気が作られていくと思います。

125頁からのグラフは、毎年4月下旬ごろに行っている観点別到達度学力検査の結果です。全国平均の100に対して値が出るので、生徒の学力を客観的に知ることができます。この検査は各教科とも領域別に細かく結果が出るので、教科担任はそれを見てこれからの指導に役立てていくことができますし、昨年度の自分自身の指導方法について振り返ることもできます。生徒にも詳しい検査結果が渡されるので、自分の弱いところを確認し学習に役立てることもできます。本校の傾向については127～128頁にまとめていますが、全体的に1年の学習終了時の数値が下がる傾向があります。考えられる原因は、そこに書いてあるとおりですが、さらに検証していく必要があると考えています。

131頁からは、昨年度と今年度に行った全職員参加による授業研究会の記録です。第1回目は、まだ協同学習がいかなるものか、具体的に理解していなかった状況での授業でした。小集団による学習にこだわっていたときの授業でしたが、今では小集団による学習は、協同学習の視点から有効な方法の一つであるが、それにこだわらず、最終的には学級全体で協同学習が実施できることを目指しています。今学期に行った授業研究会の記録は載せておりませんが、これらの記録を読んでいただくことで、本校の研究の歩みもご理解いただけるのではないかと思います。また、昨年から今年にかけて杉江先生には3回来ていただいてお話を伺っており、その内容のあらましも載せておりますのでぜひご覧ください。

以上、簡単に本校の取り組みについて説明をさせていただきました。本来なら、ここで研究の成果と課題を申し上げるべき所ですが、まだまだ研究の途中で、その段に至っていません。本日、生徒の学習活動を中心に、授業をご覧いただきましたが、生徒の学習に対する取り組みのようすが研究の成果であり、課題であると考えています。先生方のご指導・ご助言をいただけたらと思います。以上で、説明を終わります。ありがとうございました。

(2005年11月22日 大里守研究主任による全体会報告原稿)

研究計画

2005 年度校内研究計画

1. 研究主題

「豊かな心と学力を育み、共に支え合い高め合う生徒の育成」

2. 主題設定の理由

(1) 生徒の実態

生徒たちは、部落差別やいじめなど、広く人権に関わる多くの問題と直面している。そして、これらの問題に対して、仲間と連帯して立ち向かっていかなければならない。しかし実際には、自分自身の問題であると捉えきることができず、頭の中では「差別はいけないことだ」とわかっているにもかかわらず、自ら悪口を言ったり差別をしてしまったり、仲間の差別を傍観してしまう生徒も多い。これは、生徒同士の関わりが弱くなってきていることが原因の一つと考えられる。関わりが弱いのために、さまざまな問題が自分のこととして捉えにくかったり、注意し合える関係にまでなっていないであったりする実態がある。また、生徒個々の自己実現が十分にできていないことも関係があると思われる。つまり、自分に自信が持てないがために、自分をつまらない存在として捉え、自分や他者を大切にしようという人権意識を持ちにくくなる。そこで、一人ひとりの生徒に豊かな学力（生涯学習の土台となるような学びの力、「生きる力」）を身につけさせることにより、将来へ向けて夢や希望を持って生きていこうとする意欲や態度を育てていくことが大切であると考える。このような実態をふまえ、生徒一人ひとりに確かな学力と豊かな人権意識を身につけさせ、仲間との関わり合いを深めていくことで、身近な生活の中のさまざまな場面において、差別を見抜き見逃さず、解消へ向けて仲間と共に行動していける生徒集団を育てていきたい。

(2) 本校の教育目標（めざす生徒像）

◎ 校訓「進んで学び、自己を創ろう」

- ① 相手を思いやり、自他の生命・人権を尊重し、礼儀正しい生活を送る生徒。
- ② みんなで協力し、共に支え合い、高め合う生徒。
- ③ 中学生としての自覚を持ち、責任ある行動をとる生徒。
- ④ 何事にもくじけない強い心と身体を育て、自ら進んで勉学に励む生徒。
- ⑤ 自分たちの身の回りの整理整頓や美化に心がける生徒。

(3) 教育の今日的課題（「学習指導要領改訂のねらい」より）

- ① 豊かな人間性や社会性、国際社会に生きる日本人としての自覚を育成すること。
- ② 自ら学び、自ら考える力を育成すること。
 - ・ 各教科及び「総合的な学習の時間」で体験的な学習，問題解決的な学習の充実。

- ・ 各教科等で知的好奇心や探究心，論理的な思考力や表現力の育成を重視。
 - ・ コンピュータ等の情報手段の活用を一層推進。
- ③ ゆとりのある教育活動を展開する中で、基礎・基本の確実な定着を図り、個性を生かす教育を充実すること。
- ④ 各学校が創意工夫を生かし特色ある教育、特色ある学校づくりを進めること。

※個に応じた指導について 各教科等の指導に当たっては、生徒が学習内容を確実に身に付けることができるよう、学校や生徒の実態に応じ、個別指導やグループ別指導，学習内容の習熟の程度に応じた指導，教師の協力的な指導など指導方法や指導体制を工夫改善し、個に応じた指導の充実を図ること。

3. 研究の構想

(1) 研究主題「豊かな心と学力を育み、共に支え合い高め合う生徒の育成」について

① 「豊かな心」とは (⇒主に人権教育の中で)

- ・ 思いやりや感謝の心があり、自分や他の人を大切にすることができる。
- ・ 人権問題について正しく理解し、差別を見抜き許さない。
- ・ 他の人のよさを認め、協調・協力することができる。
- ・ 自分のよさを認め、何事にも前向きに取り組み、自己を向上させようとする。
- ・ 感性が豊かで、美しいものやすばらしいことに素直に感動することができる。

② 「豊かな学力」とは (⇒主に学力向上・問題解決学習の取り組みの中で)

- ・ 各教科における基礎基本が定着している (学習指導要領に示された「内容」)。
- ・ 各教科の 4～5 観点に示された力をバランスよく身につけている (学ぶ意欲、表現力、思考力、判断力、知識・技能など。特に、知的好奇心や探究心，論理的な思考力や表現力の育成を重視する)。
- ・ 自ら学び、自ら考える力 (自ら課題を見つけ、自ら考え、主体的に判断し、よりよく解決することができる一問題解決力、自己学習力)。
- ・ 自らを生かす進路選択ができ、それに向かってねばり強く努力することができる。

③ 「共に支え合い高め合う」とは (⇒主に仲間づくり、協同学習の取り組み中で)

「豊かな心」は、個人個人の活動において身につくものではなく、さまざまな人々との出会いや触れ合いを通して育まれるものである。例えば、思いやりや感謝の心は相手がいなければ持つことができないし、行事などで学級が一つとなって取り組むことによって得る感動は大きなものがある。特に、社会生活を営むために重要となる人間関係を築く力は、実際の場面において生徒同士の関わりを通してでなければ育てられない。

「豊かな学力」の中の多くの力も、生徒同士が学び合い、高め合う学習過程において、よりよく身につくものと考えられる。例えば、表現力は伝える相手を意識するこ

とで自分の考えや表現手段をより明確にすることができるし、思考力は他者の意見を聞くことによって自分の考えをより深めることができる。また、お互いの考えや発言を認め合う「支持的風土」が学級になれば、意欲的に学習に取り組むことは難しい。

「豊かな心」と「豊かな学力」は別々に存在するものではなく深く関わり合っており、互いに影響し合う中で伸ばしていくものとする。「共に支え合い高め合う」集団づくり（仲間づくり）は、学級の仲間と関わり合う中で、「豊かな心」と「豊かな学力」を自他共に伸ばしていくことである。

(2) 研究仮説

生徒の意識や学力の実態を適切に把握（実態調査部会）した上で、教科を中心にあらゆる教育活動を通して、人権意識を高めるとともに仲間づくりを進め（仲間づくり部会）、問題解決学習と協同学習の理論を取り入れた学習を展開（授業づくり部会）すれば、豊かな心と学力を育み、支え合い高め合う生徒集団を育成することができる。

4. 研究の重点（具体的な取り組み）

(1) 生徒の人権意識を高め、差別を見抜き許さない態度を育てる人権学習・部落問題学習の研究

人権 同和問題の科学的認識を深めるとともに、仲間づくりを進めるための人権の基礎的な力・豊かな人権感覚を身につけさせる。

学力 生徒一人ひとりの学習する権利の保障。自尊感情（自己肯定感）を高めることにより、自分自身の力を伸ばそうとする意欲づけを行う。

① 部落問題などのさまざまな人権問題に関わる授業の開発、工夫改善、教科との連携。

- ・ 体験的な学習（地区進出学習会や調べ学習 → 生徒の発表）
- ・ 人との出会いや触れ合い（県米養との交流学习、地域の取り組み）
- ・ 人権弁論の取り組みを発展させて一問題点を明確にした話し合い活動

② 人権の基礎的な力を高める授業（学活：参加体験型学習）の実施。

- ・ 自尊感情、コミュニケーション能力、非攻撃的自己主張などの力の育成

③ 生徒の人権が大切にされた学校環境づくり。

（教師の言動が、生徒に大きな影響を与える）

(2) お互いの人権を尊重し、共に支え合い高め合う仲間づくり・学級づくりの研究

人権 生活班を核とした仲間づくり → 学級 → 学年 → 学校 へと広がる仲間づくり。

生徒同士の関わり合いを意図的に仕組み、思いを語り合える仲間。

学力 教え合いや話し合いなど、共に学習していく集団づくりの土台づくり。

- ① 班の狙いを明確にした班づくり。
- ② 班活動の充実—班の係活動、清掃活動（点検表を活用）、行事、授業。
- ③ 朝の会、終わりの会の充実—仲間づくりの狙いを確認し、一日の活動（生徒同士の関わり合い）を評価し、次につないでいく。
 - ・ 週番班による授業態度の評価の発表・確認（教科担任は協同学習の視点で評価する）
 - ・ 「学級の歴史」づくり—学級や個人・班として頑張ったこと（仲間づくりの視点で）。教室掲示を全学級で行う。
- ④ 学級開き—仲間づくりの観点で。まずは全員が自分の意見を語り、人の意見をしっかりと聞くことができる雰囲気を作っていく。学級としての1年間の方向性を決める。
- ⑤ 学級人権弁論で、自分の思いをきちんと語り、人の思いを自分の思いとして返していくことができるようにしていく。

※全クラス共通で実施するもの

- ・ 学級目標の設定と教室掲示
- ・ 個人ノート（生徒理解のため）
- ・ 班の係活動（ポスター掲示）
- ・ 「学級の歴史」づくり（教科担任に毎時間ごと聞く）
- ・ 週番班による掃除点検（点検表の活用）
- ・ 週番班による授業の評価の発表
- ・ 班日誌（一日の活動を点検するため）

※補助担任の役割：T2として普段からなるべく学級に入り込み、支援していく（朝の会、終わりの会の時は、教室または廊下で支援する）。

(3) 生徒が主体的に取り組み、他と関わり合いながら深めていく学習活動の研究

人権 生徒の関わり合いを深めていく実践の場。

学力 教科学習における「学習集団づくり」の推進。共に考えたり活動することで、学習意欲を喚起するとともに学習内容の理解を促す。

- ① 「学習集団づくり」の前提となる学習規律（各教科共通）の確立。
 - ・ 「朝の読書」の実施（年間を通して全学年で）—自学自習の基礎づくり。落ち着いて人の話が聞ける習慣づくり。
- ② 基礎・基本の定着—ノート指導、ドリル学習、補充学習、セミナー学習など。
- ③ 学ぶ意欲（知的好奇心や探究心）、表現力、思考力などの育成。学習内容の定着を図る。

※協同学習：意見交換しながら考えを練り上げたり共に活動することで学習を深める。自分の学習が、他の人の学習に役立っている。

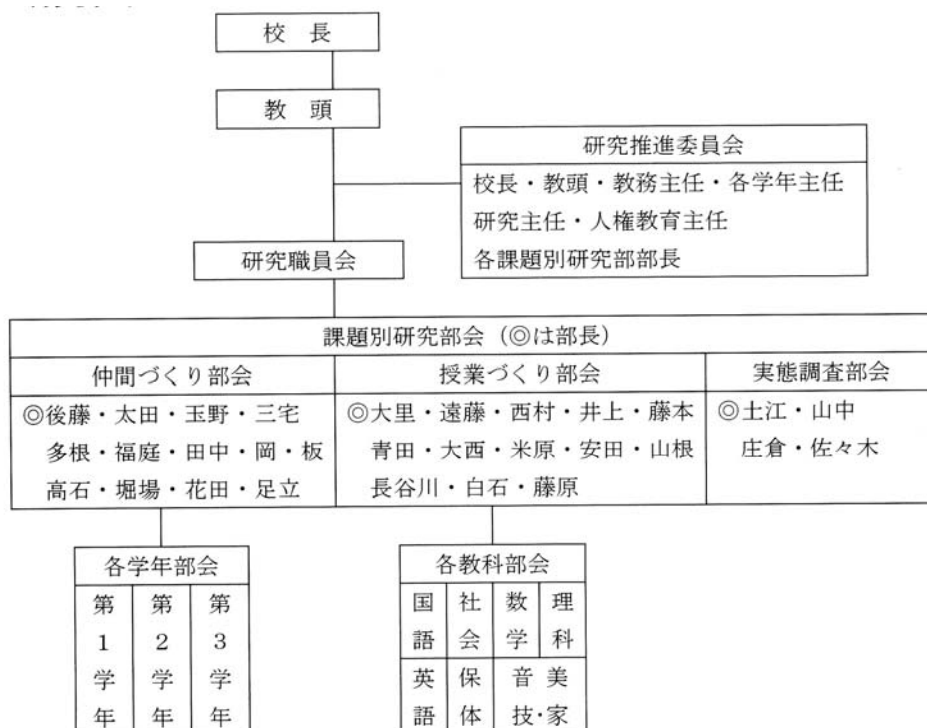
※教材の開発、指導方法の工夫改善、支持的風土づくり、生徒同士の関わり合い。

- ④ 問題解決力や自己学習力の育成（学習方法の習得）—問題解決学習。
学習材の開発、課題設定の仕方、学習過程の工夫改善。単元の見通し、自己評価表。
- ⑤ 指導と評価が一体化した学習指導の工夫改善。単元全体における指導と評価の計画。
- ⑥ 個に応じた指導体制の工夫と学習指導の充実（小集団学習は個を生かす学習形態）。
・ ティームティーチング —1、2年英語
・ 選択教科一個を生かす指導、個に応じた指導の充実。
- ⑦ 家庭学習の定着化—家庭学習の仕方、家庭学習記録カード。
・ 普段からの授業公開—互いに授業を見合うことで指導技術の向上を図る。
・ 授業研究会の実施（全教科）。
・ 教科部会の充実—評価の検討、指導法の研究、教材開発など。

(4) 生徒の学習・生活や人間関係に関する意識、学力の実態を把握し、分析する

- ① 生徒の意識・実態調査—学習や生活に関する実態調査を質問紙によって行い、研究の狙いが生徒に反映されているかどうか検証する。
- ② 学力に関する実態把握—C R T（新観点別到達度学力検査）の実施（5月6日）と分析。その他の学力検査の分析。
- ③ 教科の枠を越えた評価・評定についての検討。

5. 研究組織



(1) 課題別研究部会の主な取り組み

仲間づくり部会：具体的な取り組みの(1)(2)を中心に。

授業づくり部会：具体的な取り組みの(3)を中心に。

実態調査部会：具体的な取り組みの(4)を中心に。

(2) 年間研究計画

- ① 研究推進委員会：原則月1回、研職の前。
- ② 研究職員会（研究部会）：原則月1回、研究職員会または研究部会を行う。
- ③ 教科部会：原則学期に数回。
- ④ 朝の会、終わりの会の公開：毎日。全体は、3年1学期、2年2学期、1年3学期。
- ⑤ 授業公開（教科）：各教科で1学期に実施（音美技家で1回）。
- ⑥ 授業公開（道・学・総）：学年ごとに各学期1～2回ぐらい（人権教育）。

6. 研究の経過

(1) 2004年度

- | | |
|-----------|--|
| 4月 2日（金） | 研究職員会（学級開きについて） |
| 4月 6日（火） | 研究職員会（研究計画について） |
| 4月27日（火） | 観点別到達度学力検査（CRT）全学年 |
| 5月 7日（金） | 学年部会 |
| 5月21日（金） | 研究職員会（研究部会：部会テーマの設定と具体的な取り組み） |
| 6月29日（火） | 境港市立第二中学校授業研究会に参加（大里守） |
| 6月30日（水） | 校区同和教育推進協議会・授業研究会 |
| 7月 1日（木） | 授業研究会
2年1組 理科「動物の行動とからだ」指導者 堀場善智
指導助言 中京大学教養部 杉江修治教授 |
| 8月10日（火） | 人権教育講演会 |
| 8月11日（水） | 研究職員会（研究部会・教科会） |
| 8月26日（木） | 現地交流会
研究職員会 |
| 10月4～14日 | 人権弁論（班弁論・6時間） |
| 10月16日（火） | 授業研究会
1年5組 保健体育科「サッカー」指導者 板義道指導助言米子市立
後藤ヶ丘中学校 黒見博教諭 |
| 10月20日（水） | 人権弁論（学級弁論：4時間） |
| 10月21日（木） | 授業研究会
2年3組 国語科「さまざまな情報を役立てよう」指導者 大里守 |

- 指導助言 島根大学教育学部 高旗浩志助教授
 1年5組 音楽科「ハーモニーに親しもう」指導者 米原真吾
 指導助言 鳥取県立皆生養護学校 井田博之校長
- 10月25～27日 人権弁論（学年弁論：3時間）
- 10月30日（土） 総合学習発表会（人権弁論：学年代表3名）
- 11月 8日（月） 研究職員会
- 11月26日（金） 先進校視察 大阪府松原市立第三中学校
 「基本教科・人権・情報の『学びの総合化』とヒューマンネットワークづくり研究発表会」 後藤譲・大里守
- 11月29日（月） 授業研究会
 2年1組 社会科「自然環境の特色をとらえよう」指導者 高石博史
 指導助言 中京大学教養部 杉江修治教授
 島根大学教育学部 高旗浩志助教授
 西部教育事務所学校教育係 松尾直樹指導主事
- 1月11日（火） 研究職員会（研究部会）
- 1月26日（水） 授業研究会
 1年5組 英語科「カードをもらってうれしいな」
 指導者 青田恵子、大西淑子
 指導助言 米子市教委学校教育課 富士原寿和学校指導主事
- 2月15日（火） 授業研究会
 1年3組 数学科「平面図形」指導者 岡美由紀
 指導助言 西部教育事務所学校教育係 宮邊満係長
- 2月18日（金） 先進校視察 神戸大学附属住吉中学校
 全国協同学習研究大会」 高石博史・堀場善智

(2) 2005年度

- 4月 4日（月） 研究職員会（学級開きについて）
- 4月 6日（水） 研究職員会（研究計画について）
- 4月11・14日 学級開き
- 5月 6日（金） 観点別到達度学力検査（CRT）全学年
- 5月19日（木） 研究推進委員会
- 5月20日（金） 研究職員会（研究部会：本年度の取り組みの確認）
- 6月23日（木） 授業研究会
 2年2組 国語科「読書で視野を広げよう」指導者 田中由美
 指導助言 中京大学教養部 杉江修治教授
 西部教育事務所学校教育係 松尾直樹指導主事

- 8月 1日 (月) 研究推進委員会・研究職員会 (研究部会)
- 8月17日 (水) 研究職員会 (LD、教科部会)
- 8月26日 (木) 現地交流会・研究職員会 (学年部会)
- 9月28日 (水) 授業研究会
 1年5組 学級活動「障害と共に生きている人々に学ぶ」 指導者 多
 根由紀子
 指導助言 西部教育事務所学校教育係 松尾直樹指導主事
 米子市人権政策課人権学習係 福田知浩指導主事
 東山中学校LD等専門員 村田誠教諭
- 10月3～17日 人権弁論 (班弁論：6時間)
- 10月19日 (水) 人権弁論 (学級弁論：4時間)
- 10月21～25日 人権弁論 (学年弁論：3時間)
- 10月29日 (土) 総合学習発表会 (人権弁論：学年代表3名)

<資料1>

一日の班活動と指導のサイクル

朝の読書	……(落ち着いた朝のスタート	← 担任・補担	
朝の会	……(「今日のめあて」の確認	← 担任・補担	
授業	……(学習に主体的に取り組む 生徒同士の関わり合いの場 係活動(黒板班)の場 週番は評価を聞く「週番日誌」	← 教科担任 関わり合いを評価	}
給食	……(係活動(給食班)の場	← 担任・補担	
昼休憩	……(係活動(連絡班)の場		
掃除	……(掃除活動「点検カード」 係活動(週番班)の場	← <u>掃除場所担当</u> 週番班の指導 掃除当番の関わり合いの評価	
授業	…… 上に同じ	← 教科担任 関わり合いを評価	
終わりの会	……(関わり合いが持てたか、主体的に取り組めたか確認し、明日につなげていく。 →「学級の歴史」づくり 係活動(集配班)の場 係活動(週番班)の場 「班日誌」	← 担任・補担 ←	

<資料 2>

1年の班活動・学級活動の流れ

学級開き		…… 全員が自分の意見を言う。人の話を聞く。
日 々 の 班 活 動 ・ 協 同 学 習	仮班 ↓	…… 班の意味や係活動などを覚えていく。 班内の内部矛盾を引き出していく。
	↓	
	意図的班 ↓	…… より多くの関わり、班活動のレベルアップのための 班替え
	↓	
	行事（大山・松江・修学） ↓	…… 行事（困難を克服）を通して、主に班内の関わり合 いを深めていく。
	↓	
	体育祭 ↓	…… 行事（困難を克服）を通して、主に学級内の関わり合 いを深めていく。
	↓	
	学級人権弁論 ↓	…… 全員が自分の思いを語り、それに対してしっかりと受け とめ応えていく。
	↓	
↓	…… 自己実現・自己表現の場。仲間と共に一つのものをつ くりあげていく喜び・感動。	
↓		
↓	文化祭（合唱・劇） ↓	
↓	↓	
↓	↓	

<資料 3>

授業中の学習態度について

(1) 授業のはじめ

- 教室は学習しやすいように常にきれいに整えておく。（黒板消し、机の整頓、ゴミ拾いなど）もし、できていなければ生徒に直させるか教師が直してから授業を始める。
- 時計を見て行動し、**チャイム着席を守る**。授業に遅れてきた生徒は、一人ひとり教師の所に行き、理由を言ってから席に着く。
- 学習用具の準備をし、担当の先生が来るまで静かに待つ（授業に必要なものは、机の上に出さない）。服装もきちんと整えておく。
- 授業開始のあいさつ「**お願いします**」を、はっきりと大きな声で言う。

(2) 授業中の基本態度

① 聞く態度

- 姿勢を正して、顔を上げて話を聞く。
- よそ見や私語をしない。

○友だちの発言について、笑ったり冷やかしたりしない。

○わからないことは、質問するなどして、わからないままにしない。

② 話す態度

○きちんと手を上げて、進んで発表するようにする。

○指名されたら、「はい」とはっきりと返事をする。

○発表は、みんなにわかるように口をしっかりと開けて大きな声でする。

(メモなどを見て話すときは、メモを手にとって顔を上げて発表する。)

○「……です」「……だと思えます」と、発表をしめくくる(できる限り敬語を使う)。

○友だちの名前を言うときは、「〇〇さん」「△△くん」と言う。

○間違いを恐れなくて、自信を持って発表する。

③ その他

○席を離れる(トイレやロッカーに荷物を取りに行くなど)ときは、教師の許可を得る。

(3) 授業の終わり

○あいさつが終わるまでは学習用具をしまわない。

○その時間の学習内容や宿題の有無等を確認する。教師は、その時間の生徒の学習状況を評価する(生徒同士の関わりなど、「仲間づくり」の視点に立った内容で)。

○授業終了のあいさつ「ありがとうございました」を、はっきりと大きな声で言う。

○週番班は、先生に「授業のよかったことと悪かったこと」を聞き、週番日誌に記録し、終わりの会で発表する(教師が、全体へ向けて言った場合は、それを記入する)。

(4) 学習用具について

○持ち物には必ず記名をしておく。

○忘れ物をしないようにする。

<資料 4>

班(小集団)学習の仕方について

全員参加の学習をめざそう!

(1) 班の隊形

- 授業の基本隊形は、一斉(全員が前を向く)。
- 話し合いや教え合いをするときに班の隊形になる。机と机はきちんと合わせ、不自然

に透き間を作らない。欠席者の机も合わせる。

- 全体の中で発表したり考えたりするときは、一斉授業の隊形に戻す。

(2) 班の話し合い

- 班で話し合う前に必ず個人思考をさせて、一人ひとりに自分の意見を持つ（一斉隊形）。
- 司会や発表者などを決めておく。いつも同じ人がしないように順番に回していく。
- 司会のもと、全員が自分の意見を言う。
- みんなの意見を聞き、質問や意見を出し合う。他の人の意見に付け加えをしたり、他の人の意見を聞いて自分の考えをさらに深める（練り合い）。
- 意見はなるべく一つにまとめるようにするが、無理にまとめる必要はない。課題によっては、複数の意見でよい場合もあるので、先生の問いかけをしっかりと聞くこと。
- 班の中で課題がわからない人や話し合いに参加しない人がいたらそのままにせず、積極的に関わっていく。
- 班の中で「わからない」人に説明するとき、答えをすぐに教えるのではなく、質問の意味や解き方を教えるようにする。

※ 教師は各班の学習状況を把握して、全員参加の学習になり得ているかを確認し、必要ならば班に入り込んで指導していく。36人学級の場合、個別指導なら36回説明しなければならないところが、班学習なら6回（6班）の説明で終わる。

(3) 発表するとき

- 全体発表では、班の代表者が意見を言う。この発表者は同じ生徒にならないように班内で順番にさせていく。また、6つの班すべてが発表する必要はない。黒板やホワイトボードを見ればわかることは省略し、他の班の意見と違うものや理由・説明があるものを中心に発表させる。
- 他の人の発表をよく聞き、「付け加え」「訂正」「反対意見」を出していく。
- 「〇班、発表してください」と指名されたら、班の中で決めておいた発表者が発言する。1限から6限までで全員が発表できるとよい。

※ 学級担任と教科担任間の連携を大切にして、その学級の学習でのかかわりを情報交換し合い、継続的な指導・評価に心がける。必要に応じて終わりの会への問題提起もしていく。

※ 誤った発言を嘲笑したりするなどの差別的な言動、他の生徒の学習権をおかす言動に対しては、授業をストップしてでもその不当性を正す（常に人権教育の視点で臨む）。

仲間づくり部会の取り組み

人権教育 2005 年度全体計画

1. 基本目標

- ① 自分自身および友だちに対する理解を深めたり、さまざまな人々との出会いや触れ合いを通して「人としての生き方」に学ぶことで、お互いの人権を大切にできる人間関係を育てたり、自分自身の生き方を豊かにしようとする意欲と態度を育てる。
- ② 偏見や差別のない社会の実現に向け、身の回りや社会にある同和問題をはじめとするさまざまな人権に関する問題についての正しい理解と科学的認識を深めると共に、それらの問題を自分自身の問題として捉え解決していこうとする意欲と態度を育てる。

2. 指導方針

人権教育は、生徒一人ひとりを尊重することから出発し、個々の生徒をよく理解し、適切な指導によって個人の人権意識を伸ばしていくことが基本であると考えている。したがって、一人ひとりの生徒を見つめ理解し、大切にしたい仲間づくりを行うことが必要である。そして、基盤となる学級の仲間づくりは、「柱」になる生徒（学級の中でさまざまな問題意識を持ち、それを解決したいと頑張っている生徒、自分自身が辛い立場にありながらそれを乗り越えようと頑張っている、またはその壁を越えられないで苦しい思いをしている生徒など）を中心に据えた班活動をもとにして行い、支え合い高め合う態度を育てていく。また、身の回りにある不合理や差別に自ら気づき、それを許さないという考えに基づき、自ら行動できる生徒の育成を目指す。

人権教育は全教科・全領域で行うという考えに立って、道徳・学活に限らず、あらゆる場面における教育実践を目指す。したがって、教科の授業はもちろん、朝の会・終わりの会、清掃、委員会・係活動、総合的な学習の時間や行事などにおいても、人権教育の視点に立って教育を行う。

3. 具体的目標と努力点

(1) 人権問題について正しく理解し、差別を見抜き許さない態度を育てる

- ・ 差別や偏見のしくみに対する概念的なものの見方を育てる。
- ・ 同和問題をはじめとするさまざまな人権に関する問題についての正しい理解と科学的認識を深め、自らが置かれている社会的立場の自覚を促す。また、差別解消に向けて立ち上がっていった人たちの姿に学び、そこから反差別の思いを広げていく。

※「自らが置かれている社会的立場の自覚」とは、「現代社会には部落差別をはじめとするさまざまな差別があり、差別により、いろいろな面で自分や自分の周りの人たちの

生き方が制約されている。そのため、自分たちの生き方をより豊かなものにしていくため、自分に直接関わる問題として、部落差別をはじめとするさまざまな差別をなくさなければならぬという自覚」のことである。

(2) 人権の基礎的な力(技能)や、人として望ましい生き方や考え方を身につけさせる

- ・ 「仲間づくり」を進めるための人権の基礎的な力（コミュニケーション能力、自分の考えを論理的に表現する力、非攻撃的な自己主張の力、気づきや行動化につながる技能など）をつけさせる。そして、自らの考えを発表していく機会を意図的に仕組み、自分の思いや仲間への願いを訴えていける力やそれに応えていける力を養う。
- ・ さまざまな人々との出会いや触れ合いを通して「人としての生き方」に学び、自分自身および自分の生き方を振り返ることで、生き方や考え方を豊かにしようとする意欲と態度を育てる（自己理解を図り、自尊感情を高め、豊かな自己実現を図る）。

(3) お互いの人権を尊重し、共に支え合い高め合う仲間づくり・学級づくりを進める

- ・ 互いの違いを認め、一人ひとりが自立し、一人ひとりを大切にする仲間づくりを進める。
- ・ 共に支え合い高め合う仲間づくりの手だてとして班（小集団）を活用し、生活班を核とした仲間づくりを行う。そして、班から学級・学年へと広がる仲間づくりを進める。
- ・ 学級の中の身近な諸問題に気づき、仲間の問題を自分にかかわる問題として捉え、みんなで解決していこうとする意欲・態度・行動力を育てる。また、身近な生活の諸問題の解決の場として終わりの会や学級活動等の時間を活用する。

(4) 「生きる力」としての豊かな学力を持ち、自らの進路を切り開く力を育てる（学力保障）

- ・ 基礎基本の定着を図るとともに、「生きる力」としての学力を保障する。
- ・ 自らを生かす進路を選択でき、それに向かって努力できる生徒に育てる。
- ・ 進路、学力保障の視点に立った教科指導に努める。
- ・ 一人ひとりの学習のつまずきや理解の過程を支援できる学習指導や評価のあり方を研究する。

(5) 生徒の人権が大切にされた学校環境づくりを推し進める

- ・ あらゆる場面において、生徒と生徒、生徒と教師の関係が人権を尊重したものになるように努め、「人権がそこに現に生きている」状況を作る。

(6) 人権教育の視点に立った教科・領域・「総合的な学習の時間」の指導に努める

- ・ 各教科の学習指導の中で、人権のさまざまな力を身につけさせていく（例：国語—登場人物の心情、数学—論理的な思考、体育—公正な態度や協力、英語—異文化理解）。
- ・ 「総合的な学習の時間」の「人権」以外のテーマにおいても、人権教育の視点を盛り込み、人権教育の狙いを達成できるよう工夫していく（例：「環境」環境破壊による被害→人間の存続や人権に関わる問題につながる）。
- ・ 誤った発言を嘲笑するなどの差別的な言動、他の生徒の学習権をおかす言動に対しては、授業をストップしてでもその不当性を正すなど、常に人権教育の視点で授業に臨む。

(7) 全職員が「自らが置かれている社会的立場の自覚」を深め、人権教育観の確立を図る

- ・ 地区保護者、住民、隣保館との交流を密にして、差別の現実に関心を持って学ぶ姿勢を大切にす
- る。
- ・ 職員研修を充実させ、教師自らが同和問題を正しく認識して、人権教育の視点に立った教育実践の充実と指導力の向上に努める。

4. 各学年の指導目標

心の発達段階や意識の高まりに応じて、学年ごとに以下のような目標を立てて、年間の指導計画を立案する。

第1学年 何でも話し合える学級を作り、身近な問題を通して人権についての認識を深め、身近にある差別に気づかせ差別をしない生徒を育成する。

第2学年 仲間を大切にする学級を作り、主体的に行動ができ、基本的人権と差別に対する科学的認識を深め、差別を許さないという行動ができる生徒を育成する。

第3学年 みんなで支え合い高め合う学級を作り、人権とあらゆる差別問題についての認識を更に深め、民主的社会の実現のために努力できる生徒を育成する。

仲間づくりの意義

1. 人権教育の視点に立った仲間づくり

(1) 本校の目指す「仲間」とは？

身近な生活の中にある偏見や不合理、差別に気づき、見逃さず、注意し合えたり、一人の仲間の問題を自分たちに関わるみんなの問題として話し合えたりするような、支え合いや高め合いができる仲間である。

本校の生徒たちがこのような「仲間」となるために、一人ひとりの生徒を互いにつないでいく取り組み（教師の手だてや生徒の活動）が、「仲間づくり」である。

(2) 「仲間づくり」の具体的な評価

- ① 一人ひとりが自分自身の課題や願いを仲間の前で語り合えているか。
- ② 仲間同士で生活上の要求や注意をし合えているか。
- ③ 仲間として自分には何ができるかを考え、行動として応えていけているか。

この「仲間づくり」を通して、個々の生徒に「自らを正しい方向に変える努力ができる」自己教育力（自主自律）が育つと共に、仲間としての連帯感の高まりの中で自治のある集団へと成長していき、「みんなで問題解決に取り組もうとする」社会性が身につくと考える。

2. 仲間づくりにおける小集団（班）の意義と有効性

「仲間づくり」を進める上で、教師はいつも「狙い」に迫る意識づけをしていき、生徒を互いにつないでいくために、日頃から話し合いや組織的な集団活動を組むことが大切である。また、その過程や結果は必ず生徒自身のこととして評価させ、今後の「仲間づくり」への意欲づけとする。教師も生徒同士のかかわりの視点で集団や個人を評価していき、頑張れた部分はどんどんほめる。達成感と同時に今後の課題も明らかにしていく。

このような活動や評価、指導を明確にしようと思えば、全校、学年、学級という大きな集団のままでは一人ひとりの「場の保障」がなされにくく、個が埋没しがちになる。その中では、「もし間違えたら」とか「他が自分のことをどう思っているのか」といった不安を抱えることになり、個人の本音を出しにくい。よって生活上の問題点が表に出にくい集団に陥りやすい。そこで、班という小集団を作り、その中でのかかわりを通して行うことが、有効な手だてになると考える。

班で生活・学習することのメリット

- ① 班では、一人でも怠けたり離れてしまうと集団が機能しなくなるので、個の存在感がたいへん大きくなっていく。そこで必然的に仲間同士で気かけたり、助け合う場面が生じてくる。つまり、支え合い高め合う姿勢の大切さが生徒の意識の中に浸透していきやすい。また、一人ひとりの問題点も明確になり、深くかかわっていくことができる。
- ② 学級という大きな集団の中では自分の気持ちや辛い立場を明らかにできない生徒でも、班の仲間に対してなら出していける場合が多く、その思いに応えていくこともすぐにできやすい。この小さな達成体験の積み重ねが、やがては学級、学年と、より大きな集団の中で自己実現していこうとする意欲や力となり得る。
- ③ 学級をいくつかの班で構成し、係活動や週番活動をすることは、学級全体が組織的に活動することになり、学級活動の活性化とともに、生徒の自主性や社会性、自治能力を高めることにつながる。

朝の会、帰りの会

1. 朝の会

落ち着いた気持ちで一日のスタートを切る。

学習や生活に集中できる姿勢を作る。

- ・「あいさつ」「出席確認」「健康観察」を通して、互いに一日のスタートでの仲間のようすを確認し合う。
- ・「今日のめあて」を確認し、目標を持って生活をはじめる。
- ・「先生の話」で一日の主な生活場面での行動目標などを持たせていく。

※「出席確認」「健康観察」を行う場合には、生徒によって（〇〇くん、呼び捨て、ニックネームなど）呼び方を変えず、「〇〇さん」とか「〇〇くん」で呼びましょう。

朝の会プログラム

※ パン注は、8:30 までにすませておく。

★8:30 「朝の読書」開始（10分間）静かに各自読書をする。

（上着は脱ぐ。机の上には本だけ）

8:40 「朝の会」開始（5分間：司会室長）

1. あいさつ

「姿勢を正してください。これから朝の会を始めます。おはようございます。」

（立って行うか。座ったままで行うかは学年で話し合ってください）

2. 健康観察

「健康観察。保健委員、お願いします。」

（出欠確認は、「朝の読書」の時に担任が黙って行う）

3. 今日（今週）のめあての確認

「今日（今週）のめあては〇〇です。みんなで頑張りましょう。」

4. 諸連絡

「諸連絡、係、委員会からの連絡はありませんか。」

5. 先生の話

「先生のお話です。」

6. あいさつ

「姿勢を正してください。（または起立）これで朝の会を終わります。ありがとうございました。」

※8：45までに、提出物を、係の人または先生に出す。

※8：45までは、教室から出ない（パン注係は除く。）

2. 終わりの会

「仲間づくり」の狙いに沿って行う。

生徒同士の関わり合いを評価していく。

- ・「一日の反省」で友だちとの生活や学習、係の仕事、清掃など班や学級で取り組んだ場面での自分や仲間のようにすを振り返らせ、よいところは認め合い、問題点は指摘し合って解決を図る。このとき、他の班や学級の仲間に対する意見や要望も話し合い、出し合っていく。
- ・「先生の話」で一日の主な生活場面での活動の評価をしていく。

終わりの会のプログラム

終わりの会が始まるまでに

- * 黒板班：6限目の黒板を消す。
- * 集配班：「ライフ」・配布物を職員室に取りに行く。配るのは、会のあと。
- * 連絡班：後ろの黒板に明日の連絡を書く（昼休憩に行う）。
- * 各教科委員：明日の授業の準備を黒板に記入する（昼休憩に行う）。

★ 授業が終わって10分後 終わりの会開始（15分間。司会：室長）

1. あいさつ

「机の上をきれいにしてください（全員がきれいになるまで待つ）。

起立。気をつけ。これから終わりの会を始めます。お願いします。着席。」

2. 週番発表

「週番発表。週番班は『授業のようす』と『掃除の点検結果』を発表してください。」

「週番班に意見・要望はありませんか。」

3. 班会議

「今日一日を振り返って、班で3分間 話し合いをしてください。」

「話し合いが終わった班の発表者は、前に出てきてください。」

(水曜日)

「今週一週間の反省と来週の目標、新しい掃除場所の役割分担を話し合ってください。」

「話し合いが終わった班は、班目標を黒板に書いてください。掃除点検表は前に出してください。発表者の人は前に出てきてください。」

4. 班発表

「1班から今日の反省を言ってください。」（項目を決めて発表する）。すべての班の発表が終わったら、

「学級の問題として話し合うことはありませんか。」（学級で討論）

(水曜日)

「1班から『一週間の反省とこれからがんばりたいこと』を発表してください。」

すべての班の発表が終わったら、

「学級の問題として話し合うことはありませんか。」（学級で討論）

5. 諸連絡

「諸連絡。係・委員会からの連絡はありませんか。」

6. 先生の話

「先生のお話です。机を前に向けてください。」

★配布物（先生の話が終わったら、集配班は配布物を配る）

7. あいさつ

「起立。気をつけ。これで終わりの会を終わります。さようなら。」

※何か学級の問題が出てきて、すぐに話し合わなければならないときは、時間が過ぎても話し合いを続けていく。

◎終わりの会が25分間のときは、「3. 一日の反省」の班の話し合いや「4. 班発表」の所をふくらませていく。掃除場所もこの日に交代し、掃除分担なども決める。

※「学級の歴史」のやり方については、学年で話し合い、実施する。プラス面を出させるようにしたい。

《指導の要点》

- ① 学級経営方針に基づいた内容で、1年間の見通しを持って行う。
例) 1学期—しつけの場、2学期—問題提起の場、3学期—自立の場。
- ② 司会や班会議などの方法・手順を身につけさせる。
- ③ 班日誌、週番日誌、掃除点検カードなどの具体的な資料を使って討議させる。
- ④ 先生の話は、単なる連絡や管理的な注意ばかりではなく、課題の提示や意欲の喚起であり、活動の評価でありたい（事実に基づき、生徒をあらゆる角度から観察し、生徒の言動を価値づける評価でありたい）。
- ⑤ 生徒が互いに認め合う相互評価を取り入れるようにする。
学級の歴史づくり（学級のドラマ、成長の記録）。
- ⑥ 友だちの発言に対して、目・耳・心を集中させ、その意見を本当に聞ける状態を作らせる。
- ⑦ 指名の時は「〇〇くん」「〇〇さん」と呼び、呼ばれたら「はい」と返事をするようにさせる。友だちの「～してください。」の発言には、みんなで応えていく雰囲気を作っていく。

「学級開き」について

1. 「学級開き」の狙い

いろいろな願いや立場をもつ生徒たちが希望に胸を膨らませ、新しい学級に期待を寄せてやって来ます。そんな生徒たちの期待を受けて私たち教師は生徒と共に互いの願いを語り合い、それを大切に受けとめ合える民主的な学級集団をめざしていきます。この仲間づくりのスタートが「学級開き」です。

本校では、さまざまな立場で差別と立ち向かっていかななくてはいけない生徒たちがいます。このような辛い立場に置かれている生徒たちの願いが、学級の中心に据えられて、「身近な仲間の問題として」、さらには「自分自身にかかわる問題として」、一人ひとりが自分の生き方を考えていけたり、他の仲間にかかわっていけるような手だてが大変重要です。この仲間づくりを進めていくために、本校では身近な生活や社会の差別の現実をしっかりと見つめて自分の生き方や仲間へのかかわりを考えさせていく学習を柱にした人権学習をおこなっています。

2. 「学級開き」の進め方（実践例）

(1) 担任の第一声（自己紹介および所信表明）。

学級づくり（学級経営）の幕開けとして、感動的かつ印象深くなるようにします。担任としての自分を生徒に理解してもらおうとともに、担任としての学級に寄せる思いを熱く語ってください。新学年になって期待と不安を抱いている生徒に、「やる気」を持たせるような話をしましょう。

(2) 生徒の自己紹介

楽しくお互いが知り合えるような工夫を。

(3) 生活規律・学習規律について

プリント(生徒指導部作成)を使って指導する。

(4) 「学級開き」

① 資料・ビデオ等を使って、人権学習を行う（学年集会として行ってもよい）。

(例) 1 学年「願い」（本校卒業生の人権作文）

2 学年「曇りのち晴れ」（視聴覚ライブラリー）

3 学年「現在から未来へ」（本校卒業生の人権作文）

・ 資料を通して学習する中で、「今までの自分の生き方や仲間へのかかわり方」を振り

返らせ、みんなの願っている学級にしていくために「自分はどうしていききたいか」「仲間へどうかかわっていききたいか」を一人ひとりが考え、明確にしていく。

- ・ 教師の姿勢から「今年は違うぞ！」という意識を持たせる。

② 自分の生活を振り返り、それぞれの思いを全員が発表する。

①を受けて「こんな自分になりたい」「こんなクラスにしたい」という自分の願いを発言していきます（発言の前に、生徒に考える時間を与えてください。プリントなどに書かせるのも一つの方法です）。発表の仕方は、原則的には言える人から発言していく方法を取り、指名をしたり順番を決めたりはしません。発言の中で、自分の辛い思いや、みんなにわかってほしい、考えてほしい訴えのような内容が出ることがあります。そのときは必ず「今の発言に対して、みんなはどう思うか。」と学級全体へ投げかけ、発言した生徒に学級の生徒が思いを返していけるようにしてください。聞いている生徒みんなが真剣に受けとめて、応えていける取り組みにしていきたいと思います。

《 教師の基本姿勢 》

- ・ 自分はどうかということを言えることが大切です。ここで曖昧な発言や抽象的な発言、いい加減な発言などが出たら必ずかかわりを持ち、話し合い、他の生徒ともかかわらせていきます。この時の教師の姿勢を生徒はしっかりと見ています。これからの1年間を決めるんだという気持ちで臨みましょう。
- ・ 自分の立場を明らかにする発言や今までの自分自身を振り返った発言などは、その場でしっかりと評価して行ってください。
- ・ 意見を聞く側の姿勢も発言しやすい雰囲気を作るためには大切です。必ず発言する人の方をきちんと向かせて体全体で受け止めさせてください。
- ・ 差別的な発言やあきらめてしまっている発言などは、絶対に聞き流さずに、他の生徒に返したりその真意を尋ねたり励ましたりしてください。
- ・ 焦らずに待つことも大切です。また、どうしても言えない生徒に対しては、生徒同士でかかわらせるなどの配慮をお願いします。
- ・ 資料として用いたものから離れ、自分たちの生活の問題に目を向けていくのが望ましいと思います。

③ 担任の思いを語る。

生徒の願いを受けて、担任として応えていきながら、担任自身もこれからの姿勢や学級への思いを語っていき、共に1年間のビジョンを確認し合っていきます。そのとき、担任自身が一人の人間として偏見や差別とどう向き合っていくのかを、生徒たちに語ってやってください。ある意味では、担任の「反差別」の立場宣言です。

(5) 学級目標を作る（後日でもよい）

学級目標とは、一人ひとりの「どんな学級にしたいか」という願いをまとめた、その学級に所属している生徒たちが求める集団像です。そして、学級目標は「すべての生徒に何らかの意味でプラスになるもの」であり、「どのように対処したらよいのか判断するよりどころ」であり、「行動の選択の尺度」となるものです。また、担任としても「あらゆる学級生活の場で生徒を指導できるもの」でなければなりません。したがって、学級目標のことばは、抽象的なものやことば遊び的なもので終わってはいけません。仮にそういったものになった場合は、必ず具体的な努力点を盛り込むようにしましょう（「学級目標」と「学級スローガン」を分けて考えてください）。

学級目標を決めるときには、一部の生徒の意見だけで決まることのないよう配慮してください。一人ひとりの願いをまとめる場面で班を生かすことも考えられます。

(6) 班づくり

(7) 朝の会・終わりの会のあり方・進め方

pp. 16～18 参照。

3. 指導上の留意点

実践にあたっては、各学年で検討して進めてください。その際、これだけは押さえていくんだという「狙い」や「指導のポイント」をきちんと確認し合ってください。特に、担任の第一声と資料について確認をしておいてください。

また、1年間の学級の仲間づくりを見通して、この「学級開き」に臨んでください。「これが1年間の学級経営の方向性を左右するんだ」というくらいの気持ちで生徒と向き合っていきましょう。

4. その他（例）

教室環境について 明るく整った雰囲気の中で、新学期のスタートを切れるとよいでしょう（掲示物、机などの整頓、鉢植え・花など）。また、教師が教室に入ったときに、机の列の乱れやごみが落ちていたりしたら、それらをきちんとしてから学習や指導に入るようにしましょう。

学級通信について 家庭との連携をとるためにも、学級通信は大きな役割を持ちます。特にクラス替えのある新学期は、どんな友だちと同じクラスになっているのか、担任の先生はどんな先生なのか、保護者としては非常に気になるところです。クラスメートの名簿と担任の紹介を載せた簡単なプリント（学級通信と兼ねてもよい）は、全クラスが出せたらいいですね。

人権弁論について

総合的な学習の時間「仲間に自分の思いを伝える」～人権～〈全 18 時間〉

1. 狙い

基本的人権についての理解を深めると共に、豊かな人権尊重の精神と実践力を養う
一人ひとりの願いをみんなの願いにできる仲間になろう

- ① 人権に対する自分の考えや抱えている問題をまとめて、仲間に訴えていく力を育む。
- ② 仲間の意見を受けとめ、それに対して自分の考えを深め、応えていく態度を養う。
- ③ [1 年] 身近な問題を通して人権についての認識を深め、身近にある差別に気づき差別をしない態度を育成する。
[2 年] 基本的人権と差別に対する科学的認識を深め、差別を許さないという行動をとろうとする態度を育てる。
[3 年] 人権とあらゆる差別問題についての認識をさらに深め、民主的社会の実現のために努力できる態度を育成する。

2. 主催 人権教育部

運営 学級担任、各学年団（学年弁論の運営からは文化委員会）

3. 弁論内容

人権にかかわるものであること。特に自分自身が抱えていることや自分の身近なかかわりの中で見たり、聞いたり、感じている人権問題に対する弁論であること。

- <例> ・ 自分の身近にある偏見や差別について
- ・ いじめについて
 - ・ 部落差別について
 - ・ 体にハンディキャップをもつ人に対する差別について
 - ・ 外国人に対する差別について など

4. 人権弁論に取り組む教師の基本姿勢

- ・ 事前事後の指導も含めて、学年会などで十分に計画を立てて進めていく。
- ・ 生徒一人ひとりが、「自らの置かれている社会的立場の自覚」を深めるきっかけとなる重要な場であると認識して進めていく。
- ・ 自分の抱えている問題について「自分の立場を明らかにして」訴えていく生徒が毎年いるので、必ず事前に一人ひとりの弁論の草案や原稿には目を通しておき、必要なら

ば本人や保護者と綿密に話し合いながら進めていく。

- ・ この取り組みはコンクールではなく、仲間の人権意識に触れて、それについての自分の立場や考えをはっきりとさせて応えていくのが目的である。したがって、弁論として体裁がすぐれたものをただ単に評価していくのではなく、形が整っていないでも自分の立場を深く自覚した弁論や身近な仲間について真剣に訴えている弁論を大切に取上げて、話し合わせたり、評価をしていきたい。

人権弁論で互いの思いを話し合える仲間

～身近な生活の中にある偏見や差別を見逃さず、
みんなでなくしていける3年生になろう～

私たち箕蚊屋中3年生は、これまで人権学習を通して、さまざまな差別と闘っている人たちの生き方に学び、自分自身や身近な人達の行動や心の中にある差別に気づき、それをみんなでなくしていこうとする気持ちや行動力を身に付けていくためにがんばってきました。すべての人の人権を守り、一人ひとりの心と命を大切にすることは、私たちみんなの共通した願いであると同時に、私たちみんなの責務でもあるはずです。いつ誰が差別されるかわからない世の中を憎み、まず身近なところから差別をなくしていくための動きを、みんなで一つになって始めていくことが大切なのです。

今回の人権弁論を機会に、改めて人権について考えてみましょう。今、私たちは学んだことを実行できているのでしょうか。自分の身の回りに偏見や差別は見られなくなってきているのでしょうか。本当に仲間を大切にしているのでしょうか。一人ひとりの思いを、班の人に、学級の人に、さらには学年、学校の人たちに伝え、「誰もが大切にされ、伸ばし合える」仲間づくりをしましょう。たとえば、こんなことについて考えてみましょう。

- ・ あなたのクラスや、あなたの家族の中に、今、寂しい思いをしている人はいないだろうか。
- ・ あなたの思いは、周囲の人に理解され支え合っているだろうか。
- ・ クラスの中で、いじめが見逃されてはいないだろうか。
- ・ クラスの中で、「この人は偉い人」というようなランク付けがされていないだろうか。
- ・ 障害者差別につながる言動は見られないだろうか。
- ・ 高齢者の方をばかにしたりする言動はないだろうか。
- ・ 部落差別について見たり聞いたり、許してしまったりしたことはないだろうか。

頭の中だけで考えたこと、わかりきっていること、誰かの考え(本やテレビの内容)だけをそのまま述べても、みんなの思いは深まりません。自分や周囲の人達の体験から話したり、他の

人が気づきにくいことを指摘したりして、受けとる人の心に自分の思いが届く弁論にしましょう。

まず弁論を書く前に、次のようなことについて自分の思いをまとめてみましょう。そして、それをもとに自分の気持ちをはっきりと確かめ、原稿用紙に向かっていきましょう。

3年（ ）組（ ）番 氏名（ ）

- ① どういうことについて訴えたいですか。

- ② そのことについて、これまでどのような体験がありましたか。

- ③ そのことについて、あなた自身はどうかかわって（行動して、考えて）きましたか。またこれからどのようにかかわっていきたいですか。自分のとるべき立場をはっきりさせて書いてみましょう。また、みんなにわかってほしいこと（願い）があれば、それも書いてみましょう。

人権教育の授業(道徳・学級活動)実践

本校では、年間約20時間人権学習を計画している。学年ごとに話し合いを行い、どのクラスも同じような歩調で学習を進めている。人権学習の中で、生徒一人ひとりが自分自身を振り返り、意見をまとめ、発表する場面が多い。そうした活動の中で、仲間の意見を大切にし、よりよいクラスを作っていこうという意識が生まれると考えている。

以下に、その一部を紹介する。

1. 1年の学活の例

(1) 題材名 「差別の現実はどう向き合うのか」

(2) 狙い 同和問題のアンケート結果から、箕蚊屋中学校生徒の部落差別に対する意識の現実や実態を知り、その中での問題点を見つけ、部落差別をなくすために、自分達にできることを考える。

(3) 準備 アンケート結果、ワークシート、ホワイトボード。

(4) 学習活動

① アンケート結果を見て考える

- アンケートの内容や結果を確認する。
- ワークシートに気の付いたことや問題点を書く。
- 問題点を出し合ってまとめる。なぜ問題なのかも考える。

② 問題点としてあがったことについて話し合いをする。

- 問題点を絞り、考えさせる。
- ワークシートに自分の考えを書く。
- 各班で、解決策を出し合ってまとめさせる。
- アンケート結果を含めて、部落差別解消のために自分にできることを考えて書く。
本時の授業の感想も書く。

③ 本時のまとめをする

- 学習のまとめとして話をする。身近にある差別についても触れ、授業者の思いを語る。

2. 2年の道徳の例

(1) 主題名 差別事象に学ぶ

(2) 資料名 「身近なところから」 (出典：米子市同和教育資料「あおぞら第1集」)

(3) 狙い 身のまわりにある差別に気付くとともに部落差別の本質を見抜き、差別を許さない気持ちを育てる。

(4) 学習過程

① 資料を読んで考える。

○ Aさんのどの発言がおかしいですか。

○ Aさんの発言に対してどう思いますか。

・許せない発言。

・同和地区の人に対して偏見がある。

○ 「みんなにも、今回Aさんが僕に言ったことばが、ただの個人的なけんかの悪口とどこが違うのかってことをわかってほしいんだ。」とあるが、どういうところが「個人的なけんか」と違うのですか。

○ このあと、クラスの生徒が一人ひとり立ち上がって発言していますが、あなたたちならどのように発言（または行動）しますか。考えてみよう。

② 自己を振り返る。

○ 自分は身のまわりの差別に対して、反差別の立場に立ってどんな行動に移していきますか。

③ 教師の話聞く。

3. 3年の道徳の例

(1) 主題名 生命尊重

(2) 資料名 ドナーカード

(3) 狙い 臓器移植についてさまざまな角度から考えることにより、生命の大切さに気づき、自他の生命を尊重しようとする態度を育てる。

(4) 学習過程

① ドナーカードについての知識を確認する。

○ 「ドナーカード」について知っていることをあげてみよう。

② 資料を読んで話し合う。

○ 高井さんと新見さんの考え方の違いは何だろうか。

○ 臓器提供でどう考えるか、班で話し合ってみよう。

③ 2人の筆者の意見から学んだことや、今日の学習で考えたことや感想を書こう。

授業づくり部会の取り組み

国語科の取り組み

1. 問題解決学習の取り組み

(1) 育てたい力

「見通しを立てて、自ら進んで学習に取り組む力」

(2) 具体的な取り組み

- ・ 単元ごとに「学習の手引き」を作成し、使用させる。
- ・ 生徒個々の初発の感想（小説）や疑問点（説明文）から学習をスタートさせ、小集団を使いながら 課題解決を図るような学習展開を考える。

〈事例〉第 1 学年 6 単元「主題を考えよう」

学習材「カメレオン」

1) 学習の手引きを作り、生徒に 6 単元の学習の流れを知らせる

- ① 「カメレオン」を読んで、初発の感想を書く……………1 時間
- ② 感想を発表し合い、感想の中から、疑問点・問題点を取り上げる ……1 時間
- ③ 課題や主題について考える ……3 時間
- ④ 学習のまとめをして、学習後の感想を書く ……1 時間
- ⑤ 「指示する言葉」について知り、問題をする……………1 時間
- ⑥ 「漢字のしおり③」で画数の考え方を知り、数えたり調べたりする……………1 時間

2) 生徒個々の初発の感想より（課題として取り上げる必要のあるもの）

- ・ 会話文が多くて、誰が何を言っているのか分からない。
- ・ 言っていることがコロコロ変わって訳が分からない。
- ・ 話の中にカメレオンが出てこないのに題名がカメレオンと言うのはなぜか分からない。
- ・ 難しいことばがあって意味がよく分からない。
- ・ 犬を大切にするように作者は言っているように思った。

3) 課題解決に向けて、個人や小集団で考える。

- ・ 会話文について、誰が言ったものなのか、まず個人で考えて「 」の上に名前を書く。次に全体で確認し合う。配役を決めて朗読をする。
- ・ 登場人物像を全体で考える。みんなの意見を参考にして、感想文の中に自分の考えを書く。
- ・ 主題について、まず個人で考える。次に小集団で意見を出し合い、考えてまとめる。小集団ごとの意見を出し合う。全体でまとめる。

(3) 成果と課題

- ・ 生徒に学習の手引きを示すことにより、単元ごとの学習の流れが分かって、毎時間の授業の流れがスムーズに行く。
- ・ 個人の意見の問題意識の軽重が、小集団の中で意見交換されるうちに、考え違いやピント外れな部分が削除されたり、重要な内容について共に考えが深まったりまとまったりして非常によかった。時間の無駄が省ける。
- ・ 小集団の中での話し合いの進め方について、誰でもができるようになるにはまだ時間がかかる。
- ・ 小集団でまとめられた意見を発表するだけで、その後の意見交換が不十分で終わることがある。

2. 協同学習の取り組み

(1) 育てたい力

「互いに意見を述べ合うことで自分の考えを深める」

(2) 具体的な取り組み

- ・ 小集団による話し合い活動。
- ・ 同じ課題を持つ生徒同士による小集団での課題追求学習。

〈事例〉第2学年 単元「表現を味わおう」

学習材「走れメロス」

1) 学習の流れ

- ① 作品作者についての紹介と通読（一斉指導）……………1時間
- ② 本文を場面ごとに分け、登場人物の心情や主題について考える……………2時間
小集団の学習：全体を7つの場面に分け第1場面を全体で1時間、残りの6つの場面を各班で1時間かけて話し合う。意見交換、教え合い、交換した意見をまとめるなど。
- ③ 班での話し合いのまとめの発表……………2時間
学級全体での学習：班での話し合いの成果を学級全体に発表する。それに対し聞いていた生徒は意見や疑問点を発表する。
- ④ 自分の感想をまとめ、授業を振り返る……………1時間
個人の学習。

2) 生徒の感想（今回の授業の形式について）

- ・ 班で話し合いながら話の内容が徐々にみえてきた。
- ・ 自分が思っていたことを覆されたとき、「会話ってすごい」と思った。
- ・ みんな自分と違う視点で物事を考えていて、色々な意見が出た。

- ・ 疑問に思ったことをみんなで話し合い、解決できたことが印象に残っている。
- ・ 少人数での相談しながらのまとめは意見も出やすくよかった。班全体での発表も一人で発表するより言いやすくよかった。

(3) 成果と課題

- ・ 班で話し合いをする前に個人での読みとりを行った。そのため班になったとき自分の考えを発表しやすかった。
- ・ 班ごとに担当する場面が異なるため、自分たちに割り当てられた場面の読みとりに責任を持たなければならない。そのため、密度の高い意見の交換、話し合いができた。
- ・ 小集団での話し合いは協力して円滑に進めることができるようになってきた。しかし、それを学級全体の前で発表、さらに発表した読みとりに対して意見や疑問点をあげるといった点においては課題点が残されている。班での意見交換のように、自然に意見の発表ができる授業づくりを目指していきたい。

第 2 学年 3 組 国語科学習指導案

平成 16 年 10 月 21 日 (木) 6 限

場所：2 年 3 組教室

指導者：大里守

1. 単元名 「さまざまな情報を役立てよう」

学習材 「小さな労働者」「神奈川沖浪裏」

2. 単元設定の理由

21 世紀を迎え、情報化と並び切実に求められているのが国際化である。インターネット等の普及で今や情報は世界を駆け巡る。子どもたちは居ながらにして、世界と触れ合うことが可能な時代に生きている。情報化社会は、そのまま国際化社会でもある。本単元は、説明的な文章を情報として読むことを軸に構成されている。正確に読み取ったあとは、その情報をいかに役立てていくかのノウハウを身につける必要がある。

中学 2 年生の 2 学期ともなると、生徒の中には入学当初の心意気はもちろん、進級時の緊張感もなくなり、中だるみの状態になりがちである。すでに学習に対して苦痛感や嫌悪感を持つ者も残念ながら出てきている。特に説明的な文章の読解においては、意欲的に取り組めない生徒が多く出てくる傾向にある。本学級は、多くの生徒が授業に前向きに取り組むことができるが、発表や話し合いにおいては、活発な意見交換をすることができない傾向にある。

本単元では、説明的な文章を読解のみで終わらせず、自分の表現に役立たせる情報として読み取り、表現活動につなげる活動として設定している。文章読解においては、作者の

視点や表現方法を捉えさせ、表現活動においては、それらを活用して自分の考えをわかりやすく表現するよう指導していきたい。指導にあたっては、個人の学習活動の後に班での話し合い活動を取り入れ、いろいろな意見を聞くことで考えを深めたり、お互いに書いたものを読み合うことで自分の表現に役立てたりできるようにしていく。また、学習計画および自己評価表を利用させることにより、1時間ごとや単元全体の狙いを意識させながら学習に取り組ませていきたい。

3. 単元の目標と評価規準

さまざまな文章から情報や表現方法を読み取り、話し合いの中でさらに考えを深め、絵や写真などを示しながら書く文章の書き方に役立てる。

国語への関心・意欲・態度 (ア)	話す・聞く能力 (イ)	書く能力 (ウ)	読む能力 (エ)	言語についての知識・理解・技能 (オ)
学習材に関心を持ち、写真や絵と文章を関連させて自分なりに理解しようとする。課題に意欲的に取り組み、学習に集中することができる。	自分の考えや感想を相手に分かりやすく伝えたり、人の意見を正しく聞き取ったりして、考えを深めることができる。	一枚の絵や写真についての説明を、自分の感想を交えながら分かりやすく書き表すことができる。	文章に書かれていることを、写真や絵と関連させながら、表現に即して正確に読み取り、整理することができる。	筆者の文章の書き方から、その見方や書き表し方を学び、自分の表現に役立てることができる。

4. 単元の指導計画・評価計画 8時間扱い、本時 5/8 (○数字は時間数)

学習活動・学習内容	具体的評価規準 (観点:評価方法)
1次 「小さな労働者」を読み取る。	<ul style="list-style-type: none"> 学習材に関心を持ち、課題に意欲的に取り組んだり、進んで話し合いに参加することができる。(ア:観察) 話し合いの場面で、自分の意見を相手に分かりやすく伝えたり、人の意見を正しく聞き取ったりして、考えを深めることができる。(イ:観察) 文章を読んだ感想や、ルイス・ハインの紹介文、フォトストーリーなどを作ることができる。(ウ:ワークシート) 表現に即して、あらまし、ルイス・ハインの言動、ハインの写真に託した思いなどを捉えることができる。(エ:ワークシート)

	思いを読み取り、文章にまとめる。	<ul style="list-style-type: none"> ・ 筆者の書き表し方を参考にしながら、ルイス・ハインの紹介文やフォトストーリーにその手法を生かすことができる。（オ：ワークシート）
2次 「神奈川沖浪裏」を読み取る。	<p>④ 全文を通読し、絵についての筆者の見方を、表現をpushしながらまとめる。</p> <p>⑤ 筆者の説明の仕方に学び、自分の表現の参考にする。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・ 筆者の絵についての見方や説明の仕方の特徴を読み取り、自分の視野を広げようとする。（ア：観察） ・ 話し合いの場面で、自分の意見を相手に分かりやすく伝えたり、人の意見を正しく聞き取ったりして、考えを深めることができる。（イ：観察） ・ 筆者の文章展開の仕方を理解することができる。（エ：ワークシート） ・ 筆者の文章の書き表し方から、その視点や手法を見つけることができる。（オ：ワークシート）
3次 自分の好きな絵や写真について簡単な文章を書き、紹介し合う。	<p>⑥⑦ 自分の好きな絵や写真について、それがなぜよいか書く。</p> <p>⑧ 実際に絵または写真を見せながら、紹介し合う。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・ 学習したことに基づいて、絵や写真についての説明を意欲的に書くことができる。（ア：観察） ・ 自分の書いた文章を分かりやすく伝えたり、人の説明を聞き、感想を発表することができる。（イ：観察） ・ 絵や写真についての説明を、自分の感想を交えながら分かりやすく書き表すことができる。（ウ：ワークシート） ・ これまでに学んだ視点や書き表し方を自分の文章表現に役立てることができる。（オ：ワークシート）

5. 本時の指導計画

(1) 本時目標

筆者の説明の仕方に学び、自分の表現の参考にする。

(2) 指導過程

学習活動・学習内容	形態	☆ 評価規準・方法・観点と、その支援 →△ →▽ ○ 指導上の留意点
<p>1. 本時の学習の狙いを確認する。</p> <p>課題：筆者の文章を徹底解剖して、うまい表現を盗み、自分の表現（作文）に役立てよう！</p>	一斉	○ 具体的な文章表現から筆者の説明の仕方を見つけ、自分の表現の参考にすることを確認する。

<p>2. 本文前半部分を読んで、おもしろい表現、参考にしたい表現に線を引き、そのように感じた理由や使われている表現技法について書き表す。(ワークシートを使用)</p> <p>個人で考え書く。</p> <p>↓</p> <p>班で意見交換する。</p> <p>↓</p> <p>ホワイトボードを使って全体で発表する。</p> <p>3. 自己評価し、本時の学習を振り返る。</p>	<p>個人</p> <p>班</p> <p>一斉</p>	<p>☆〔言語〕 次のような表現に注意して、筆者の絵の見方や説明の仕方を捉えることができる。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・次の瞬間 ・ざっぷーん！ ・カメラだったら ・しかも ・もちろん ・すごいなあ ・え、 ・というんで ・念仏がなんぼのもんじゃ (ワークシート) <p>→△ より多くの表現について着目し、その理由についても詳しく書き表すよう支援する。</p> <p>→▽ いくつか例を示し、似たような表現を見つけるよう支援する。</p> <p>☆〔話す・聞く〕 ワークシートに書いたことをもとに進んで発言したり、人の意見をしっかりと聞き、考えを深めることができたか。(観察)</p> <p>→△ 自分が発言するばかりでなく、他の生徒の発言を促し自分の考えを深めていくよう支援する。</p> <p>→▽ 自分が書いたものをもとに、あるいは人の発言を聞いて考えたことを発言するよう支援する。</p> <p>○ 自己評価表の項目に5段階で記入させ、本時の学習の狙いが達成できたかどうか確認させる。</p>
--	------------------------------	--

6. 授業の考察

(1) 単元の見通しと評価について

本単元「さまざまな情報を役立てよう」は、指導計画にある通り、大きく3つの部分に分かれている。第1～2次では、学習材「小さな労働者」「神奈川沖浪裏」を使って、それぞれ写真や絵について紹介する文章の書き方について学び、第3次では、その書き方を参考にして、自分で文章を書いていく。したがって、第1～2次で漠然と読解に取り組んでいては、第3次で表現を工夫した文章を書くことはできない。生徒にあらかじめ、単元全体の狙いと学習の流れを理解させておくことが必要になる。今回、単元全体の狙いと1時間ごとの学習内容を示した学習計画兼自己評価表を利用させたことは、「最終的に自分が何をしなければならないのか」「そのために今どういうことに気をつけて学習しないといけないのか」ということを生徒に意識させることができ、効果があったと思われる。ただ、生徒が自己評価したものを、教師がどのように評価・指導していくのかという点において課題が残った。

(2) 小集団(班)による学習について

国語科の「読む」活動における小集団(班)学習の有効性は次のように考える。個人で

読み取ると、限られた範囲の読み取り、または誤った読み取りになってしまうが、それを持ち寄って何人かで意見交換すると、明らかに間違っている読み取りは話し合いの中で消去され、複数の意見をぶつけ合うことでさらに深く読み取りができる。本時の学習では、学習材の中のおもしろい表現や自分が文章を書く上で参考にしたい表現を見つけ出すという活動において小集団（班）を利用した。さまざまな表現に着目することができたことはよかったが、「自分が文章を書く上で参考にしたい」ということがあったため、「自分はあまりよいは思わないけど人がよいと思うのならまあいいか」と思ったのか、少し取り上げる表現が多くなりすぎ、適当ではない表現もかなり残ってしまった。

(3) 学級全体での発表場面における協同学習について

班で話し合ったものをホワイトボードに書いて黒板に掲示したが、時間の関係で生徒は口頭で発表しなかった。授業を参観された他校の先生方は生徒の発表を期待されていたようだが、初めからその予定はなかった。ホワイトボードを見てわかるものをわざわざ読ませるのは無意味だと考えたからである。しかし、教師が一方的にホワイトボードに書いてあるものを拾い上げて確認していくのも、よくある「教師が説明し生徒は黙って聞いている」一斉授業のようであり、「協同」学習とは言い難いものになってしまった。「なぜこの表現を取り上げたのか」という理由を聞いて答えさせてみたものの、これも一問一答形式に終わってしまった。②で述べたように今回の学習が読解の深まりを求めるものではなく、表現の多様さを求めたことが原因のように思われる。それを考えれば、他の人・班が発見した表現とその説明を聞き、自分の表現の参考にすることができれば、それはそれでいいのではないかという考え方もできる。しかし、ホワイトボードに書かれている表現に対して他の班の生徒から意見や質問が出ることを期待していただけに、こちらがイメージした授業とはならなかった。

第2学年2組 国語科学習指導案

平成16年6月23日（木）5限

場所：2年2組教室

指導者：田中由美

1. 単元名 「読書で視野を広げよう」

学習材 「僕の防空壕」「想う」

2. 単元設定の理由

読書を生活に役立て自己を向上させるには、目的や意図に応じて文章を読んだり、広い範囲から情報を集め、効果的に活用することができるようにする必要がある。読みの学習が生徒の読書意欲につながり、日常の読書活動に広がっていくことが望ましい。本単元で

は、一つの小説の読みから発展的に他の文章を読んだり、読書の感想や感動した表現を紹介し合うことで読書への興味関心を高めていきたいと考えている。

本学級の生徒は去年より朝読書に取り組んでいる。朝の会の始まり 10 分間、ほとんどの生徒が自分の好きな本に集中している。ところが中には、読書の習慣が身につかず自分勝手な時間をすごしている生徒も未だにいる。授業でも長い物語や小説を読んで初発の感想を聞いてみると、登場人物を取り違えたり、言葉や漢字が難しくて意味が分からないというようなことが出てくる。お互いの感想や意見を言い合う中で、作品の魅力について気づいたり主題を捉えたりして、読書への興味関心が高まるように働きかけていきたい。

本単元では、戦争や平和について考えさせられる小説と、生きるということについて改めて考えさせられる随筆を読むことによって読書の幅を広げ、深く考えるきっかけにして欲しい。一つの作品をみんなで読み、お互いの感想や意見を言い合うことによって、自分だけでは理解し得なかったことに気づいたり読書のおもしろさを感じたりすることができる。読書で学んだことを自己の人間形成にいかしたり、進路について考えるきっかけにして欲しい。

3. 単元の目標と評価規準

読書を通して、人間、社会、自然について視野を広げ、自分の生き方について考えを深め、よりよい人生が送れるようにしていく。

国語への関心・意欲・態度 (ア)	話す・聞く能力 (イ)	書く能力 (ウ)	読む能力 (エ)	言語についての知識・理解・技能 (オ)
国語に対する関心を深め、進んで話し合ったり工夫して書いたり、読書したりして、普段の生活の中で生かす。	自分の見方や考え方を深めて、目的や場面に応じ、説得力のある表現の仕方に注意して話したり聞いたりする。	さまざまな材料を基にして考えを深め、自分の立場を明らかにし、論理の展開を工夫し、説得力のある文章を書く。	目的や意図に応じて文章を読み、書き手の論理の展開を捉えて内容を理解し、自分の意見を持つ。	音声・語句・語彙・文法・漢字など国語に関する基礎的な事項や特質について理解し、知識を身に付ける。

4. 単元の指導計画・評価計画

6 時間扱い、本時 2/6 (○数字は時間数)

学習活動・学習内容	具体の評価規準 (評価方法)
1 次 「僕の防空壕」を読み、読書への関心を高める。	<ul style="list-style-type: none"> 全文を読み、初発の感想を書く。(エ：ノート) 学習材に関心を持ち、課題に意欲的に取り組んだり、進んで発表することができる。(ア：観察)

	③ 作品に関連した他の本を読む。	<ul style="list-style-type: none"> ・ 話し合いの場面で、自分の意見を相手に分かりやすく伝えたり、人の意見を正しく聞き取ったりして考えを深める。(イ：観察) ・ 難語句について調べようとする(オ：ワーク)
2次 「想う」を読み、視野を広げる。	① 自分の考えと比較して読み、自分の生き方を見つめる。 ② 同じテーマを持つ作品を読む。 ③ 自分が見つけた生きる上でのヒントを発表する。	<ul style="list-style-type: none"> ・ 全文を読み、自分の考えと比較して感想が言える。(イ：観察) ・ 印象に残った部分を抜き出すことができる。(ウ：ノート) ・ 筆者の論の展開を、話題として提示されていることながら整理しながら読み取ることができる。(エ：ワークシート) ・ 文章中の的確で豊かな語彙の使い方や優れた表現に着目し、紹介することができる。(オ：観察)

5. 本時の指導計画

(1) 本時目標

印象に残った箇所や、主人公の少年についての感想を発表しながら作品の魅力に気づく。

(2) 指導過程

学習活動・学習内容	形態	☆ 評価規準・方法・観点と、その支援 (→△ →▽) ○ 指導上の留意点
1. 本時の学習の狙いを確認する。 課題：具体的な文章表現を捉えて、作品の素晴らしさを知る。	一斉	○ 具体的な文章表現をあげることによって、主人公の気持ちが分かったり作品の魅力に近づけることを知らせる。
2. 心に残った部分や主人公の気持ちが分かる部分を見つけて感想や意見を言う。 ・ アンダーラインを引く ・ 共通しているところや意	個人	☆ [読む] 印象に残った部分や主人公の気持ちの分かる部分を見つけて自分の意見を持つ。(教科書・ノート) →△ より多くの表現について着目し、自分の意見をメモするように支援する。 →▽ いくつかの例を示し、主人公の気持ちの分かる部分を見つけるように支援する。 ○ 全員が発表し、共通していることと新たな発見に

<p>外な発見をまとめる。</p> <ul style="list-style-type: none"> 作品のよいところや主人公の気持ちの分かる部分について確認することによって視野を広げる。 <p>3. 自己評価をして、本時の学習を振り返る。</p>	<p>ついてまとめるように話す。</p> <p>☆ [話す聞く] 分かりやすく伝えたり、新たに気づいたことについてはメモをとる。(観察)</p> <p>→△ ことばを添えて話したり、メモに意見を付け加えることを言う。</p> <p>→▽ 話す人の方を見たり、メモを取るように言う。</p> <p>○ 本時の学習の狙いについて自己評価と他の班の評価もするように言う。</p>
---	--

6. 授業の考察

(1) 単元の見通しと評価について

本単元「読書で視野を広げよう」は、平和教材の小説と人生について書かれた随筆を読むことによって、日常の読書生活力を育成し、読書を通して、学習者が視野を広げ、深めていこうとする態度を育てることを学習の狙いとしている。読書単元なので、内容の読み取りをしていくのではなく、心に深く残ったことがらや、初めて知ったこと考えたことなどを、お互いに発表し合うことによって、教材の意義や価値について共通に確認することができる。教材に入る前に、単元の見通しを立て学習の手引きを共通理解することは、生徒にとって学習を主体的に進めることのできる大切な押さえになる。評価についても机間巡視をしながらできる教科書への書き込みや、話し合いの場面での関わり方など、観察で分かる面が多い。座席表を作り、気のついたことをその時書き込んで、後で評価をする時の材料にできる。学習の目当てが評価につながるように工夫した。授業のまとめでは、生徒が自分の評価と他の班の評価ができるようにワークシートを活用した。ところが、観察で評価できると考えていたのが実際やってみると、かなり難しく、話し合いの場面でのどの生徒についても観察し評価することは不可能である。見落としていることがかなりあると思われる。記述で残るものはいいのだが、話し合いの評価については、生徒同士の評価表がたよりになると思われる。

(2) 小集団(班)による学習について

一人読みでは、思い込みや偏りがありがちだが、小集団で話し合うことによっていろいろな思いや意見を聞くことができ、読み取りの幅や深さが期待できる。同じ事を考えていたり、間違っていた場合には生徒同士で教え合いができたりにして、読書のおもしろさを味わうことができる。時間があまり取れなくても、教材の全体的な読み取りが自然にできる利点もある。また、話し合いの中で人と人との関わりや話し合いの自然なルールなど学ぶこともできる。小集団では話しやすいということもある。話すことが得意な人や、感想や意見をすぐに持てる人が、いつでも中心になってしまうことがありがちなので、まず、自分で考える時間を十分に取る必要があるが、時間の配分上難しい面もある。また、話し合いを進める人やまとめて発表する人など、小集団での役割分担など計画的にできたらいいと反省している。

社会科の取り組み

1. 問題解決学習の取り組み

(1) 育てたい力

「課題を設定できる力」：資料などから課題（問題点）に気づくことができる力

「課題を解決するための資料などを収集できる力」：必要な資料を集めたり、友だちの意見などを参考にしたりできる力

「課題に対する自分の考えを表現できる力」：自分の考えをまとめて発表できる力

(2) 具体的な取り組み

- ・ 単元に関連する資料などから、問題点を見つけ課題を設定する。
- ・ 課題に対する自分の意見を持ち、生徒相互の意見交換を通して理解を深める。
- ・ 図書やインターネットなどを活用する技能を身に付ける。
- ・ 課題に対する自分の考えをまとめて発表する。

〈事例〉第3学年 単元 「個人と社会生活—家族と私」

◎学習課題 「男女共同参画社会」実現のために大切なことは何だろう？

1) 学習の流れ

- ① 自分の未来の家庭について、家庭内での男女の役割分担や、夫婦別性について具体的に考える（アンケート形式）。
- ② クラスでのアンケート結果をもとにして、その傾向や課題（問題点）について考える。
- ③ 「男女共同参画社会」実現のために大切なことを考える（個人→班→学級→個人）。
- ④ 友だちの意見を参考にしながら自分の考えを深める（ワークシートに記入）。

2) 生徒のワークシートより

- ・ 男女が互いに相手をよく知って助け合う。それが当たり前の社会になればいいと思った。
- ・ 男子女子に関わらず、個人の能力が十分に生かせる世の中がいいと思う。憲法に書いてある両性の平等が実現できる社会になってほしい。
- ・ 女性が働きやすい社会になってほしい。育児や家事について男性の協力が必要だと思う。

(3) 成果と課題

- ・ クラスのアンケート集計から、男子と女子の立場で夫婦別姓などについての考えに

違いがあることは実感できたが、そのことを適切で明確な課題設定に結びつけるとい
う点では今後の工夫・改善が必要である。

- ・ 生徒相互の意見交換を通して、個人の考えを深める生徒は増えている。今後は、活
動状況の観察を丁寧に行うなどして、より多くの生徒が活発に発表できるようにして
いきたい。
- ・ 生徒相互の評価活動なども取り入れ、より主体的な学習活動へとつないでいきたい。

2. 協同学習の取り組み

(1) 育てたい力

「自分の意見を小集団の中で表現できる力」

「生徒相互の意見交換を通して、互いに高め合える力」

「学習活動に貢献しようとする力」

(2) 具体的な取り組み

- ・ 個人の学習（作業学習活動、話し合うための準備の学習活動など）
- ・ 小集団の学習（話し合い活動、調査活動、発表活動など）
教え合い→個人の意見を発表する→意見をまとめる→学級全体に発表する
- ・ 学級全体での学習活動（生徒相互の意見交換など）

〈事例〉第1学年 単元「身分社会のしくみ」

◎学習課題 武士がその他の民衆を260年も支配できたのはなぜか？

1) 学習の流れ（導入部分省略）

① 教科書の中から課題に関わる部分を見つける（個人の学習）。

武士がそれぞれの身分に対して行ったことを分類する（町人に対して、百姓に対し
て、差別された人々に対してなど一ワークシートに記入）。

② 班で話し合っまとめる（小集団の学習）意見交換、まとめの話し合い活動など。

③ 班のまとめの発表（学級全体での学習）一班での話し合いの成果を学級全体に発表 する。

2) 生徒の記述・感想など

- ・ 幕府と藩は、農民の生活に細かい指示を出した。また5人組を作らせ、村の有力
に村の運営をさせた。
- ・ 町人は城下町などに住んだ。町人の中から選ばれた町役人が町の運営を行った。
- ・ 差別された人々は、幕府や藩のお触れなどによって、百姓・町人とは別の身分に位
置づけられた。
- ・ 差別された人々がいることは武士の支配にとって都合のいいものであることがわか
った。

- ・ 一部の人以上だけではなく、一人ひとりが人権意識を高めて差別をなくそうという行動をしていかなければいけないと思います。

(3) 成果と課題

- ・ 個人の考えをワークシートに記入してから小集団で話し合いを持つことにより、小集団の中で自分の考えを発表しやすくなっている。
- ・ 小集団での話し合い活動や協力ができるようになってきた。今後は、小集団の中で役割分担などについて工夫・改善をして、より円滑に活動できるようにしていきたい。
- ・ 学習意欲向上のために、班や学級での学習活動に積極的に貢献できている場面を的確に捉え、肯定的な評価を加えていきたい。
- ・ 小集団で話し合うことにより、自分の意見を表現できると共に友だちの意見を聞いて考えを深めることができた。話し合いにはかなりの時間を要するので、どんな課題でどの場面で話し合いをさせるかを見極めていくことが今後重要になってくる。

第2学年1組 社会科学習指導案

平成16年11月29日(月)5限

場所：2年1組教室

指導者：高石博史

1. 単元名 自然環境の特色をとらえよう

2. 単元設定の理由

本単元は、世界的視野と日本全体の視野から我が国の特色を追究し大観するという学習指導要領地理的分野の内容(3)「世界と比べてみた日本」に対応する。緯度差にして25度もある日本列島の気候は温帯でありながら地域によって大きく異なり、その地域の風土や文化に大きな影響を与えている。これを科学的に正しく認識させ、地理学習に結びつけたい。また近年大きな被害が相次ぐ自然災害、さらに環境問題にも目を向けさせる機会としたい。

本学級の生徒は、発表等にはやや消極的な面はあるものの、好奇心が旺盛で、社会科学習には前向きに、熱心に取り組んでくれる。

指導においては、地理的技能としてのグラフ読解や作図の作業に協同して取り組ませ、相互に作業を確認し合うことで、協同学習を通して個人に身に付く学力の手応えを感じさせ、一層の学習意欲に結びつけたいと考える。

3. 単元の目標と評価規準

世界の中で、温帯地域、特に季節風域の特色について知り、さらにそんな中で地域ごとに異なる日本の独特な気候について関心を持ち、それらについて、気温や降水量などの統計データや写真・図版などの資料から調べ、そうした気候条件が、人々の生活や地域の産業に直接結びつき、影響を与えていることに気付く。さらに、地域に残る豊かな自然を守り、次の時代に残していこうと努力する人々や、自然災害に立ち向かう人々の姿から、自らもそれを受け継ぎたいという意志を持とうとする。

社会的事象への関心・意欲・態度 (ア)	社会的な思考・判断 (イ)	資料活用の技能・表現 (ウ)	社会的事象についての知識・理解 (エ)
世界と比較しつつ日本の自然と国土に対する関心を高め、豊かな環境を守ろうとする意欲をもつ。	日本各地の自然が、どのような形で生活と結びつくかを考察し、その地域的特色を明らかにする。	統計資料を活用し、グラフなどを作製することで、自分が追究したり考察したことをまとめて表現する。	世界と日本の自然についての地域的特色を明らかにする視点や方法を理解し、それらの知識を身につける。

4. 単元の指導計画・評価計画

7時間扱い、本時 5/7 (○数字は時間数)

学習活動・学習内容	具体の評価規準 (観点：評価方法)
1 次 ① 世界の地震や火山の分布 ② 日本の山地と川 ③ 日本の平野と海岸	<ul style="list-style-type: none"> 世界の造山帯、日本の主な山地・川・平野を白地図に正しく書き込むことができる。(エ) 川が形成した地形の特色を説明でき、地形図上で区別することができる。(イ) 日本の海岸線の特色を説明でき、地形図上で区別することができる。(イ)
2 次 ④ 世界の気候と日本の気候 ⑤ 日本の気候の特色 ⑥ 日本の各地の気候 ⑦ 日本のさまざまな自然災害	<ul style="list-style-type: none"> 統計表から雨温図を作製することができる。(ウ) 世界の気候帯の分布を白地図に書き込むことができ、その特色を雨温図や写真から判断できる。(イ) 日本各地の雨温図と気候区分を一致させ、白地図に書き込むことができる。またそれぞれの気候の特色を説明することができる。(エ) 環境問題に関心を持ち、積極的に関わろうとする。(ア)

5. 本時の指導計画

(1) 本時目標

各自で完成させた雨温図の特徴をグループ単位で検証し、日本各地の気候の特色について

て、グループ相互の情報交換から、大まかに6つの区分があることに気づく。

(2) 指導過程

学習活動・学習内容	形態	☆ 評価規準・方法・観点と、その支援 →△ →▽ ○ 指導上の留意点
<p>1. 本時の学習内容について説明を聞く。</p> <p>2. ワークシートを配布、教師の説明を聞いた後、雨温図作成用の資料を受け取り作業開始。</p> <p>3. 班隊形となり、男女別のチームで、作製した雨温図を確認する。</p> <p>4. 作製した雨温図の特色を、ワークシートの指示に従って読みとり、まとめる。</p> <p>5. 教師の指示に従って、共通の特色を持つ雨温図を作製した者同士が、移動して新しいグループを作る。</p> <p>6. 作製した雨温図が、日本のどの地域のものか推理し、グループの代表が発表する。</p> <p>7. 地図帳で自分が作製した雨温図の都市を見つけ、地図</p>	<p>一斉</p> <p>個人</p> <p>班 男女別</p> <p>班 課題別</p>	<p>○ この時間に何を学習するか明確にしておく。</p> <p>○ 以前に雨温図を作製した時のことを思い出させ、それぞれに作業に取り組みさせる。</p> <p>○ 資料は全12都市分を準備、各班男女別(12組)に渡して、まず個人で雨温図作製に入る。</p> <p>☆ [資料活用の技能・表現] 作製したグラフをお互いにチェックして、正しく書けているかどうか確認する。(ワークシート)</p> <p>→△ より正確で丁寧な作図ができるように支援する。</p> <p>→▽ 正しく作製できた友達の図を参考にして、間違いを修正できるように支援する。</p> <p>○ 6つの気候区分に分けるのが目的だが、北海道気候区と内陸気候区は判別が難しいので同一グループに入れる。また太平洋気候区は2グループに分ける。</p> <p>○ 座席移動は早く静かにおこなう。</p> <p>☆ [社会的な思考・判断] 雨温図がどの地域に属する都市のものか、意見を交換し結論を出し発表させる。その推論の根拠となることも説明させる。(ワークシート)</p> <p>→△ 資料からより科学的な根拠に基づく推論が導き出せるよう支援する。</p> <p>→▽ 資料の注目すべき点を具体的に指摘し、推論を導きやすくする。</p> <p>○ 作業した雨温図の都市が、グループごとに同じような地域に分布していることを、お互いに確認させる</p>

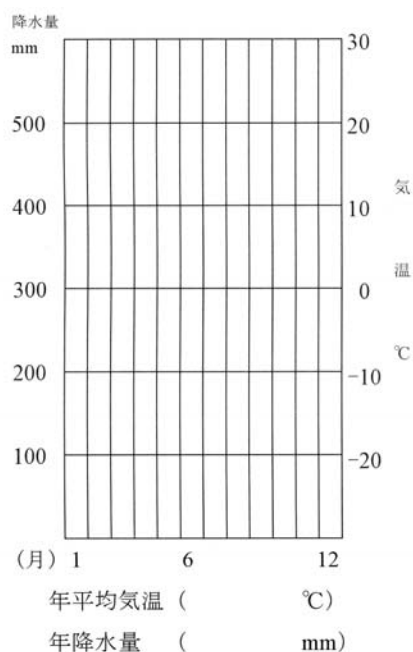
<p>で確認してシートの白地図に記入し発表する。</p> <p>8. 地図帳で雨温図の気候区分を確認してシートに記入し、その特色を文章でまとめて発表する。</p> <p>9. 各気候区の特色を教師がまとめて説明する。</p>	<p>一斉</p>	<p>ために、掛地図（日本全図）に印を付けさせる。</p> <p>○ 自分の雨温図のどのポイントがその気候区の「特色」といえるのかを正しく判断させる。</p> <p>○ 北海道気候区と内陸気候区の区別については、時間があれば生徒に考えさせ、なければ教師が説明する。</p>
--	-----------	--

6. 授業の考察

本授業の学習を通して、雨温図そのものの理解と作製の技能はかなり生徒に定着し、この後実施した期末テスト中での雨温図作成問題では、正答率が8割を越えた。授業では、グラフの特色別にグループ分けした指導過程6まではスムーズに進んだが、その後の時間不足で、それを分析し、明確な気候区分として位置づけるまでには至らなかった。その指導については、次の時間にある程度時間を取って取り組むことになったが、結果として前時の復習によって定着度は深められたと思う。反省点としては、雨温図からグループ単位で読み取ったそれぞれの気候の特色が、教師サイドの発表とまとめの一手際で他のグループにうまく伝わらず、結果として授業後半が散漫なものになってしまった点にある。各グループの読みとった内容をいかに的確にまとめ、全体に還元しつつ授業を進められるかが課題であった。

協同学習の視点では、指導過程3の活動については、スムーズかつ効果的に取り組めたが、共通する特色別に臨時のグループを組んだ6の活動は、ワークシートを通しての活動目的が曖昧になってしまい、形式的な取り組みに終わってしまった観がある。既存の班（小集団）にとらわれない、目的別の協同学習については、今後の課題としてさらに研究を進めたいと考える。

<資料 5> 地理「日本の気候」ワークシート



作業 1) 与えられた気温と降水量の統計資料を元に、雨温図を完成させてみよう。

作業 2) 自分の作製した雨温図の特色を、次の点に注意して読みとろう。

① 1月と2月の平均気温が0℃以下、あるいは10℃以上かどうか。(どちらでもないか)

1月・2月の平均気温→ (°C)

② 降水量は冬(1月・2月の合計)と夏(7月・8月の合計)とで、どちらが多いか。

1月・2月の降水量合計→ (mm)

7月・8月の降水量合計→ (mm)

③ 年降水量は2000mm以上か、1200mm以下か。(どちらでもないか)

※ 2000mm 以上…熱帯並み、1200mm 以下…ニューヨーク並み

ここからはグループで取り組もう



作業 3) 自分の雨温図は右の日本地図のどのあたりの都市のものだと想像するか。一番近いと思う都道府県に×印をつけよう。

作業 4) 資料を見て、自分の雨温図の都市がどこにあるか確認して○印をつけよう。

作業 5) 自分たちのグループの気候区分は何か、書きましょう。

()気候区

作業 6) この気候区の特徴をまとめてみましょう。

組 番 氏名

数学科の取り組み

1. 問題解決学習の取り組み

(1) 育てたい力

「課題を設定できる力」—テーマを決め、課題を自ら設定できる力

「課題を解決するための資料などを収集できる力」—いろいろな方法で必要な資料を集めることができる力

「課題に対する自分の考えを表現できる力」—自分の考えをまとめて発表できる力

(2) 具体的な取り組み

- ・ 数学に関連する資料などから、テーマを決め、課題を設定する。
- ・ 図書やインターネットなどを活用する技能を身に付ける。
- ・ 課題に対する自分の考えや調べたことがらを工夫してまとめ、発表する。

〈事例〉第3学年 選択数学「数学研究」

- 1) オリエンテーションをし、学習の狙いと学習内容、学習の流れを知らせる。
- 2) 数学研究に取り組む。
 - ・ 各自のテーマを図書室、パソコン室を利用し設定する……………3時間
 - ・ 各自のテーマに沿って調べる……………4時間
 - ・ 調べたことをまとめる……………4時間
- 3) まとめたことを発表する。

各自のテーマでまとめたことをパワーポイントや模造紙を使って発表し、相互に評価する。
- 4) 自己評価し学習の成果をまとめる

(3) 成果と課題

- ・ 数学に対して興味・関心を持って取り組んでいた。
- ・ 生徒相互で発表し合うことで、わかりやすいまとめ方や自分以外のテーマについての理解を深める生徒が増えている。今後は、発表の機会を増やし、自分のまとめ方を修正できるようにしていきたい。
- ・ 一つのテーマについて調べたり、まとめたりすることで相互に学び合うことができるので、今後はあらかじめ設定したテーマについての取り組みもやってみたい。

2. 協同学習の取り組み

(1) 育てたい力

- 「自分の意見を小集団の中で表現できる力」。
- 「生徒相互の意見交換をして、互いに高め合える力」。

(2) 具体的な取り組み

- ・ 個人の学習（自分の考えを発表したり、話し合うための準備の学習活動）。
- ・ 小集団の学習（発表活動、話し合い活動、教え合いなど）。
- ・ 学級全体での学習活動、生徒相互の意見交換。

〈事例〉第2学年 単元「平行四辺形」

◎学習課題 平行四辺形になる条件の図形への応用例

1) 学習の流れ

- ・ 平行四辺形になる条件を復習する（個人の学習）。
5つの平行四辺形になる条件を、ことばと記号で表す。
実際の図形では、どんな位置関係になるか。
- ・ 角の大きさや辺の長さが与えられた四角形で、平行四辺形になるものを考える（はじめは個人の学習をする、次に小集団での学習をする）。
意見交換、教え合い
- ・ まとめと発表（学級全体での学習）
小集団の中で発表された意見、勘違いをしていた意見、小集団の中で考えた結果を学級全体に発表する。
- ・ 教師の指導
小集団から出された意見や考えを補足説明する。

2) 小集団からの意見発表から

- ・ 図形のおおよその形から平行四辺形かどうかを判断する者があった。
- ・ 平行四辺形になる5つの条件にあてはまるかどうかを考えなければならないと思うようになっていった。
- ・ 平行四辺形になる条件にあてはめるために、既習事項の平行線の角、三角形の合同条件をきちんと使える生徒もいた。

(3) 成果と課題

- ・ 図形を外見で判断するのではなく、平行四辺形になる条件にあてはまるかどうかを考えるようになった。
- ・ 小集団の中で意見交換することにより、個々で工夫した効果的な学習成果を教える生

徒がいて小集団での学習を有意義に思えることができた。

- ・ 他の生徒の学習状況を知ること、何人かの生徒は学習を深める必要を感じていた。
- ・ 意見発表の内、勘違いしていた発表から、生徒の犯しやすい間違いを教師が指摘することができたり、生徒の理解を深める指導ができた。
- ・ 小集団を指導できる生徒の存在が必要であり、このような生徒の育成と小集団の活用を続けていかなければならない。

第1学年3組 数学科学習指導案

平成16年2月15日(火)5限

場所：1年3組教室

指導者：岡美由紀

1. 単元名 平面図形

2. 単元設定の理由

図形については小学校でも多くのことがらについて学習してきている。操作的な活動や直観的な取り扱いを中心として、図形についての感覚を育てるとともに、図形の内容や簡単な図形の性質を活用して、判断したり、表現したり、処理できるようにすることを狙いとしてきている。しかし、中学生になってからはこの単元が初めての図形の学習である。図形は、具体物から抽象化されたもので、具体の形に着目して、それを単純化、理想化して得られた数学的対象である。よって中学校では、ものを見るとき、その「形」「大きさ」「位置」に目をつけて考えていく見方が必要になってくる。図を描くこと、観察、操作や実験を通して図形に対する直観的な見方や考え方を深めるとともに、論理的に考察する基礎を培うことになる。

本学級の生徒は、ほとんどが授業に前向きに取り組み、発表や発言も積極的である。しかし、中にはつまづいたり作業に時間がかかったりする生徒が数名いるので、個別の配慮が必要である。また小集団での活動においても、一部の生徒だけの話し合いになる場面が見られる。

図形の中には、対称な図形があることに気づかせ、対称性に着目して図形を考察させ、直観的な見方や考え方を深めさせたい。そこで、指導にあたっては、「図を描くこと」を中心に進めていくが、頭だけの理解に終わらせるのではなく、実測したり、折ったり回転させたりする操作活動を取り入れながら展開していきたい。その操作活動では、図形に対する見方を深め、考え方の幅を広げるためにも、また、作業になかなか取りかかれなかったり、時間がかかったりする生徒が情報を共有するためにも、小集団の活動を取り入れていきたい。さらに、ここでの学習が、中学2年で扱う「論証」に発展していくので、ことばできちんと説明でき、みんなを納得させるような力をつけさせていきたい。

3. 単元の目標と評価規準

いろいろな平面図形について、観察、操作、実験を通して、図形に対する直観的な見方や考え方を深め、基礎的な知識・技能を習得して、それらを活用する能力を伸ばすことができる。

数学への関心・意欲・態度 (ア)	数学的な見方や考え方 (イ)	数学的な表現・処理 (ウ)	数量、図形などについての知識・理解 (エ)
<ul style="list-style-type: none"> ・図形に関心を持ち、図形についての操作や図を描くことを通して、関係や性質を見つけようとする。 ・定規とコンパスを用いた作図に、意欲をもって取り組もうとする。 ・おうぎ形の弧の長さや面積の求め方を理解しようとする。 	<ul style="list-style-type: none"> ・図形を線対称や点対称といった見方で考察することができる。 ・基本的な作図のしかたを見いだすことができる。 ・おうぎ形の弧の長さや面積の公式を自由に使って考察することができる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・与えられた図形について、線対称や点対称な図形を描くことができる。 ・定規とコンパスを用いて、角の二等分線などの基本的な作図ができる。 ・おうぎ形の弧の長さや面積を求めることができる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・図形に関する用語・記号について理解している。 ・点、直線、角、円などの平面図形に関する基本的な性質について理解している。 ・おうぎ形、中心角に関する計量について理解している。

4. 単元の指導計画・評価計画

14 時間扱い、本時 5/14 (○数字は時間数)

	学習活動・学習内容	具体的評価規準 (観点：評価方法)
1 次	①～② 直線と角	<ul style="list-style-type: none"> ・直線、半直線、線分、平行、垂直について、日常生活に関連づけて考察しようとする。(ア：発言・プリント・観察) ・三角形の決定条件を用いて、多角形が一意的に決まることを説明できる。(イ：発言・プリント) ・新しい語句、記号を正しく覚え、使うことができる。(エ：発言・プリント)
2 次	③～④ 円と正多角形	<ul style="list-style-type: none"> ・いろいろな正多角形を作図しようとする。(ア：プリント・観察) ・中心角と弧の長さの関係を捉えることができる。(イ：発言)
3 次	⑤～⑦ 対称な図形	<ul style="list-style-type: none"> ・図形の対称性に関心を持ち、基本的な平面図形を、対称性の視点から考察しようとする。(ア：発言・プリント・観察) ・円の接線の性質を用い接線の作図をすることができる。(ウ：ノート)
4 次	⑧～⑩ 基本の作図	<ul style="list-style-type: none"> ・基本の作図に関心を持ち、基本的な作図方法を用いて目的に応じた図形を作図しようとする。(ア：プリント・観察)

		<ul style="list-style-type: none"> 基本的な作図の方法を対称性に着目して調べることができる。(イ：発言・観察) 定規、コンパスを用いて基本的な作図ができる(ウ：ノート) 基本的な作図方法を正しく理解できる。(エ：観察)
5次	⑪～⑬ おうぎ形	<ul style="list-style-type: none"> おうぎ形の弧の長さや面積に関心を持ち、調べようとする。(ア：観察) 弧と中心角の関係からおうぎ形の弧の長さや面積を求める公式を導くことができる。(イ：発言) おうぎ形の弧の長さや面積を求めることができる。(ウ：ノート)
6次	⑭ 問題	

5. 本時の指導計画

(1) 本時の目標

- 線対称な図形の存在を知り、線対称および対称の軸の意味を理解することができる。
- 図形の対称性に関心を持ち、基本的な平面図形を、対称性の視点から考察しようとする。

(2) 指導過程

学習活動・学習内容	形態	☆ 評価規準・方法・観点と、その支援 →△ →▽ ○ 指導上の留意点
1. アルファベットの欠けている部分を完成させる。	個人 一斉	○ 他の人の意見を聞くことで、答えが1つではないものがあることに気づけるようにする。
2. 点線を折り目として折ったときに、ぴったり重なるアルファベットを見つけ、線対称、対象の軸について知る。 課題：いろいろな線対称な図形を書いてみよう。	個人 一斉	○ 対象の軸が2本以上ある場合は、あえてここでは触れないでおくが、生徒の気づきがあれば取り上げる。 〔知識・理解〕(観察) ☆ 線対称な図形の存在を知り、線対称および対象の軸の意味を理解することができる。
3. 対象の軸を利用して、二等辺三角形を作図する。	個人	○ 作図を通して、二等辺三角形も線対称な図形であることに気づけるようにする。 〔関心・意欲・態度〕(プリント・観察)
4. さまざまな線対称の図形(絵)を描く。	個人	☆A 図形の対称性に関心を持ち、いろいろな平面図形を対称性の視点から考察しようとする。 ☆B 基本的な平面図形を対称性の視点から考察しようとする。

5. 班隊形になって自分が書いた図形を出し合う。	班	<p>→△ 基本的な図形だけでなく、さまざまな図形について考えてみるよう支援する。</p> <p>→▽ 身の回りの形や、教科書に載っている図形などをもとに考えるよう支援する。</p> <p>○ 他の人の図形を見ることによって、対称な図形に対する見方を深めるようにする。</p>
6. 各班より、図形を1つずつ黒板に提示する。	一斉	<p>○ 対象の軸が複数本あるものを選び、その図形を提示することで、対象の軸は1本だけとは限らないことに気づけるようにする。</p>
7. まとめ	一斉	<p>○ 導入で用いたアルファベットの中で、対象の軸が複数本あるものを取り上げてまとめとする。</p>

6. 授業の考察

対称な図形の導入では、アルファベットを用いて線対称なものを探したり、対称の軸を見つけたりする活動が多く行われるが、今回は数学的な知識というより、自分と違う考え方を持った人がいるということを生徒に認識させたかったため、あえて欠けている部分のアルファベットを書く活動を行った。

いろいろな線対称な図形を書く場面では、最初は個人で活動し、そのあと班になることで、定規だけを用いて作図していた生徒もコンパスや曲線を使うことに気づき、図形に対する見方を広げることができたように思う。ただ、班で活動する意図や指示が明確でなかったため、班隊形になったものの、個人で活動を進める生徒が多かったのが課題としてあげられる。今回の班活動では、どういうふうに作図したかを班で話し合うことで、図形を完成した形から見ていくよりも、半分だけ書けばどんな図形でも線対称になることに気づけるような活動にしていくと、より対称な図形についての考え方が深まっていったように思われる。

全体的に見て、生徒は意欲的に取り組むことができた。生徒が作図した図形を用いることで、初めは1本しか知らなかった対称の軸が、授業の終わりには2本以上ある図形もあるということ、また円には無数に存在するということを理解することができたと思う。

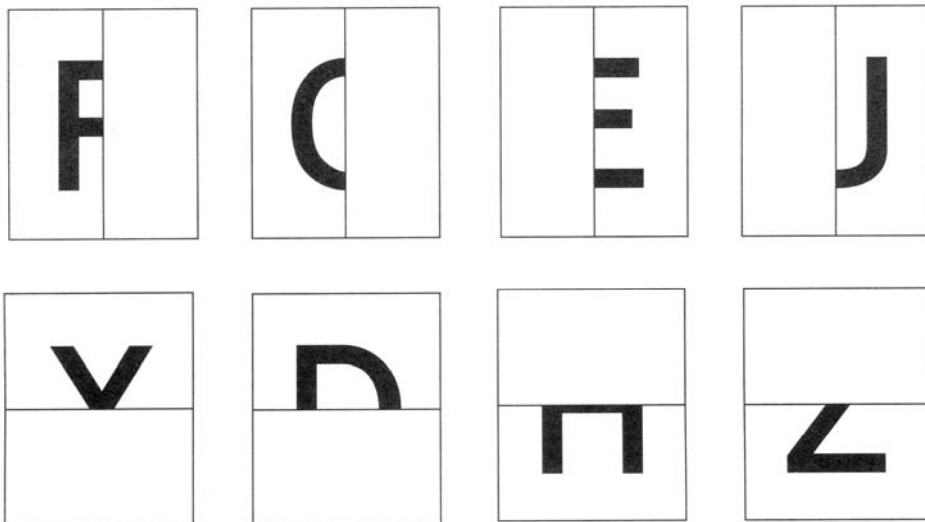
<資料 6> 線対象プリント その1

線 対 称 ～ その1 ～

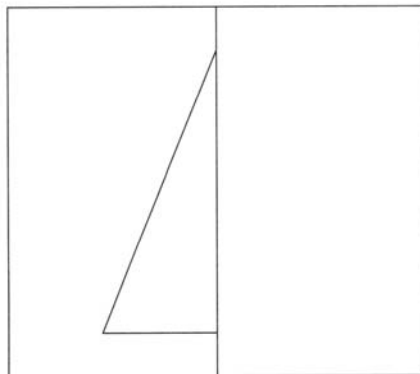
1年 組：氏名 _____

☆ここにアルファベットの一部分がある。

欠けている部分を補って、アルファベットを完成させよう。



☆ 対称の軸を利用して、二等辺三角形を作図してみよう。



<資料 7> 線対象プリント その2

線 対 称 ～ その2 ～

1年 組：氏名 _____

☆線対称な図形をいろいろ書いてみよう。

理科の取り組み

1. 問題解決の取り組み

(1) 育てたい力

「課題に対して科学的に考え解決する力」

(2) 具体的な取り組み

- ・ 単元ごとに「学習の計画」を作成する。
- ・ 生徒が自分から進んで解決したくなるような課題を考え、小集団を使いながら 課題解決を図るような学習展開を考える。

〈事例〉 第1学年2単元「ものの重さ・体積・密度」

1) 学習の内容

- ・ 物体とは……………1時間
- ・ 物体の体積と重さ……………2時間
- ・ 物質の密度……………2時間
- ・ 物質の見分け方……………2時間
- ・ 気体の見分け方……………4時間

2) 問題解決学習の実際 (11/11)

2単元のまとめとして、班ごとに問題解決学習を行った。

- ・ 課題：種類の分からない気体の性質を調べよう。
- ・ 班ごとにどんな実験をするか考える。
各班を男女の2つに分け、自分たちで実験を考えさせる。
どんな実験をすれば、その気体が確かめられるのか、既習の知識を使って考えさせる。
- ・ 班ごとに実験をする。
実際に自分たちの考えた実験を行う。
自分たちの考えた実験で結果が出なかった場合は、また他の実験を考える。
- ・ まとめ
自分の班は、どんな実験をしてどんな結果が出たのかまとめる。

(3) 成果と課題

- ・ 学習の計画を作成することにより、単元ごとの学習の流れが分かって、毎時間の授業の流れがスムーズにいく。
- ・ これまでは、教員主体で実験を行わせており、「やらされている実験」という印象が

強かったが、今回は、生徒自身が考えた実験なので、かなり興味をもって取り組めたように思う。

- ・ 小集団の中での実験について、誰でもが自分たち独自の実験を考え出すにはまだ時間がかかる。
- ・ 小集団でまとめられた意見を全体場で、討論する時間がもてなかった。
- ・ ピントはずれな実験を考えた班はかなりてこずっていた。この場合、どこまで教員の手助けや援助が必要なのかきちんと見極める必要がある。

2. 協同学習の取り組み

(1) 育てたい力

「共通の課題を解決するために、お互いが助け合いながら意欲的に取り組もうとする力」

(2) 具体的な取り組み

- ・ ある課題に対して小集団で実験、観察などを行ない、現象やデータに対する疑問や意見を持つ。
- ・ 考察の場面で個々の疑問や意見を話し合い解決していく。
- ・ 話し合いの材料が明確になり、話し合いが深まるようなワークシートを工夫する。

〈事例〉第2学年4単元「すべての化学変化において質量保存の法則は成り立つか」

1) 学習の内容

- ・ 銅を熱する前後で質量を比べよう……………1時間
- ・ いくつかの化学変化の前後で物質全体の質量を比べよう……………2時間

2) 協同学習（小集団の活用）の場面（3/3）

上皿天びんを用いて、化学変化の前後の質量を比べる。

- ・ 硫酸に水酸化バリウム水溶液を加えると白色沈殿（硫酸バリウム）が生じる。
質量は変わらない。質量保存の法則は成り立つ！
- ・ 鉄を熱すると黒色（酸化鉄）になる。
質量は重くなる。質量保存の法則は成り立つ??
- ・ 塩酸に石灰石を加えると気体（二酸化炭素）が発生する。
質量は軽くなる。質量保存の法則は成り立つ???

※この3つの実験結果から「すべての化学変化において質量保存の法則が成り立つ」と結論づける生徒や小集団は少ない。実験の条件や見られた現象をもとに多様な意見交換が実験や考察のときになされ、話し合いが絡まったり、行き詰ったりしながら深まりをみせた。最後には、生徒の話し合いから「……………だから法則は成り立ちます！」と納得した意見が導き出された。2つ目の実験では、反応前に結びついた空気中の酸素の質

量を入れていないから反応後の質量は重くなる。3つ目の実験では反応後に生じた二酸化炭素が空气中に逃げるから質量は軽くなる。その後の発展として、「どんな実験方法をとれば②や③でも質量は変わらないか？」という新たな課題の解決に取り組んだ。

(3) 成果と課題

- ・ 教科書のほとんどの実験において、どの小集団も同じ結果、納得するデータが得られるものが多い。現象や結果の中に疑問や驚きが多いほど多様な意見をもち、課題解決に向けての意欲的な話し合いや取り組みができると実感した。
- ・ 化学変化を色の変化などによるマクロな現象から理解するのは比較的容易で理解しやすいが、質量保存の法則の理解などでは「化学変化」＝「物質をつくる原子の組み換え」というミクロな現象を視覚的に捉えて理解しなくてはならない難解さがある。それを生徒同士で説明し合ったり考え合う手立てとして、自作の「原子モデルのマグネット教具」を活用させている。このように、実験や観察のないときでも、生徒同士が意欲的に話し合える学習づくりができると考えている。今後はさまざまな単元においても、取り組める授業づくりをめざしていきたい。

第2学年1組 理科学習指導案

平成16年7月1日（木）5限

場所：2年1組教室

指導者：堀場善智

1. 単元名 動物の行動とからだ

2. 単元設定の理由

ヒトを含め動物は、外界からのさまざまな刺激を五感で感じとり生活をしている。そして、それぞれの動物の生活場所や生活のしかたなどに応じて、必要な感覚器官を発達させることによって、自然界で生きぬいている。また、動物は受けとった刺激に適切に反応できるような反応経路やからだの作りをもっている。その意味や必要性を学習することにより、動物の世界に興味・関心が持て、幅広い視野を持てるようになり、そのことが生命尊重や動物愛護の心の育成にもつながると考え、本単元を設定した。

本学級（男子19名、女子16名、計35名）は、比較的学習意欲が高く、意欲的に発表を行うなど、授業には積極的に参加できている。動物に関しては、小学校で「昆虫のからだの作りと育ち方」「ヒトや他の動物の呼吸、消化、血液の循環」などの初歩的な学習はしているが、アリのからだの作りを書けない生徒も多く、十分な定着はしていないようである。動物の不思議さをもっと知りたいという関心が高い生徒もいるが、あまり興味を示さない生徒もいる。

本単元の指導にあたっては、自分をふくむ動物を対象とした学習なので、五感を使って調べられる観察、実験をできるだけ多く行い、体験を通して理解させたい。また、学習を通し、動物の世界に興味・関心がもてるように配慮し、生命尊重や動物愛護などの心を育成したい。

3. 単元の目標と評価規準

動物が外界からの刺激に適切に反応しているようすを観察し、刺激を受けとってから反応が起こるまでのしくみや、実際にからだを動かすしくみを観察結果と関連づけて捉えることができるようにする。

自然事象への関心・意欲・態度 (ア)	科学的な思考 (イ)	観察・実験の技能・表現 (ウ)	自然事象についての知識・理解 (エ)
・身近な動物のからだの作りとはたらき、動物が外界の刺激に反応するようすに関心をもち、意欲的にこれらの観察・実験を行って調べるとともに、生命を尊重しようとする。	・動物が外界の刺激に反応している観察・実験を行い、そのしくみを感覚器官、神経系、運動器官の作りと関連づけて考察することができる。	・動物やヒトが外界の刺激に反応していることを調べる実験を工夫して、みずからの考えを導きだし、実験の報告書を作成し、発表することができる。	・運動器官や感覚器官神経系、骨格と筋肉の作りとはたらきについて理解し、知識を身につける

4. 単元の指導計画・評価計画

8時間扱い、本時 1/8 (○数字は時間数)

	学習活動・学習内容	具体的評価規準 (観点：評価方法)
1 次	①②③ 動物は外界のようすをどこで感じとるのか	<ul style="list-style-type: none"> ・動物の受けとる刺激の種類について積極的に発表しようとしているか。(ア：発言、ワークシート) ・草食動物と肉食動物の目や耳のつき方の違いや、鋭い感覚を持つ必要性などを、その動物の生活のしかたと結びつけて説明できる。(イ：発言、ワークシート、テスト) ・魚が外的刺激によって、一定の行動をとることを、実験によって確かめることができる。(ウ：レポート) ・いろいろな刺激を、適切な感覚器官が受け入れるしくみになっていることを説明できる。(エ：テスト)
2 次	①②③ 刺激はどこを伝わるのか	<ul style="list-style-type: none"> ・刺激を受けてから反応するまでのしくみについて、調べようとする(ア：発言、ワークシート)。 ・刺激を感覚器官が受けとって、反応が起こるまでの経路につい

		て、実験によって確かめることができる（ウ：レポート）。 ・ ヒトの神経系が、脳や脊髄、感覚神経・運動神経からなることを説明できる（エ：テスト）。
3 次	①② 動くためのしくみはどうなっているか	・ 自分の手足の動きを、骨格と筋肉の関係に結びつけて説明することができる（イ：ワークシート）。 ・ 背骨や関節などのからだの各部分の特徴を、骨格の作りと関連づけて説明できる（エ：テスト）。

5. 本時の指導計画

(1) 本時目標

- ・ 動物が刺激を5つの感覚器で感じとって生活していることを理解する。
- ・ 動物がその生活の仕方によって、感覚器官の発達のさせ方に違いがあることを説明できる。

(2) 指導過程

学習活動・学習内容	形態	☆ 評価規準・方法・観点と、その支援 →△ →▽○ 指導上の留意点
1. 動物が生きるためにどういう行動をとっているか考える。	一斉	○ 動物が生きるために食物を外界から取り入れなくてはならないことを確認する。
2. チーターが捕食のために必要としているもの、インパラが身を守るために必要としていることを考える。	一斉	○ 動物が食物を得るため、身を守るためには、周りの情報が必要であることを押さえる。
3. 動物がどのような刺激をどの感覚器官で受けとっているか考える。	個人 班	○ 動物が外界からの刺激を感覚器官で感じとって生活していることを押さえる。 ☆ [関心・意欲・態度] 動物の受けとる刺激の種類について積極的に考えようとしているか(発言、ワークシート)。 →△ 刺激の種類とそれを感じとる適切な感覚器について考えられるよう支援していく。 →▽ 刺激に反応することによって自分の生活が行われていることを捉えさせ、積極的に考えられるよう支援していく。
4. 草食動物と肉食動物の目	個人	☆ [科学的な思考] 草食動物と肉食動物の目のつき方

<p>のつき方のちがいを考える。</p> <p>5. 本時のまとめと次時の予告</p>	<p>班</p> <p>一斉</p>	<p>のちがいや、鋭い感覚を持つ必要性を、その動物の生活のしかたと結びつけて考えることができたか。(発言、ワークシート)</p> <p>→△ 目のつき方以外についても考えられるよう支援していく。</p> <p>→▽ それぞれの動物が必要としていることを確認し、自分の考えを持てるよう支援していく。</p> <p>・ 動物が刺激を感覚器官で感じとり生活していること、動物によって発達している感覚器官が違うことを押さえる。</p>
---	--------------------	---

6. 授業の考察

理科では、小集団を実験で使うことが多いが、実験以外の場面でいかに効果的に小集団を使うことができるのかを考えるためにも、本時の内容で小集団を使った。普段の係活動を行う生活班は6人ずつの6班であるが、話し合いに参加しない生徒を作らないように、生活班をさらに2つに分けた3人ずつの12グループで小集団学習を行った。また、小集団での話し合いの目的を明確にするための工夫としてホワイトボードを使った。本来、草食動物、肉食動物の目のつき方の学習は、他の感覚器官と同時に扱っていくので、短時間で扱う内容なのだが、話し合いの時間をしっかりとるため、1時限の授業として行ってみた。

授業全体を通して、生徒は活発に発言し、学習に意欲的に取り組んでいた。小集団での話し合いに関しても、ホワイトボードを使い話し合いのゴールを明確にした効果があり、積極的な活動ができた。個で考える時間をとり、それから小集団で意見を作り上げていくよう設定したのは効果的であった。ただ、今回の授業で生徒に提示した「肉食動物と草食動物の目のつき方の違いは何か。また、それはなぜか。」という課題には問題があった。経験から生徒一人ひとりが考えやすい課題ではあったが、逆に答えが一つにまとまってしまう、新しい意見や異なった意見を出しながら、討論させることができる課題ではなかった。生徒が迷いながら話し合いをしていく中で、学習内容を深めていくことができるような課題を設定していく必要がある。また、十分な話し合いの時間をとるために学習内容を減らしてしまったが、これも課題の設定の仕方によって、授業のやり方によっては学習内容を減らすことなく学習できたはずである。各グループ、もしくは個人に「目のつき方」以外の課題を与えたり、班で話し合った内容と同じことを授業者が繰り返し話をすることをなくしていけば、もっと時間を有効に使うことができる。

今後は、課題の質を考えながら、小集団を生かした授業作りをしていきたい。

<資料 8> 「考える」プリント

2年 組 番 氏名 ()

1. どうやって知る？

2. 違いは？

動物	動物

3. 2の理由

英語科の取り組み

1. 問題解決学習の取り組み

(1) 育てたい力

「英語を使って自己を表現する能力」

(2) 具体的な取り組み

- ・ セクションごとに新表現を使って自分自身のことや身の回りの人やものを表現したり、相手に伝える場面を与える。
- ・ ペア活動を重視し、自己表現を答えとする相手とのQ&A活動の時間を多くとる。

〈事例〉第2学年 Program6 “I’m looking forward to the trip” のまとめ

Speech: “I’ll tell you about my friend.” (他己紹介)

1) 学習の流れ

- ・ スピーチの内容とその発表までの流れについて知らせる。
3人グループの小集団を作らせ、グループ名を考える。
自分自身を紹介するスピーチ原稿を各自考える。…………… (1時間)
- ・ 3人の小グループの中で自分の書いたスピーチ (自己紹介) を発表し合う。
3人でだれがどのスピーチを担当してクラスで発表するか決める。
それを友だちに紹介するスピーチに書き換える。…………… (2時間)
- ・ グループごとにクラスの前で他己紹介をし合う。
スピーチの内容に関するQ&Aを行う。…………… (3時間)

2) 問題解決の手立て

- ・ 教師 (T-T) による見本の他己紹介スピーチを行い、参考にさせる。
既習の文法の中でこの Program6 で学習した不定詞を必ず使うことを義務づける。
- ・ 自己紹介の原稿書きから他己紹介の原稿完成まで3人のグループ体制で行い、スピーチ当日に向けて協力し合う (英和・和英辞書を各グループに与える)。
- ・ 自分を紹介するスピーチをグループの中で発表し内用や表現方法について意見を交換し合う。
- ・ 友だちを紹介するスピーチを完成し、グループで発表の練習をし、クラス発表に向けてお互いのスピーチの態度についてアドバイスをし合う。

3) 生徒の感想

- ・ 自己紹介のスピーチを考えると、友だちに読んでもらうことを意識して頑張って書いた。自分のことを友だちに紹介されるのは照れくさかった。

- ・ 友だちの紹介は自分のスピーチをする以上に緊張した。うまくできるように練習した。
- ・ ときどきわからない聞き取れないところもあったけどだいたいみんなのスピーチの内容はわかった。友だちの夢や興味のあることが聞けておもしろかった。

(3) 成果と課題

- ・ 自己表現をし、それをだれかに伝える場面を設定することで英語学習への意欲が増してきた。また、英語によるコミュニケーションに抵抗が少なくなってきた。
- ・ 単語や熟語が自己表現をすることで定着しやすくなっている。
- ・ 表現したいことを英文にし、伝えるという個の学習をどう小集団の学習に組み入れるか、もっと多様に考える必要がある。
- ・ 限られた時間で、少ない語句で会話をしようとするため、なかなかコミュニケーションの幅が広がらないのが現状である。
- ・ 生徒にとって満足のいく表現活動になっているかどうか、個に応じた指導や評価が難しい。

2. 協同学習の取り組み

(1) 育てたい力

「英語を使ってコミュニケーションをする能力」

(2) 具体的な取り組み

- ・ セクションごとに新表現を使って自分自身のことや身の回りの人やものを表現し、それをペア同士でQ&Aし、コミュニケーションをする時間を与える。
- ・ 新表現を使ったいろいろな英文に慣れさせ、コミュニケーションの幅を広げる。

〈事例〉第2学年 Program 9 “Making a Video Letter”

(小集団やペアを使ったコミュニケーション)

1) コミュニケーションを中心にした学習の流れ

Key Sentence(9-1)⇒ as 形容詞 as / not as 形容詞 as …………… (1時間)

例①) Q: Who is as { old / tall / fast / etc. } as you ?

例②) なぞなぞ: What country is as big as America ?

Key Sentence(9-2)⇒比較級 than / 比較級 than any other～…………… (2時間)

例①) Q: Who is { taller / faster / kinder / nicer / etc } than you ?

例②) なぞなぞ: Which city is bigger, Osaka or Nagoya ?

Key Sentence(9-3)⇒ the 最上級 / one of the 最上級 …………… (3時間)

例①) Q: Who is the { kindest / tallest /youngest } in your class/family ?

例②) なぞなぞ: What is the highest mountain in Japan ?

2) コミュニケーションと情報交換の手立て

- ・ 自分自身のことを key sentence を使って表現させる。
- ・ 小集団やペアを使って例となる会話を参考にし、コミュニケーションをさせる。
(5人以上との会話を目標に、ペアを変えながらコミュニケーションを行う。)
- ・ コミュニケーションで得た情報は必ず英文としてシートに書き込む。
- ・ 合図とともに活動をやめ、集めた友だちの情報をクラス内で英語で発表し合う。
- ・ 最後にコミュニケーションのようすを自己評価し、シートを提出する。

3) 生徒の感想

- ・ コミュニケーションの時間が一番楽しい。
- ・ 友だちのことがコミュニケーションを通していろいろわかるのがおもしろい。
- ・ もっとたくさんの人とコミュニケーションができるようになりたい。
- ・ うまく会話ができなくて日本語をたまに使ってしまう。
- ・ 会話の時間ももっと長くしてほしいし情報交換の発表も時間も長い方がいい。

(3) 成果と課題

- ・ 自己表現したり、それを友だちに英語で伝えるというコミュニケーションに対する抵抗がなくなってきた。能力の差はあるがそれぞれ会話になっている。
- ・ コミュニケーションで得た結果を英文としてシートに記入するため、新表現の定着がスムーズになったし、自己表現で使う語句が言えて、書けるようになってきた。
- ・ コミュニケーションで得た情報を生徒同士が発表し合うので、会話の達成感が持て、学習意欲につながっている。
- ・ ほとんどのコミュニケーションが教師が作成したシートを見て、それを参考にしながら行われるので、シートなしの状態ではコミュニケーションが難しい。
- ・ 時間的にも内容的にも限られたものしか活動が行えないため、広い範囲でのコミュニケーション能力の育成が難しく、会話が断片的であるのが課題である。

第1学年5組 英語科学習指導案

平成16年1月26日(水)6限

場所:1年5組教室

指導者:青田恵子・大西淑子

1. 単元名 PROGRAM 9 カードをもらってうれしいな

2. 単元設定の理由

本課は由紀の誕生日パーティーが舞台である。由紀はアメリカに住んでいるマリおばさ

んから誕生日カードを受け取った。パーティーに招いたりサにそれを見せる。そこからおばの家に滞在中に密かに思いを寄せていたアンディの話題が広がっていく。また、あわせてクリスマスカードも紹介し、欧米のカード文化の理解を深めることができる内容である。この学習を通して、今まで学習した現在のことや、習慣についての言い表し方（現在形）をもとにしながら、過去に体験したことについて話したり尋ねたりする表現を学ぶ。友だち同士できのうのできごとを話し合ったり、日記や手紙を書くなど、生活の中でも自己表現の幅がぐんと広がる。コミュニケーションの手段として積極的に使えるよう指導したい。

1年5組の生徒は、たいへん意欲的に授業に取り組み、言語活動などにも積極的に参加する生徒が多い。班活動をする時、お互いに教え合うこともできるので、小集団でのメリットを生かした学習の展開も図りたい。男子の中に、単語や文の語順の理解が十分でないため、積極的に会話に取り組むことができない生徒が何人かいるが、口頭練習やインタビューをすることで、少しでも抵抗をなくしていきたい。

本時では、過去形の疑問文で先生や友だちの昨日の生活を知る。実際の会話を聞き、“Did you～?”の使い方を学ばせたい。そして実際自分たちの会話で使い、コミュニケーションの手段として活用でき、会話が広がることを感じさせたい。またカードゲームを班対抗形式にした「だれになりすましてるでしょう」で、“Did you～?”を何度も尋ねる練習をさせたい。

3. 単元の目標と評価規準

一般動詞の過去形の文や疑問文とその応答の仕方、Where で始まる疑問文の意味とその使い方を理解できるようにし、自分や身のまわりのことを表現するのに役立つ。

コミュニケーションへの関心・意欲・態度 (ア)	表現の能力 (イ)	理解の能力 (ウ)	言語や文化に関する知識・理解 (エ)
<ul style="list-style-type: none"> 一般動詞の過去形やその疑問文、場所を問う疑問詞を使って周りの人と積極的にコミュニケーションを図ろうとする。 過去のできごとについて簡潔な英文で伝えたり友だちの英文を理解しようとする。 	<ul style="list-style-type: none"> 身のまわりの物事を過去形やその疑問文を使って表現できる。 場所を尋ねる疑問文で身のまわりの物事を表現できる。 	<ul style="list-style-type: none"> 過去形やその疑問文や応答、場所を尋ねる英文の内容を正しく理解することができる。 	<ul style="list-style-type: none"> 欧米のカード文化やパーティーでの会話、落ち込んだ友だちを励ます会話などについて理解する。 一般動詞の過去形やその疑問文、場所を尋ねる疑問詞を理解する。 会話の決まり文句や描写する文を理解する。

4. 単元の指導計画・評価計画

7時間扱い、本時 3/7 (○数字は時間数)

	学習活動・評価計画	具体的評価基準 (観点：評価方法)
1 次	① 一般動詞の過去形の文を使って身のまわりの物事を表現できる。 ② 由紀のパーティでの誕生日カードやプレゼントのやりとりのようすを理解する (発表)。	<ul style="list-style-type: none"> ・ コミュニケーションに積極的に取り組む (ア：観察) ・ 過去形を使った表現ができる。(イ：発表) ・ 本文を聞き、内容を理解できる。(ウ：発表) ・ カードやプレゼントのやりとりを理解できる。(エ)
2 次	③ 過去形の疑問文と応答を使って身のまわりの物事を表現できる。 ④ パーティのようすやマナーを理解する。	<ul style="list-style-type: none"> ・ コミュニケーションに積極的に取り組む (ア：観察) ・ 過去の疑問文を使った表現ができる。(イ：発表) ・ 本文を聞き、内容を理解できる。(ウ：発表) ・ パーティでの会話を理解できる。(エ：発表)
3 次	⑤ Where で始まる疑問文を使って身の周りの物事を表現できる。 ⑥ 外国でのクリスマスのようなようすを理解する。 ⑦ 自分の生活を英文で表現できる。	<ul style="list-style-type: none"> ・ コミュニケーションに積極的に取り組む (ア：観察) ・ 過去の疑問文を使った表現ができる。(イ：発表) ・ 本文を聞き、内容を理解できる。(ウ：発表) ・ クリスマスでのようすを理解できる。(エ：発表) ・ 身のまわりのことがらを既習の内容を使って表現できる (オ：発表)

5. 本時の指導計画

(1) 本時目標

一般動詞の過去形の疑問文とその応答について理解し、会話や作文の中でも使えるようにする。

(2) 指導過程

学習活動・学習内容	形態	☆ 評価基準・方法・観点と、その支援→△→▽ ○ 指導上の留意点
1. あいさつ	一斉	○ 明るく、元気な雰囲気始める。
2. ウォーミングアップ	個人	○ 積極的に BINGO にするよう机間指導で声かけをする。(BINGO)
3. 過去形の疑問文の尋ね方・答え方の導入	一斉 班	<ul style="list-style-type: none"> ☆ [言語についての理解] 過去形の疑問文とその応答を含む対話を聞き、使い方を知る。(発表) →△ 対話を聞き取り、自分でもその表現が言えるよう支援する。

4. 練習とまとめ	個人	<p>→▽ 班内で相談しながら、その使い方が理解できるよう支援していく。</p> <p>○ ワークシートを使って、疑問文と応答文の作り方を理解する。</p>
5. 自己表現活動	個人 学級	<p>☆ [表現、理解の能力、コミュニケーションへの意欲・関心]</p> <p>過去形の疑問文を使って、相手の昨日の行動について尋ねる。(ワークシート・観察)</p> <p>→△ 積極的に参加し、円滑な会話になるよう支援する。</p> <p>→▽ 会話を反復させたり、不完全な文でも会話を続けようとするよう支援する。</p>
6. コミュニケーション活動	班	<p>☆ [表現、理解の能力、コミュニケーションへの意欲・関心] 過去形の疑問文を使って、たくさんの友だちと会話をし、班で情報を集める。(観察)</p> <p>→△ 積極的に参加し、円滑な会話になるよう支援する。</p> <p>→▽ 会話を反復させたり、不完全な文でも会話を続けようとするよう支援する。</p>
7. 過去形の疑問文の尋ね方・答え方のまとめ	個人	<p>○ ワークシートを使って、疑問文と応答文の作り方を理解する。</p>

6. 授業の考察

- ・ 英語科の授業の中で、協同学習とはどういう形であるべきなのか：まわりの人と関わって学び、お互いの学習に役立っているのが協同学習であるならば、班を使うことにこだわる必要はなく、ペア学習や他の人の発表を聞くこともあてはまるのではないかと。班活動を意識しすぎて、一斉に行うパターンプラクティスが不十分になってしまった。基本をしっかり身に付けさせることにもう少し時間を使うべきであった。
- ・ 協同学習の「本時の目標を明示」することを徹底すること：本時の学習の目標を生徒にきちんと示し、この時間の終わりにはどんなことができるようになっていくのかを意識させて学習に臨ませなければならなかったが、口頭で説明したのみであったので、必ず板書して示すようにしなければならない。
- ・ 具体的評価基準—各時間の学習で4領域すべてを評価できるようにしているが、生徒の実態を把握し、時間ごとにどの領域を、どの程度わかるようにするのか決めた方がよい。指導の中心・重要ポイントを絞って、狙いも準備するようにはしなければならない。

保健体育科の取り組み

1. 問題解決学習の取り組み

(1) 育てたい力

「課題を設定できる力」 テーマを決め、課題を自ら設定できる力。

「課題を解決するための情報などを収集できる力」 いろいろな方法で必要な資料を集めることができる力。

「課題を解決し身体運動として表現できる力」 個人やチームの力を伸ばし表現する力。

(2) 具体的な取り組み

- ・ ゲームを行ったり観察したりする中で課題（問題点）を見つけ出す。
- ・ 生徒相互の意見交換やアドバイスなどを通して課題を解決しようとする。

〈事例〉第2学年・球技「サッカー」

- 1) オリエンテーションをし、学習の狙いと学習内容、学習の流れを知らせる。
- 2) ルールやゲームの進め方を学習し、簡単な試しのゲームをする。
- 3) 試しのゲームでの反省からチームで相談し問題点を克服するための練習をする。
- 4) 自己評価し学習の成果をまとめる。

(3) 成果と課題

- ・ 共通の課題を解決するために生徒相互で相談することで、チーム内で個人がどんなことをすればよいのかを自覚することができ、一人ひとりがサッカーに対し興味や関心を高めることができた。
- ・ 集団をまとめるリーダーが役割に責任を持ち、積極的に活動する姿が見られた。
- ・ 生徒相互の評価活動なども取り入れ、より主体的な活動になるようにしたい。

2. 協同学習の取り組み

(1) 育てたい力

「チームにおける自己の役割を自覚し、互いに協力して練習の工夫ができる力」

(2) 具体的な取り組み

- ・ チームでの話し合い活動（作戦会議）。

〈事例〉第2学年・陸上競技「長距離走（駅伝）」

- 1) オリエンテーション
- 2) 種目の特性を知り、自分の記録を知る。
- 3) ピッチやストライドの特徴を知って課題を持つ。
- 4) ペース走（時間を設定）の練習をする。
- 5) 今もっている力で試技
- 6) いろいろなやり方（コース）をしたときの記録の違いを知る。
- 7) 記録を取ったり、競争して、チームを作る。
- 8) チームの課題を持ち、目標が達成できる練習の工夫をする。
- 9) レースの作戦（順番）を決める。

(3) 成果と課題

学習にあたっては、まず自己の能力（記録）を理解させ、それぞれに応じてチームづくりを試みた。チームの記録に大きく偏りが無いよう配慮し、区間（順番）を考えさせ、目標を設定して、練習の工夫を取り組ませた。ウォーミングアップのジョギングのペース、準備運動の必要性が大事であることがわかったようだ。競争も大事だが、チームの持ちタイムをいかに縮めるかを視点においたところ、速い生徒が遅い生徒のカバーをしたり、遅い生徒の練習に助言したり、チームの和を観察することもできた。ただ、試技（最後の記録会）時に欠席があったクラスはチームワークが半減したり、競争にならなかったり、タスキが渡らない等、残念な状況があった。区間記録に意欲を持たせてはいるが、できる、できない生徒がある中で、もう少しそれぞれが楽しんで走ること、競争できる喜びを感じさせたい。自分の体づくりの向上に達成感を持たせたい。

第1学年5組 保健体育科学習指導案

平成16年10月16日（火）6限

場所：グラウンド

指導者：板義道

1. 単元名 「サッカー」

2. 単元設定の理由

サッカーの楽しさは何とんでも「ゴール」、得点を奪うことである。「ゴール」という一つの目的のために、広いコートの中での激しい攻防が展開される。すべてのプレーの目的は「ゴール」を奪うことにあるといっても過言ではない。しかし、それまでのシュートに至る過程にもサッカーの面白さは含まれている。一つひとつのプレーは「ゴールすること」と「ゴールさせないこと」のために行われており、攻守の両方の局面が常に隣り合わせに存在している。いかに技能や能力が優れていても絶対にひとりではできないスポー

ツであり、イレブンと呼ばれるチームのメンバーが協力し合うことが「ゴール」のための絶対条件となる。「ゴール」という共通の目標に向かってチームのメンバーが基本的には自由に動ける条件の中で、それぞれが仲間との関係や自分の役割を考えながら組織としてプレーすることが重要であることもサッカーの大きな特徴である。ドイツのことわざ（サッカーは子どもを大人にし、大人を紳士にする）にあるように「ゴール」の喜びをチームのみんなに分ち合うことで、われわれを大人にしてくれるのがサッカーというスポーツである。

中学1年生段階では、キック力が弱く、ボールをなかなか遠くに飛ばすことができない。経験者以外は技術が全くない状態で、どの局面でも同じ蹴り方しかできない生徒が多い。ボールを止めて助走をつけてからでないと蹴れなかったり、敵が迫るとやみくもに蹴り出すという場面がよく見られる。ゲームをするとみんながボールに集中してしまい、パス交換や連携、フォーメーションなどは見られず、プレーがとぎれとぎれになりがちである。

サッカーは前述したようにパス交換や連携を駆使した組織的な戦術が必要になってくる。そのためには基本的な技術の習得が前提となる。よって、基本的な技術を身につけられるような練習をしていきたい。さらに、小集団でのグループ練習や話し合いを通して、お互いの技術を高め合ったり、組織を形成するチームの一員として技術的にも精神的にも自分と仲間との関係を考えられるような指導をしていきたい。

3. 単元の目標と評価規準

サッカーに必要なさまざまな技能を身につけ、練習によりその技能を高める。修得した技能を駆使して仲間とのパス交換や動きの連携により得点を奪うおうとする組織的な戦術の面白さを知る。小集団での練習や、反省、話し合いを通して個人的な技術の向上やチームとしての課題解決や勝利を目指す。

運動や健康安全への関心・意欲・態度(ア)	運動や健康安全についての思考・判断(イ)	運動の技能(ウ)	運動や健康安全についての知識・理解(エ)
<ul style="list-style-type: none"> サッカーの技術習得に積極的に取り組める。 個人やチームの課題解決に積極的に取り組める。 仲間とのパス交換や動きの連携でゲームを支配する楽しさを味わうことができる。 失敗や勝敗を受け入れ次に生かすことができる。 	<ul style="list-style-type: none"> 自分の能力に応じた練習ができる。 自分の欠点や課題を見つけ、それに対する練習の工夫ができる。 チームの欠点や課題を見つけ、それに対する練習の工夫ができる。 チームメイト個人やチーム全体の欠点や課題を見つけ、指摘することができる。 	<ul style="list-style-type: none"> 基本的なボールの蹴り方ができる。 正確にボールを蹴ることができる。 ヘディングやトラップなどのキック以外の技術ができる。 相手の動きや味方の動きに応じたプレーができる。 次の事態を予測した動きができる。 	<ul style="list-style-type: none"> サッカーの基本的なルールや特性を理解している。 サッカーに必要な技術の名称を理解し、局面によってどの技術を選択すればいいか理解している。 自分やチームの課題に合った練習の仕方や試合の仕方を理解している。

4. 単元の指導計画・評価計画

10時間扱い、本時4/10 (○数字は時間数)

	学習活動・学習内容	具体的評価規準 (評価観点)
1次 導入	① ルールやゲームの進め方を学習し、簡単なゲームを試してみる。	<ul style="list-style-type: none"> ・ 単元 (サッカー) に興味を持ち、ルールやゲームの進め方を積極的に覚えようとしているか。(ア) ・ 覚えたルールやゲームの進め方を意識しながらプレーできているか。(イ)
2次 展開 (練習)	② キックの種類を覚える。 パスとトラップの練習をする。 ドリブルを含めた1対1の練習をする。 ミニゲームをする。 ③ パスとトラップの練習をする。 ドリブルを含めた1対1の練習をする。 タッチゲーム (ボールを使った鬼ごっこ) をする。 ミニゲームをする。 ④⑤ タッチゲーム (ボールを使った鬼ごっこ) をする。 スクエアパスゲーム (3対1での連続パス練習) をする。 ミニゲームをする。 ⑥⑦ スクエアパスゲーム (3対1での連続パス練習) をする。 ボール運びゲーム (ターゲットへのパスともらう動きの練習) ミニゲームをする。	<ul style="list-style-type: none"> ・ ルールやゲームの進め方を理解しているか。(エ) ・ 技術習得に向けて積極的に練習ができたか。(ア) ・ 練習後の話し合いに積極的に参加することができたか。 ・ いろいろな練習の中で欠点や課題を見つけることができたか。(イ) 人のプレーを見てよい点、悪い点に気づけたかどうか。よい点は自分のものにし、悪い点はアドバイスすることができたか。 3種類の蹴り方 (インサイド、インステップ、インフロント) ができたか。 正確なパスとトラップができたか。 状況 (敵の位置や味方の動き) を考えてパスを出したり受けたりできたか。(ウ) 3種類の蹴り方の名称を覚えているか。 どの局面で、どの蹴り方をすればよいか、それぞれの特性を理解しているか。 それぞれの練習の目的を理解しているか。(エ)
3次 まとめ (試合)	⑧⑨⑩ 鳥かごゲーム (数的優位の状態でパス交換練習) をする。 ゲームをする。	<ul style="list-style-type: none"> ・ チーム練習やゲームに積極的に参加できたか。 練習やゲーム後の話し合いに積極的に参加できたか。 よいプレーや勝利の喜びを仲間と分かち合うことができたか。(ア) ・ 練習やゲームの中で欠点や課題を見つけることができたか。 話し合いの中で仲間とのパス交換や動きの連携でよいプレーに気づけたか。(イ) ・ ゲームの中で、練習で身につけた技術が局面に応じて正確にプレーできたか。 ゲームの中で仲間との有効なパス交換や動きの連携ができたか。

		次の事態を予測したディフェンスやボールを持っていないときの動きができたか。(ウ) ・それぞれの練習の目的を理解しているか。(エ)
--	--	---

5. 本時の指導計画

(1) 本時目標

ディフェンスや味方の状況を見て、パスをもらったりパスを出したりできるようになる。
チームでの話し合いを通して、よいところやこれからの課題を見つける。

(2) 指導過程

学習活動・学習内容	形態	☆ 評価規準・方法・観点と、その支援 →△ →▽ ○ 指導上の留意点
1. 本時の授業内容と狙いを確認する。	一斉	○ 前回の練習で出た課題を踏まえ、本時の目標を確認する。
2. タッチゲーム(ボールを使った鬼ごっこ)をする。 ↓ チームで作戦会議をする。 ↓ タッチゲーム(2回目)をする。	班	○ 細かいパス交換と数的優位な状況を作ることが有効であることを教える。 ☆ 一回目と二回目で動きが変わったか。チームとして作戦が立てられたか。 →△ 周りに指示が出せるようにしよう。 →▽ ターゲットを絞って、人数をかけて敵を囲むようにしよう。
3. スクエアパスゲーム(3対1での連続パス練習)をする。 ↓ チームで話し合う(よかった所やこれからの課題を一人ひとりについて意見を出し合いワークシートにまとめる)。	班	○ 状況を見てパスコースを選択すること、パスがもらえるところに動いてパスをもらうことを教える。 ☆ 状況を見てパスコースが選択できたか。パスがもらえる場所に動いてパスがもらえたか。 →△ 周りに指示が出せるようにしよう。 →▽ 視線を上げて、味方や敵の状況を見るクセをつけよう。敵や味方の動きを予測しよう。
4. ミニゲームをする。 ↓ ゲームの中で本時の狙いにあったプレーができたか評価する(ゲームの評価とこれからの課題を一人ひとりがワークシートにまとめる)。	班	○ それまでの練習をゲームで生かせるように、話し合いで出た意見をワークシートにまとめ確認させる。 ☆ ゲームの中で、それまでの練習と話し合いを生かしたプレーができたか。 →△ 周りに指示が出せるようにしよう。 →▽ 視線を上げて状況を見る。パスは動いてもらう。動きを予測してパスを出す。の3点を強調する。
5. 本時の評価をふまえて	一斉	○ 練習の成果を生かしたか、という観点でゲームの評価が

次時の狙いを設定する。	できるようにワークシートを使って本時の評価をさせる。状況を見ることと、パスの有効性を強調しながら全体を通した講評をし、次時の狙いを設定し伝える。
-------------	--

6. 授業の考察

(1) 指導案について

- ・ 生徒観の表現を、一般的な生徒のことを書くのではなく、もっと授業を行った1年5組のことについて具体的に書きそれを次の指導観につないでいくべきである。
- ・ 欠点という表現や悪い点という表現また、課題という表現などを使っているが欠点がすなわち課題となることも多いのでどちらかに合わせればよいのではないか。マイナス的なイメージの表現は避けるべきなので課題ということばがよいのではないか。

(2) 指導について

- ・ 小集団の活用について—小集団を活用することで、最終的にゲームで勝つことを目標に練習やミニゲームの中でも声を掛け合ったり、アドバイスし合ったりできて授業に非常に活気が出た。自然にリーダーが生まれるような姿も見られ、よかった。今回は人数的にも7~8人で、反省の話し合いもよくまとまっていた。
- ・ 時間配分について—ワークシートを使って練習の評価や反省、試合に向けての課題などの項目を設けたが、チームのメンバーそれぞれについて話し合っていたら実際にボールに触れている時間が短くなってしまった。前半の練習は十分時間をとることができたが、ワークシート記入に時間がかかってしまったため後半の試合形式のゲームの時間が短くなってしまった。
- ・ スクエアパスの指導について—スクエアパスというのは指導者が命名した練習法であるが、実際サッカー用語でスクエアパスというのが存在するので、別の名称を使った方がよい。コーンの場所に移動することでパスコースを作って、パスをもらうことを狙った練習であったが、4点しかないコーンの場所よりもコーンとコーンを結んだ辺上を移動した方が動きに自由度があり、よりよいパスをもらう動きの練習ができたのではないか。
- ・ グリッドの数について—お互いのプレーを見て反省に生かす目的でチームを2つに分けて練習を行ったが、できるだけボールに触れるように、グリッドを増やし全員が練習できるようにした方がよいのでは。プレーしながらでも反省点や課題に気づけるのではないか。

(3) ワークシートについて

ワークシート記入に時間をとりすぎて、実際にボールを触って動く時間が少なくなってしまう。ワークシートの記入方法を工夫し、その練習の目標をこちらが明確に項目

○ミニゲームの反省（チーム）

パスをもらいに いけたか？	これからの課題
点	
パスがたくさん つながったか？	
点	

美術科の取り組み

1. 問題解決学習の取り組み

(1) 育てたい力

「課題から考えられる表現を工夫し、より豊かな表現へつなげられる力。

(2) 具体的な取り組み

1年生から3年生までの3年間に身につけて欲しい表現の力を、年間指導計画の中で系統立て、基礎から発展へとつなげられる題材設定をしていく。

〈事例〉第1学年の「ワードアートを使ったレタリング学習」の基礎的学習から、第2学年の「ポスターを作ろう」への発展的題材設定

- ・ 1年時に身につけさせておきたいレタリングについて、コンピュータソフトのワードアートを利用して、短時間のうちに楽しく作り出せる技能を身につけさせる。その上で2年時に、そのレタリング技術を利用し、ポスター制作に発展させていく。

(3) 成果と課題

- ・ 今までのレタリング授業では、基本的な明朝体とゴシック体程度しか教えることができなかったが、コンピュータソフトを利用することで、一気に、さまざまな書体の試みや形の変形、着色による配色の工夫などができるようになる。
- ・ 授業時数が少ない中、一題材あたりの制作時間を短縮することができ、生徒も成就感を得られる作品ができあがるようになる。
- ・ コンピュータ教室の使用が混み合い、教室使用がままならないので、年度当初からの教室確保が必要になる。

2. 協同学習の取り組み

(1) 育てたい力

「集団の中のリーダーを中心とし、共に支え合い、表現していこうとする力」。

(2) 具体的な取り組み

グループ制作題材の設定。

〈事例〉第3学年「卒業制作（サンドアート）」

- ・ 全体で話し合い、12人（男子6、女子6）のリーダーを推薦し、6班の男女混合班（6

～7人)を作る。

- ・リーダーを中心に制作テーマを話し合う。
- ・テーマに沿って各自が原画を考え、持ち寄り、班の原画を決定する。
- ・リーダーを中心に制作手順を話し合い、協力し合いながら計画的に制作を進める。

(3) 成果と課題

- ・ほとんどの生徒がグループ制作の経験がなく、最初はとまどっていたが、原画が決まり制作が始まると、楽しく授業に取り組むようになり、リーダーが班をリードできるようになってきた。
- ・授業後の生徒達の感想で、「授業が楽しかった」という感想の生徒が95%あったのは大きな成果であった。
- ・コンピュータ教室の使用が混み合い、教室使用がままならないので、年度当初からの教室確保が必要になる。

技術・家庭科の取り組み

1. 問題解決学習の取り組み

(1) 育てたい力

「課題から考えられる表現を工夫し、より豊かな表現へつなげられる力」。

(2) 具体的な取り組み

- ・ 小集団を活用した学習形態
- ・ 自ら課題を見つけ、共に向上していく学習内容

〈事例〉 第2学年「情報とコンピュータ」 単元名「コンピュータを活用してみよう」

1) 学習の流れ

- ・ コンピュータの構成を知る…………… 1時間
- ・ 図形処理ソフトの使いかたとその利便性を知る…………… 1時間
- ・ 図形処理ソフトを使い、マグカップの図案を作成する…………… 1時間

2) 問題解決の手だて

- ・ コンピュータを使った問題解決を自分一人で行うのではなく、個人で作成したファイルを学級集団で共有することにより、友だちのアイデアや技術を参考にできるようにした。これはコンピュータの最も大きな利便性の一つだと思われるが、友だちの意見やアイデアを取り入れていく授業形態の一つとして有効だと思われる。

3) 生徒の感想

- ・ 同じ様なものを作った人が多かった。
- ・ 友だちの絵が使えて便利だった。
- ・ ブラシで描いた方がキレイだったので、自分の絵もブラシで描いたら楽だった。
- ・ 1人で描くより人が描いたやつに描き足したりして、楽しかった。

(3) 成果と課題

- ・ 一斉授業や個人作業が多いコンピュータの授業の中で、いかに集団を有効に活用するかという視点で行った授業である。子どもたちはファイルを共有することで、友だちのアイデアを参考にし、さらに発展的な技能やアイデアにつなぐことができた。また、便利だという実体験を通して、その裏の著作権についても触れることができた。

2. 協同学習の取り組み

(1) 育てたい力

「集団の中のリーダーを中心とし、共に支え合い、表現していこうとする力」。

(2) 具体的な取り組み

- ・ 小集団での活動（自主的に課題を設定し、それを解決していく活動主体）。

〈事例〉第1学年題材「家庭生活と地域」

1) 学習の流れ 学習課題「私たちは地域とつながっているか」

- ・ 家庭のはたらき……………1時間
題材での学習課題と学習の流れを把握する。
→家庭のはたらきについて発表し合う。〈小集団学習→一斉学習〉
- ・ 家族の中で育つ……………2時間
家庭のさまざまな場面を想定し、ロールプレイングを行う。〈個別学習→一斉学習〉
- ・ 家庭生活と地域……………2時間
課題を解決するために、ブレインストーミングを行う。〈小集団学習→一斉学習〉
地域の行事や活動について聞き取り調査を行う。〈個別学習→一斉学習〉

2) 小集団学習を深めるための手立て

- ・ 「ブレインストーミング」という小集団を生かした取り組みを行った。この学習方法は、小集団で一人ひとりのアイデアや意見を自主的に表現し理解を深めたいときに有効であると考えた。今回の「ブレインストーミング」では「自分たちは地域とつながっているか」という題材を通しての大課題を解決するために「地域の人に助けられたことがあるか」「地域でどんな活動や行事が行われているか」というような具体的課題を生徒たちが設定し、さらに具体的課題の中から生徒全員が話し合うための具体的共通課題を一つ選定した。この具体的共通課題に対して各班で制限時間を設け、班員がそれぞれカードに自分の答えを書いていくようにした。このとき答えは一人の生徒につき5種類以上考えられるように促し、生徒個々が最大限にその能力を発揮できるようにした。時間終了後、班長を中心として班で話し合っまとめ、全体で発表し合った。班長はリーダーとして班員の意見を整理していくが、あらかじめ整理の仕方については指導した。

3) 生徒の感想

- ・ 私はあまり発表しない方だけど、カードに書いたり、楽しく自分の意見を言ったりすることができてよかった。これからも頑張ろうと思います。
- ・ 私は今日のゲーム（ブレインストーミング）で5個以上意見をあげました。このゲームでいろいろと地域の行事を思い出すことができました。また班の人や他の班の人の意見を聞いてこんな行事や活動があったのかと思いました。
- ・ 始めは地域の人に支えられているとは思っていなかったけれど、よく考えてみるとたくさん助けられていたので感謝したいです。
- ・ 日頃地域のことはあまり考えないけど、生活では地域の人にたくさんお世話になっているから私も地域の活動に参加しようと思った。

(3) 成果と課題

- ・ 「ブレインストーミング」により、活動主体となる生徒一人ひとりが自分の考えを意欲的に表現することができた。授業開始時点では「地域の人々はつながり合っている」というように感じている生徒はごく少数であったが、多くの活動や行事を出し、話し合うことで、生徒たちは「地域とつながり合っている」ということを実感し、理解を深めることができた。
- ・ 今回の「ロールプレイング」や「聞き取り調査」では、個別で取り組んだことを全体で発表するという形態をとったが、今後は小集団を生かした実践も行ってみたい。

第2学年2組 技術・家庭科学習指導案

2005年5月18日(火)4限

場所：コンピュータ室

指導者：白石隆俊

1. 単元名 「コンピュータを活用してみよう」。

2. 単元設定の理由

現在の社会は高度情報化社会と呼ばれて久しい。パーソナルコンピュータ、ネットワークの普及は、さまざまな作業の効率化、利便性など、現代の社会を支える柱の一つとなりつつある。コンピュータを効率よく活用する能力を身につけることは、現代社会を生きるうえで重要な意味を持つといえる。ここでは、応用ソフトウェアを使うことを通して、コンピュータの効率的な活用と、基本的な知識の習得を主な狙いとし、本題材を設定した。

本学級の生徒は男子19名、女子17名である。授業には意欲的に参加し、発表や質問も積極的に行う。生徒間のコンピュータに対する習熟度には差があり、自宅ではほぼ毎日のようにコンピュータに向かっている生徒から、入力にやや手間取る生徒までさまざまである。

指導にあたっては、絵を描くという作業を通じてファイルの共有・コピー等、コンピュータの利便性を体感できるよう工夫していきたい。また、作業の内容をマニュアル化することにより、一人ひとりの習熟度の差に対応できるようにしていきたい。

3. 単元の目標と評価規準

応用ソフトウェアを使い、コンピュータの利便性について知るとともに、基本的な知識を理解することができる。

生活や技術への関心・意欲・態度(ア)	生活を工夫し創造する能力(イ)	生活の技能(ウ)	生活や技術についての知識・理解(エ)
応用ソフトウェア	マグカップの図案	コンピュータの利	コンピュータの基

ア・ネットワークの利便性や役割に関心を示す。	作成法を工夫することができるとができる。	便性を活かし、データを作成・保存できる。	本的な構成・使い方を知り、その利便性を説明できる。
------------------------	----------------------	----------------------	---------------------------

4. 単元の指導計画・評価計画

4時間扱い、本時 2/4 (○数字は時間数)

学習活動・学習内容	具体的評価規準（評価方法）
① コンピュータの構成を知る。	・ ハードウェア、ソフトウェアについて説明できる。(エ：ワークシート)
② 図形処理ソフトの使い方とその利便性について知る。	・ ペイントソフトの使い方、ファイルの共有に関心を示す。(ア：観察) ・ ファイルの管理、共有について説明できる。(エ：ワークシート)
③④ 図形処理ソフト、ネットワークを使い、マグカップの図案を作成する。	・ コンピュータの利便性を活かし、図案作成方法を工夫することができる。(イ：ファイル) ・ 図形処理ソフトの特性を活かしたファイルを作成することができる。(ウ：観察)

5. 本時の指導計画

(1) 本時目標

図形処理ソフトや Windows の基本的な使い方を知り、ネットワークを使ったファイル保存ができる。

(2) 指導過程

学習活動・学習内容	形態	☆ 評価規準・方法・観点と、その支援 →△ →▽ ○ 指導上の留意点
1. 本時の学習課題を捉える。	一斉	・ 作業を通してソフトの使い方とファイル共有の2つを学習することを知らせる。
2. 図形処理ソフトの使い方を知る。	一斉	
↓		
素材となる絵を作成する。	個人	☆ [関心・意欲・態度] 図形処理ソフトの使い方に関心をもち、積極的に描画に取り組む。(活動状況の観察・ファイルの点検) →△ より完成度を高めるよう指導する。 →▽ マニュアルを元に操作方法を個別指導する。

3. ファイルの管理・共有について知る。	一斉	・ ポイントを絞ってあまり難しい説明にならないように配慮する。
↓ ネットワークを使い、データを保存する。	個人	☆ [知識・理解] ファイルの共有による利点を説明できる。(ワークシート) →▽ データ保存ができてない生徒を先生機でチェックし、個別指導を行う。
4. コピー・貼り付けの方法を知る。	一斉	・ プロジェクタとマニュアルを使い、説明する。
↓ 個々で素材集から貼り付けを行う。	個人	☆ [技能] 素材集からコピー・貼り付けができる。(観察) →△ マニュアルに沿い、さまざまな貼り付け方法を試させる。 →▽ 個別指導を行う。
5. 本時の学習を振り返り、次時の予定を聞く。	一斉	・ ファイルの共有による利点をおさえ、次時にどうつながっていくかを知らせる。

6. 授業の考察

技術科の情報とコンピュータ領域では、座席の配置の問題で班学習という形をとることはできない。今回の学習ではLANを使い、情報を共有することによって友だちのアイデアのよいところ等を学び合う学習形態をとった。一斉学習や知識伝達型の授業に比べ、実体験を通してコンピュータの利便性を学ぶ上では有用だったように思う。ネットワークを使った小集団学習はさまざまな可能性が考えられるが、ソフトの問題や、課題の提示の仕方などが今後の課題になる。

第2学年1組 技術・家庭科学習指導案

2005年5月18日(火)3限

場所：コンピュータ室

指導者：藤原由美子

1. 題材名 「献立を立て食生活の課題を考える」

2. 題材設定の理由

指導要領家庭分野A(1)ウにおいては「食品の栄養的特質を知り、中学生に必要な栄養を満たす1日分の献立を考えること」となっている。献立は食品の選択から調理の過程を経て食卓にのせるための総合的な題材と考えることができる。したがって、献立作成は栄養

や調理に関する学習を日常生活に具現化する過程において重要な意味を持つといえる。

生徒たちは、これまでに栄養素や食品、調理についての学習を小学校並びに中学校 1 年時に行ってきたおり、食生活に関わる学習に興味を持っているものは多い。しかし献立に関しては調理実習や家庭において 1 食分を考えるだけにとどまっている。本学級はひまわり学級の生徒との交流学級である。ひまわり学級の生徒 1 名を含め、ほとんどの生徒がコンピュータの基本操作技術を身につけており、技術面での個人差は比較的少なく、意見も活発に交換できる学級である。

本題材では、ただ単に献立を立てさせるだけではなく、献立を立てることで自分の食生活の課題を解決させていきたい。はじめに日常の食生活に近い献立作成により、個々の問題に気付かせ、次に栄養士との T T で問題解決へと向かわせる。そして最後に自分の理想の献立作成により問題解決をさせ、生活に生かそうとする意欲や態度へとつないでいきたい。指導にあたっては、到達できなかった生徒への個別指導や生徒相互の教え合いの促進、到達できた生徒への発展課題の提示などの方法で、個々に対応していきたい。さらに、お互いの成果を交換し合う場を設け、学習が深まるように努めたい。また授業中、授業後における評価が次の活動へとつながるよう、生徒の変容をワークシートや自己評価表などで常に把握しておくことも心掛けていきたい。

3. 題材の目標と評価規準

中学生に必要な栄養素を満たす献立を作成し、自分の食生活の課題を見つけ生活に生かそうとする。

生活や技術への関心・意欲・態度(ア)	生活を工夫し創造する能力(イ)	生活の技能(ウ)	生活や技術についての知識・理解(エ)
<ul style="list-style-type: none"> 食品の栄養的特質について関心を持ち、献立を検討している。 自分の食生活に関心を持ち、課題を解決しようとしている。 	<ul style="list-style-type: none"> 献立の条件に基づいて身近な食品を選択し、献立作成を工夫する。 	<ul style="list-style-type: none"> 献立ソフトを用いて、自分の一日分の献立を立てることができる。 食生活を振り返り、自分の食生活における課題を解決することができる。 	<ul style="list-style-type: none"> 中学生に必要な栄養素を満たす献立作成の条件が分かる。

4. 単元の指導計画・評価計画

4 時間扱い、本時 2/5 (○数字は時間数)

学習活動・学習内容	具体的評価規準 (観点：評価方法)
① 献立の基本と献立ソフトの活用方法を知る。	<ul style="list-style-type: none"> 献立作成の基本と題材の流れを把握する。(エ：自己評価表点検) 献立ソフトの活用方法を知る(ウ：活動状況の観察)

② 自分の日頃の献立を再現し、問題点に気付く。	<ul style="list-style-type: none"> ・ 献立ソフトを用いて自分が日頃食べているものに近い献立を立てることができる。(ウ：活動状況の観察・献立作成表点検) ・ 自分の日頃の食生活の問題点に気付く。(ア：ワークシート・自己評価カード点検)
③ 中学生期の食生活の大切さを知り、自分の食生活の問題の解決方法が分かる。(保健士から直接話を聞く)	<ul style="list-style-type: none"> ・ 食生活を振り返り、自分の食生活における問題点を解決する方法を見出すことができる。(ウ：観察、ワークシート・自己評価表の点検)
④ 栄養のバランスや組み合わせを考えた一日分の献立を立てる。	<ul style="list-style-type: none"> ・ 献立ソフトを用いて自分の問題点を改善した理想の献立を立てることができる。(ウ：観察、献立作成表点検) ・ 栄養のバランスに配慮しながら献立作成を工夫している。(イ：献立作成表・自己評価カード点検)
⑤ 献立作成の条件分かり、友だちの献立を参考にしながら、自分の立てた理想の献立作成について振り返ることができる。	<ul style="list-style-type: none"> ・ 友だちの献立を参考に自分の献立を振り返り、今後の食生活に生かそうとしている。(ア：ノート・自己評価カード点検) ・ 1日分の献立作成の条件を栄養や組み合わせについて3例以上具体的にあげることができる。(エ：学期末ペーパーテスト)

5. 本時の指導計画

(1) 本時目標

献立ソフトを用いて自分の日頃食べているものに近い献立を立てることができ、自分の食生活の問題点に気付く。

(2) 指導過程

学習活動・学習内容	形態	☆ 評価規準・方法・観点と、その支援 →△ →▽ ○ 指導上の留意点
1. 本時の狙いを確認する。 課題：日頃の献立を再現し、問題点を発見しよう！ 2. 献立ソフトを用いて、一日分の献立を作成する。 全体で献立の基本や献立ソフトの基本操作を確認する。 ↓ 個々で献立作成する。	一斉 個別	<ul style="list-style-type: none"> ・ 本時の狙いや評価規準について具体的に示し意欲を喚起する。 ・ 自分の日頃の食を想起させ、実際に食べているものにより近い献立を再現させる。 <p>☆ [技能] 献立ソフトを用いて自分の日頃食べているも</p>

(3) 小集団（班）について

題材の最後の時間には、各自で立てた献立を交換し合い、班内で相互評価を行った。お互いの献立を共有し合うことで多様な献立に気付いたり、今後生活の中で参考になることを発見したりすることができた。個々で自分の献立を振り返るだけの活動に比べ、明らかな効果が見られた。

- ・ K君の間食はおかしではなくて豆乳など健康に気を使っていると思った。
- ・ Oさんは主食・主菜・副菜のバランスがとれているので感心した。
- ・ Wさんはバランスもよいし、間食もとりすぎているし参考にしようと思う。
- ・ 食後に果物でビタミンをとり入れていたのはよかったと思う。
- ・ 自分のはみんなに比べて脂質が多いので、これからは脂質やエネルギーを減らしていきたい。

(4) 成果と今後の課題

個別の問題を解決していく中に協同学習を取り入れることで、気付きが広がり、学習が深まった。パソコンを使用して個別に活動する場面の中でも、ネットワークを利用して他の献立や作業のようすを提示すると効果があった。個別作業の中のどこに交流場面を作っていくかを今後はさらに検討していきたい。

音楽科の取り組み

1. 問題解決学習の取り組み

(1) 育てたい力

「課題から考えられる表現を工夫し、より豊かな表現へつなげられる力」

(2) 具体的な取り組み

器楽学習の中でアルトリコーダーを使用し、自己の技量や表現能力をより伸長させるために年間指導計画に系統的に組み入れ、基礎的な奏法から、より豊かなリコーダーの表現ができるよう学習内容を設定する。

〈事例〉

- ・ 第1学年では、本校独自のテキストを作成し、個人の能力に応じた学習展開ができるよう個人の学習進度に合わせ、各個人が現在抱えている課題をより明確に学習できるように設定している。
- ・ 第2学年では、1年次に経験した学習内容を、2年次に生かせるようアンサンブル学習を中心に設定している。変奏曲を用意し、各個人の課題を難易度別に準備し、各個人が抱える課題だけでなく、アンサンブルを通じた表現も生かせるよう設定している。

(3) 成果と課題

- ・ 今までの一斉授業では、各個人の能力や進度に応じた学習が難しく、何よりも生徒自身が自分の課題を明確にできない状況が続くため、この方法を取り入れたところ、生徒自身が自分自身の課題を本当の意味で自分の課題として取り入れ、毎時間の大きなめあてがより明確になった。
- ・ 今後は各個人の表現能力をどう学習集団全体の表現として生かせるよう、より工夫が必要となる。

2. 協同学習の取り組み

(1) 育てたい力

「集団の中のリーダーを中心とし、共に支え合い、表現していこうとする力」。

(2) 具体的な取り組み

歌唱表現での取り組み（合唱）。

〈事例〉 全学年（合唱コンクール）

各クラス男女を声域ごとにそれぞれ2パート、計4パートに分ける。パートごとにパートリーダーを選出し、各パートを技術的な表現だけでなくパートやクラスの雰囲気盛り上げることも含め、取り組んでいく。

(3) 成果と課題

- ・ 1年次はなかなかリーダー自身も最初は何をしていいのかわからないことも多かったが、2年生や3年生の取り組み参考にしながら、徐々に目的に向かい活動できるようになった。またリーダー以外の生徒もリーダーと共によりよい表現のためにリーダーをサポートしながら取り組む姿が見られるようになった。
- ・ 最初はリーダーもなかなか建設的な意見や表現ができにくい雰囲気もあったが、生徒の大きな目標や毎時間の課題を明確にし、全員が同じめあてを共有できるよう工夫することで、より豊かな表現の大きなきっかけとなった。
- ・ 今回の取り組みで得られた支え合いを次の学習や題材で生かし、より高めるために教師自身の具体的な手立てが必要となる。

第1学年5組 音楽科学習指導案

2005年10月21日（木）6限

場所：第1音楽室

指導者：米原真吾

1. 題材名 ハーモニーに親しもう（合唱）

教材：混声三部合唱曲 「ぜんぶ空」 作詞：里乃塚玲央／作曲：瑞木 薫

2. 題材設定の理由

(1) 指導内容について

本題材は、合唱教材での声部の役割を感じ取りながら、豊かで美しい響きのある合唱を体験することを狙いとしている。今回の題材では、歌唱表現における多様な発声からその曲に相応しい歌唱表現を工夫し、自己の表現に結び付け、それが全体の響きになった時の調和を感じ取って合唱することを目的としている。また曲の各声部の役割を理解し、生徒相互で曲に相応しい表現を工夫させる活動も取り入れていきたい。これは学習指導要領のA. 表現2（内容）：(1)－イ「曲種に応じた発声により、言葉の表現に気をつけて歌うこと」、A. 表現2（内容）：(1)－エ「声部の役割を感じ取り、全体の響きに気を付けて合唱や合奏をすること」、にも対応し、指導の重要な事項としている。全体の演奏をよりよく豊かに表現するためには、記譜されているような強弱、速度記号、リズムなどを理解し、自分の

パートを正しく歌うだけでは達成できない。バランスのよい合唱には、自分の声部を理解した上で他声部にも耳を傾け、その響きを聴き取る能力も必要になる。具体的には、指揮者になり全体を聴く、録音・録画で自分たちの演奏を視聴する、など考えられ、客観的に全体の響きを捉えてこそ目指すバランスの取れた合唱に近づくのである。その力を養うことこそ、豊かな合唱への道程であると考え。発声についても生徒個々の変声等を配慮しながら工夫するよう気を付けたい。

(2) 生徒の実態

本学級は、男子 17 名、女子 17 名、計 34 名の学級である。小学校の学習の積み重ねとともに、生徒達は今まで歌唱、器楽、鑑賞などさまざまな領域で学習してきた。しかし、今年度最初のアンケートを行った結果、授業に対して約半分以上の生徒が「苦手」意識を持っている。その理由として、「音程が取りにくい」「楽器の演奏が苦手」「自分は音痴である」などあげている。中には数名、音楽を得意としており、その理由として「歌うことが好き」「楽しい」などあげている。アンケートを基に大半の生徒が教科としての音楽に充実感を持たないまま学習を進めれば、中学校音楽科の目標も達成できないと考え、4 月以降、音楽表現の主役は生徒一人ひとりであることを意識させ、音楽の学習へより意欲を高める内容が必要になった。授業の導入等では仲間づくりを基本にし、その意識を高める取り組みや小集団での学習形態など、積極的に取り組むことができるよう生徒の意欲を損なうことなく、また苦手意識を持っている生徒や消極的な生徒にはその意識を払拭でき、自己目標が達成できるよう、個に応じた手立てを現在も試行錯誤し、取り組んでいるところである。

(3) 指導について

現在、合唱コンクールに向けて各クラス一丸となって取り組んでいるところである。授業ではパート別に 10 名弱のグループが 4 つある。それぞれパートリーダーが中心となり、自分たちのパートの課題を見つけ、それをグループ内での問題や課題を解決し、目標を達成できるよう、支え合いや関わり合いを重要視し取り組んでいる。各声部の練習でも、比較的短時間で習得できる生徒とそうでない生徒について、パートの中でどう関わっていけば相互の向上が図れるか、生徒同士の意見が大きくぶつかることもある。4 月からの授業では仲間づくりを視点に入れた取り組みを多くし、ゲーム的要素やグループ内相互評価を取り入れるなど、共に支え合い関わり合う活動を行ってきた。半年たった現在、生徒は集団内での相互向上を意識させる行動が増えている。

生徒が楽曲を理解するには、楽曲からの形式的特徴と内容的特徴の 2 つの側面からのアプローチが必要となる。そしてその側面をともに感じ取っていくためには相当の時間や知識が必要となり、生徒にとって耐えなければならない作業が必要となる。そしてそれを乗り越えてこそ、1 つの楽曲から構造的側面を知覚し、感性的側面を感じ取る。それを踏まえ、

その楽曲の背景にある文化的側面を理解することにより、さまざまな関心や興味、表現が向上すると考える。指導におけるさまざまなアプローチから、生徒自身の直感的イメージや感覚的表現を基点とし、その音楽から何かしら喜びやよさを見出せるようにしたい。そしてそのよさや喜びを授業の糧とし、また生徒同士が関わり合いの中で共に分かち合い、共に向上していける態度を養っていききたい。そして、将来的に幅広い視点に立った音楽を自ら表現できる糧としたい。

3. 題材目標と評価規準

- ・ 合唱曲に相応しい発声を工夫しながら、積極的に歌おうとする。
- ・ 声部の役割を感じ取り、表現方法に気を付けて、全体の響きとのバランスを考え合唱できるようにする。
- ・ 楽曲からイメージされるものや音楽の諸要素などから音楽のよさを体感できるようにする。

音楽への関心・意欲・態度(ア)	音楽的な感受や表現の工夫(イ)	表現の技能(ウ)	鑑賞の能力(エ)
合唱曲の歌詞の内容や、楽曲から想像できる曲想、曲に相応しい発声や表現、各声部の全体のバランスに関心を持ち、積極的に取り組んでいる。	楽曲の形式的特徴と内容的特徴の2つの側面を踏まえ、そのよさや特徴を捉え、それを自己に内在する経験と比較し、そのよさが蓄積され、表現のためのフィードバックになるよう工夫している。	自己の歌唱技術をより向上させるため、音楽を平面的表現から立体的表現になるよう、全体のバランスを考えながら歌っている。	参考になる合唱曲を聴き、楽曲から伝わる記譜され得ない音楽のこころを聴き取っている。

4. 題材の指導計画と評価計画

4 時間扱い、本時 3/4

時間	狙いと主な学習活動	★ 具体の評価規準 ☆ 教師の関わり (観点：評価方法)
第1時	〈狙い〉 範唱を聴き、楽曲の特徴や音楽の構成要素を感じ取り、読譜する。記譜されている音楽の諸要素を考え、主旋律を歌う。	
	○ 「ぜんぶ空」の範唱を聴き、詩情を想像し、その内容を考える。	★ 記譜されている音楽の諸要素の働きや歌詞の内容など曲想に関心を持ちながら聴いている。(ア：表情や態度の観察、発表)
	○ 楽譜から音楽の諸要素を	★ 音楽の諸要素の働きと歌詞の内容や楽曲から生み出され

	<p>読み取り、その意味や働きを考える。(楽曲分析)</p> <p>○ 主旋律を歌い、どのパートが主旋律を歌っているか把握する。</p>	<p>る曲想を感じ取り、自己のイメージを膨らませながら、読譜している。(イ：表情や態度の観察、発表)</p> <p>★ 歌唱練習に意欲的に取り組んでいる。(ア：表情や態度の観察、歌唱の聴取)</p> <p>☆ 教師のイメージや生徒の思いを紹介するなど、生徒の想像力を膨らませる。</p> <p>☆ 記譜されている諸記号の必要性を感じ取らせる。</p> <p>☆ パート練習を見て、適宜アドバイスをし、次の目標につながるようにする。</p>
第2時	<p>〈狙い〉それぞれのパートの役割を把握し、グループ毎に練習をする。そして自分の役割を感じ取り、歌唱表現をよりよく工夫する。</p> <p>○ パート毎に分かれて課題目標を設定し、その課題を解決できるよう、パート毎に歌唱練習をする。</p> <p>○ 曲に相応しい歌い方を工夫し、歌詞の内容や楽曲のイメージを自分なりに表現できるようにする。</p> <p>○ パート練習での課題をクリアし、個人・パート全体の歌唱表現や技能が向上するようにする。</p>	<p>★ ことばの抑揚やリズムなど、表現の仕方を感じ取り、歌唱表現をする。(イ：表情や態度の観察、歌唱の聴取)</p> <p>★ 声部との関わりや全体の響きに関心や興味を持ち、積極的に取り組んでいる。(ア：パート練習の観察、歌唱の聴取)</p> <p>★ 男声・女声のよさや違いを認め合いながら、合唱曲に相応しい発声や言葉の表に気を付けて歌っている。(ウ：表情や態度の観察、歌唱の聴取)</p> <p>★ 全体の響きに気を付けながら、各声部の特徴と役割を生かして歌っている。(ウ：表情や態度の観察、パート練習の聴取、歌唱の聴取)</p> <p>☆ 教師による指導をできるだけ最小限にし、パートリーダーを中心とした生徒同士の賞賛やアドバイスを多くする。</p> <p>☆ 全体合唱でのバランスを考え、各声部を聴き合わせる。</p> <p>☆ 記譜されている音楽の諸記号を把握し、その必要性や重要性を意識する。</p>
第3時	<p>〈狙い〉各声部の役割を把握し、楽曲に相応しい発声や表現に気を付け、それを生かしながら歌唱表現を工夫する。</p> <p>○ 男女毎の演奏を聴き合い、お互いのよさや課題点を考え、互いに向上できる集団づくりをする。</p> <p>○ 全体練習を通して、美しく響いているか聴き取り</p>	<p>★ 合唱曲に相応しい発声や言葉の抑揚やニュアンスなどの特性などに気を付けて歌唱表現を工夫している。(イ：表情や態度の観察、歌唱の聴取)</p> <p>★ 他のパートのよさや課題を把握し、該当パートへの助言を考えながら聴いている。(エ：表情や態度の観察、歌唱の聴取、感想発表)</p>

	ながら、各声部の特徴や役割を考えて合唱する。	☆ 教師による指導をできるだけ最小限にし、パートリーダーを中心とした生徒同士の賞賛やアドバイスを多くする。 ☆ 全体合唱でのバランスを考え、各声部を聴き合わせ、よりよい合唱につながるよう建設的な意見が言える雰囲気を作る。
第4時	<p>〈狙い〉全体の響きを考えながら歌い、その美しさなどを感じ取りながら、より発展した課題を見つけ、よりよい合唱を目指すことができる。</p> <p>○ 色々な練習(グループ、パート、全体)を通して、クラスで合唱する喜びや響きの美しさを体感するとともに、これからの学習に生かせるような、課題や目標を定め、積極的に意欲を高める。</p> <p>○ 合唱を通じて得た仲間づくりや支え合い、関わり合いをこれからの学校生活に生かす。</p>	<p>★ クラスの全員が、よりよい合唱するために、意欲的に歌唱表現をしている。(ア：表情や態度の観察、歌唱の聴取)</p> <p>★ 全員での合唱を通して各声部の働きや効果と楽曲の雰囲気や曲想との関わりを意識して聴き取っている。(エ：表情や態度の観察、歌唱の聴取)</p> <p>☆ 歌い込んできた成果に自信を持たせ、よりよい合唱を体感でき喜びを感じられるようにする。</p> <p>☆ クラスで作上げた合唱を高く評価することで、更なる意欲を持たせ、よりよい音楽表現ができる学級づくりを目指せるよう助言する</p>

5. 本時の展開

(1) 本時の目標

発声と発音に気を付け、互いのパート聴き合い、混声3部の美しい響きで合唱する。

(2) 指導過程

学習活動・学習内容	形態	◆本時の評価規準、()はその評価方法 ◇具体的支援
1. 導入で、生徒同士の関わり合いを大切にされた活動や、発声練習を兼ねて校歌斉唱やブレastreiningする。	一斉 男女グループ 個人	◇ 本時の合唱に際し、その雰囲気や意欲を大切にしながら助言する。
2. 本時の目標を確認し、合唱を表現する意欲を持つ。	一斉	◇ 本時は当該曲を合唱し、各パートの役割を大切にしながら混声3部の響きを感じ取るよう助言する。 ◇生徒自身の意欲的な合唱を尊重しながら、合唱を客観的に

3. 各声部の練習をする。	各パート毎	<p>聴き、助言する。</p> <p>◇パート毎に練習し、音楽表現のようすを把握して、表現要素のなど適宜指導する。</p> <p>◆ 合唱曲に相応しい発声や言葉の抑揚やニュアンスなどの特性などに気を付けて歌唱表現を工夫している。 (イ：表情や態度の観察、歌唱の聴取)</p> <p>◇ Aと判断される生徒へ—よりよい表現になるように、一緒に練習している生徒の手本となるようにアドバイス等する。</p> <p>◇ Bと判断される生徒へ—練習中に必要な音楽的表現に近づくよう意欲や意識を高める具体的な助言をする。</p> <p>◇ Cと判断される生徒へ—発声や表情、音程・音量など、音楽的技術面から支援し、個別にアドバイスをする。</p>
4. 合唱練習をする。	一斉各パート毎一斉	<p>◇ 男女毎の演奏を聴き合い、お互いのよさや課題点を考え、互いに向上できる雰囲気を作る。</p> <p>◆ 他のパートのよさや課題を把握し、該当パートへの助言を考えながら聴いている。(エ：表情や態度の観察、歌唱の聴取、間奏発表)</p> <p>◇ Aと判断される生徒へ—他パートのよさを把握し、積極的に発表できる生徒を賞賛する。そして楽曲から読み取る音楽の表現要素と自己の表現を比較し、よりよい表現になるよう助言する。</p> <p>◇ Bと判断される生徒へ—自分と他パートを比較し、表現でどのような違いがあるか感じ取りながら、自己の表現をよりよいものになうよう助言する。</p> <p>◇ Cと判断される生徒へ—発表する友達の意見を参考にして、歌っている他パートの歌唱表現をよく観察し、自分の声部をしっかりとうたうよう助言する。</p>
5. 本時の学習のまとめ (自己評価カードの記入)をし、自己の新たな課題を明確にし、次時の目標に向け新たな気持ちを持つ。	個人	<p>◇ 次時が、当該曲の仕上げだということを意識させ、意欲的に活動できるような雰囲気を作る。</p>

6. 考察

(1) 授業について

- ・ 積極的に生徒が参加していた授業だった。
- ・ パート練習など、生徒が主体的となって取り組んでいた（リーダーが育っている。欲を言えばリーダーが全教科で活躍できるとよい）。
- ・ 楽しい雰囲気の中で授業が進められていた。
- ・ 自己評価、相互評価を具体的に何が評価されるのか、何を評価し合うのかをより明確にした方がよい。
- ・ 発声指導などを今後も継続的に指導した方がよい。
- ・ パート練習での小集団をより機能させるために相互評価できる雰囲気をより高めていった方がよい。
- ・ 一斉指導や小集団学習でも、生徒一人ひとりが目当てを持って活動しているか。また一人ひとりが達成感を持って活動しているか。
- ・ 生徒や教師の発言に価値付けをしていくともっとよい。
- ・ 生徒一人ひとりが、何ができたかを実感させる評価の視点を工夫する。

(2) 指導案について

- ・ 本時の狙いとアプローチがはっきりとしている。
- ・ 全体的に詳しく書かれており、評価の規準も明確になっている。
- ・ 具体の評価規準は重点項目を1つないし、2つに絞り評価した方がより視点がはっきりする。3つ以上あると、授業では評価しきれない部分も出てくる恐れがある。
- ・ 狙いほどの教科も先生が見てもわかるものにした方がよい（より具体的に）。
- ・ 題材設定の理由では、個に応じた指導や手立ては、より具体的に書き、実際にこういうことをし、生徒はこう変容したと書いた方が初めて見る人にはよくわかる。

<資料 10>

♪2004 箕蚊屋中 合唱コンクール自己評価表♪				
() 年 () 組 () 番 パート () 氏名 ()				
月日曜限	今日のパート目標	自己の練習状況・反省 ※自分の心の変化も書けたらGood!!	目標到達度	自分から見た 今日のクラス は?
／ 曜 限	／ 曜 限			A・B・C

／ 曜 限			A・B・C	
／ 曜 限			A・B・C	
／ 曜 限			A・B・C	
／ 曜 限			A・B・C	
／ 曜 限			A・B・C	

クラス合唱は、1人じゃできない！ 1人もはずせない！
回数を重ねる毎に成長しよう！！ 結果も大切だし、その過程での自己の成長も大切！！ イイものを作るために大いに悩もう！

<資料 11> 箕蚊屋中学校音楽科学習計画

箕蚊屋中学校音楽科学習計画 (1年生 9月~12月) 1年 () 組 () 番 ()

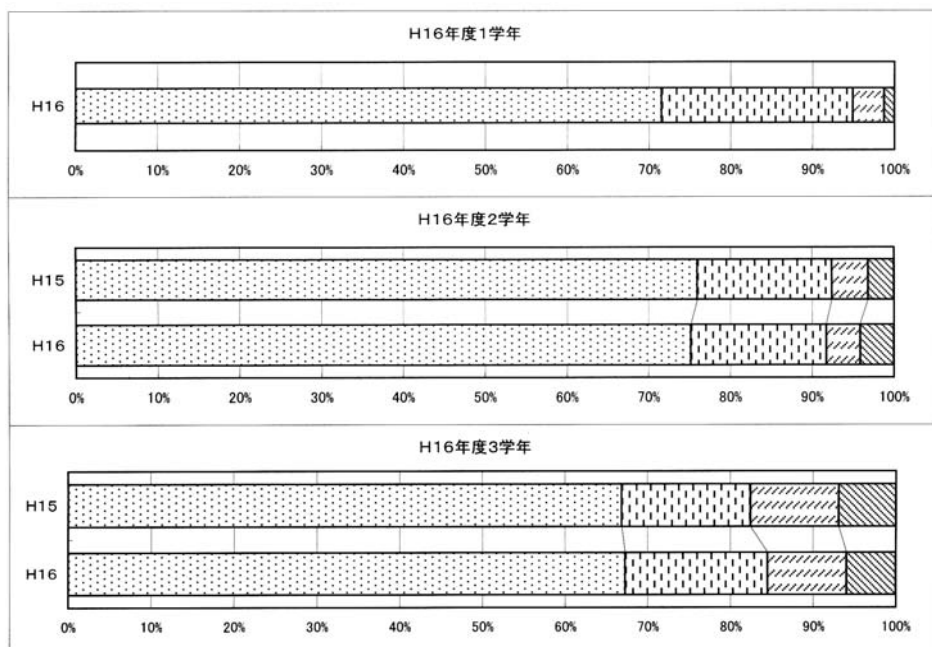
日々の活動: 肩たたき、ローソク消し、発声練習、校歌など			
合唱コンクールでのクラス合唱&文化祭での学年合唱		最高の歌声を目指して、クラスだけでなく中学校1年生の一員としての意識を高めよう	
主な学習内容	合唱コンクール全体の評価 ☆☆☆☆ 元気な声で歌えた ☆☆☆☆ 課題曲の音取り ☆☆☆☆ 自由曲の音取り ☆☆☆☆ パートリーダーに協力できたか ☆☆☆☆ 指揮者に協力できたか ☆☆☆☆ クラスへの呼びかけ ☆☆☆☆ 曲想や詩情、情景を考え気持ちを込めて歌う ☆☆☆☆ 曲想に相応しいダイナミクスで歌う ☆☆☆☆	シューベルトについて理解できた ☆ ゲーテについて理解できた ☆ 独唱での歌い分けを感じ取ることが出来た ☆ 日本語との違いや音色の変化を感じ取れた ☆ 伴奏効果について理解できた ☆ 評価: A・B・C	リコーダーの構造が理解できた ☆ タンギングが上手になってきた ☆ 指番号が全部3分の2以上半分以上3分の1以上 覚えた テキストは第 () 段階 評価: A・B・C
	目標	混声3部合唱に挑戦して合唱の素晴らしい響きを体験しよう クラス全員が一致協力して合唱に参加し、苦しみや楽しみを共に分かち合えるようなクラスや合唱を目指していこう 歌詞を理解したり情景を思い浮かべ、曲想にあったダイナミクスを考えて合唱しよう 美しく響きを持った歌声を目指し、歌唱技術を向上させよう	詩と音楽が結び付いた歌曲の表現を感じ取ろう 歌と伴奏の効果から歌曲の劇的内容を感じ取ろう ソリストが登場人物別に歌い分ける表現を感じ取ろう
目標達成度	☆☆☆☆☆	☆☆☆☆☆	☆☆☆☆☆
教材	合唱コンクール (美しいハーモニーを体験しよう) 課題曲「 夢の世界を 」指揮者: 伴奏者: 自由曲「 」指揮者: 伴奏者:	魔王	器楽「アルト・リコーダーを吹こう」
月	9月	10月	11月 12月

実態調査部会の取り組み

家庭生活と学習に関する調査(2003年度と2004年度の比較)

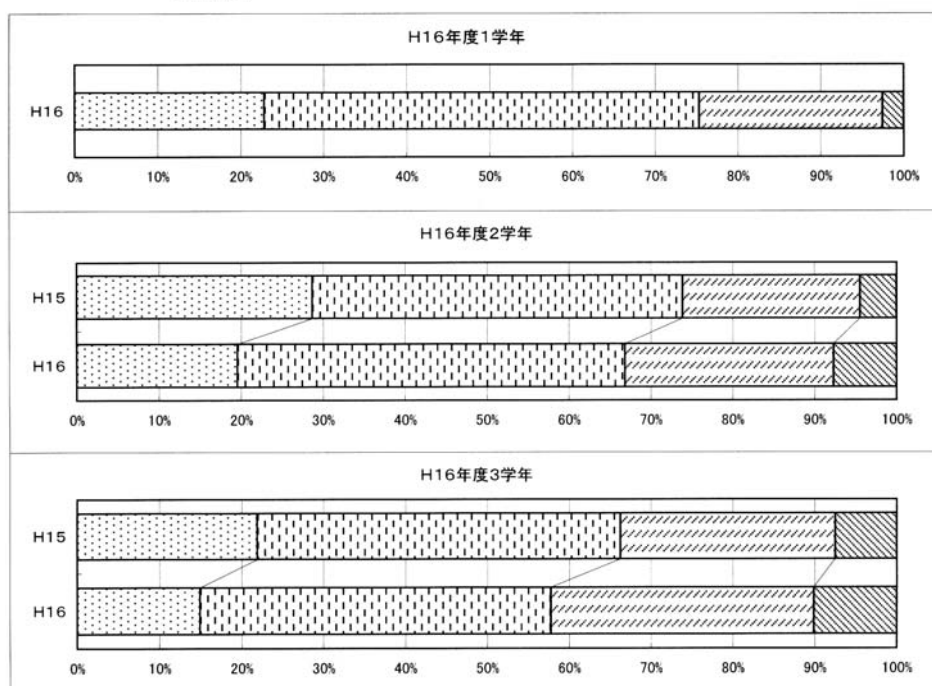
1 朝ごはんはきちんと食べていますか。

- ア 毎日きちんと食べている
- イ だいたい食べている
- ウ 食べないことが多い
- エ 食べていない



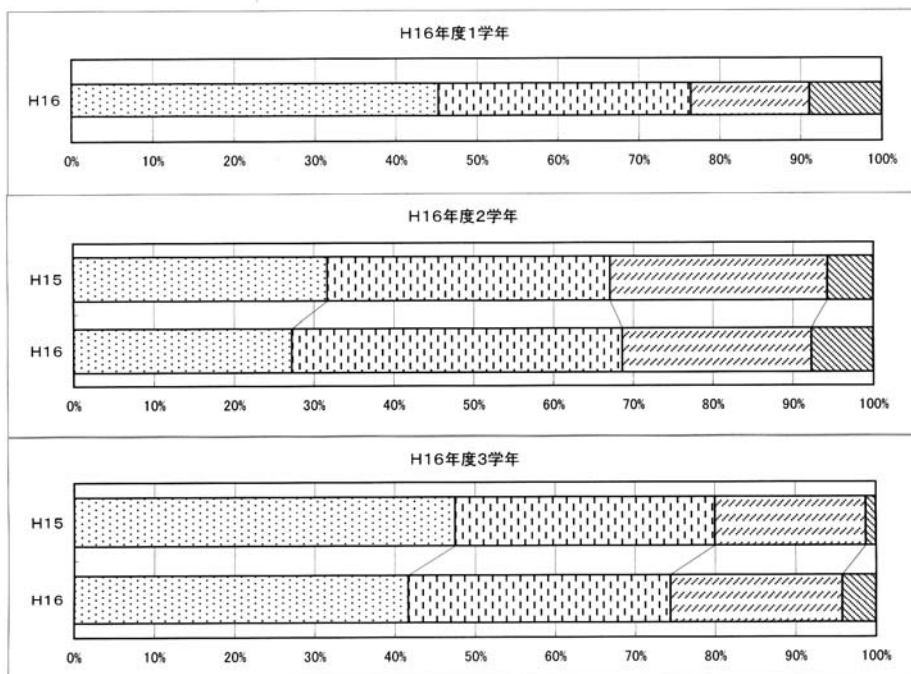
2 ふだんの睡眠時間はどれくらいですか。

- ア 8時間以上
- イ 7時間くらい
- ウ 6時間くらい
- エ 5時間以下



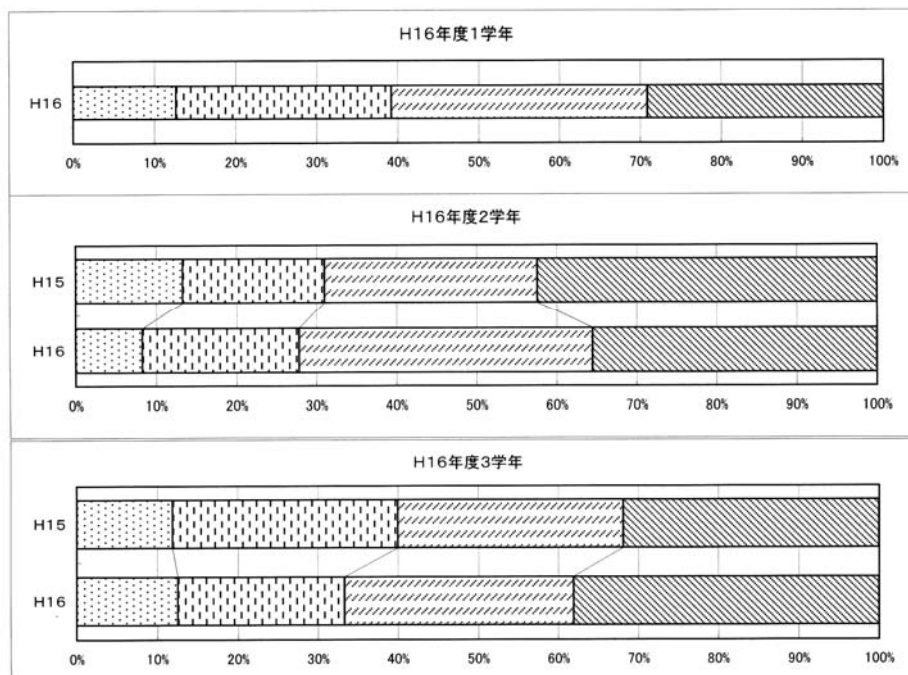
3 ふだんテレビを1日に何時間くらい見えていますか

- ア 4時間以上
- イ 3時間くらい
- ウ 2時間くらい
- エ 1時間以下



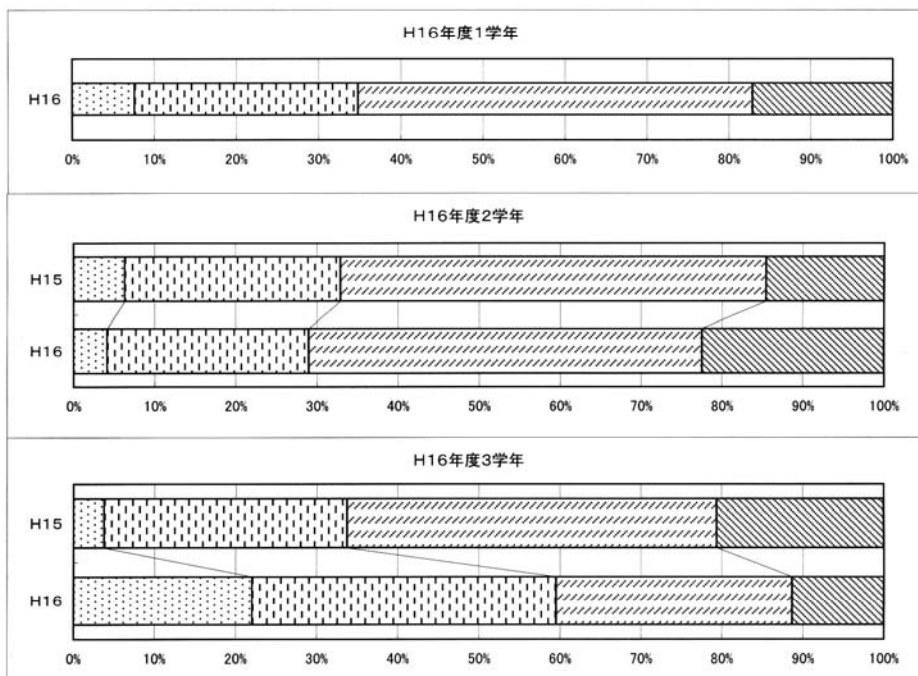
4 ふだんゲーム機やパソコンを何時間くらい使っていますか。

- ア 3時間以上
- イ 2時間くらい
- ウ 1時間くらい
- エ ほとんど使っていない



5 ふだんの家庭学習(塾・家庭教師を含む)は、平均すると1日どれくらいですか。

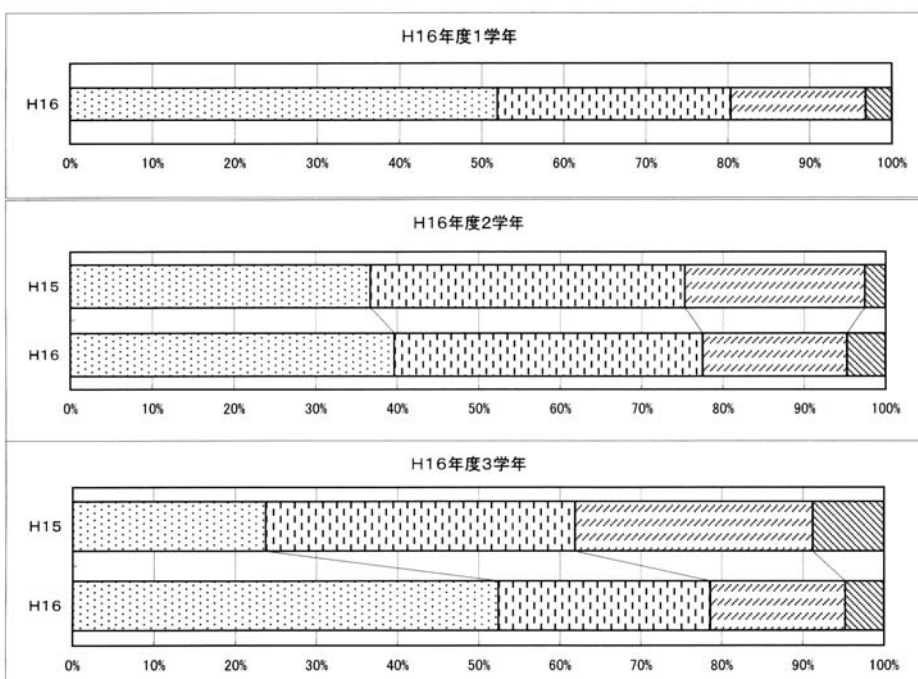
- ア 3時間以上
- イ 2時間くらい
- ウ 1時間くらい
- エ していない



6 期末試験の部停止期間中には、1日どのくらい試験勉強(塾・家庭教師を含む)をしましたか。

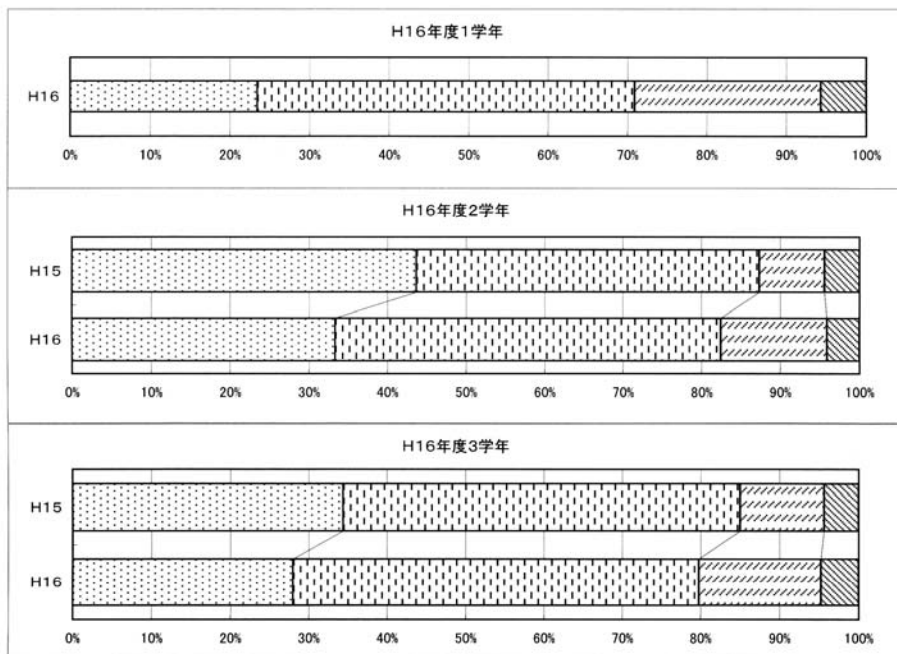
- ア 3時間以上
- イ 2時間くらい
- ウ 1時間くらい
- エ していない

平均時間		H16
H15	2.02	2.22



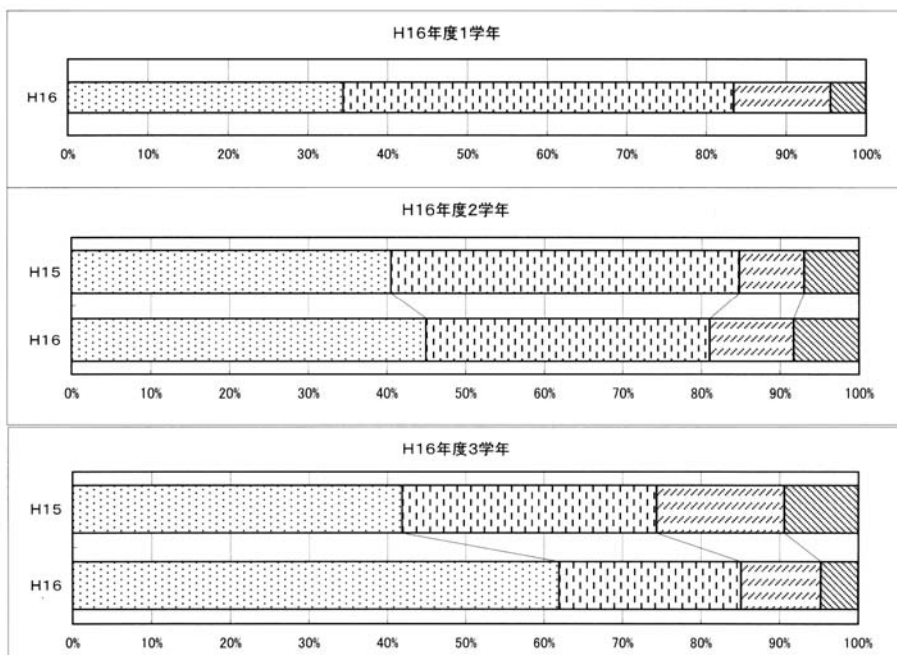
7 宿題(プリント、ワーク、セミナーなど)をきちんとしていますか。

- ア 必ずしている
 イ だいたいしている
 ウ たまにしかしていない
 エ していない



8 家庭での学習は、自分から進んでしていますか。

- ア 自分からする
 イ いわれたらする
 ウ いわれてもしない
 エ 家族からいわれないし、自分もしない



9 塾(家庭教師も含む)で勉強を習っていますか。

- ア 習っている
- イ 習っていない

アの割合 H15 69.3% H16 69.4%

①と答えた人だけが、下記の質問に答えてください。

- I 何の教科ですか。
- ① 国語
 - ② 数学
 - ③ 理科
 - ④ 社会
 - ⑤ 英語

	H15	H16
①	31%	28%
②	65%	66%
③	29%	32%
④	29%	28%
⑤	64%	67%

- II 週に何回くらいですか
- ① 1回
 - ② 2回
 - ③ 3回
 - ④ 4回

	H15	H16
①	9%	9%
②	34%	35%
③	20%	21%
④	3%	2%

- III 塾で習うことになったきっかけはなんですか。
- ① 勉強がわかるようになりたいから
 - ② 家の人がすすめるから
 - ③ 友だちがそうしているから
 - ④ その他

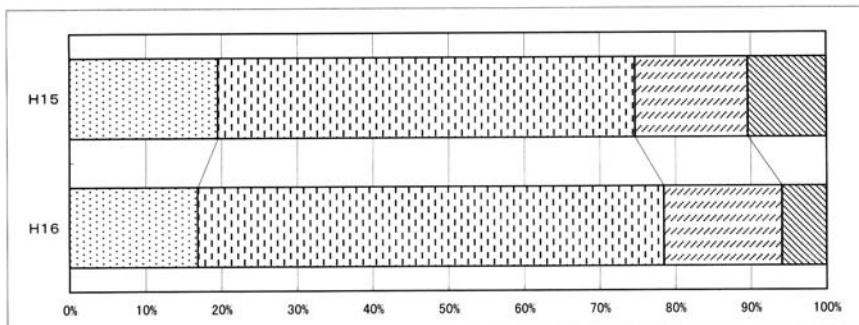
	H15	H16
①	36%	34%
②	21%	23%
③	6%	6%
④	6%	5%

- IV 塾での学習は自分にとって効果がありそうですか。
- ① とても効果があると思っている
 - ② あるていど効果があると思っている
 - ③ あまり効果がないと思っている
 - ④ 効果がまったくないと思っている

	H15	H16
①	24%	23%
②	39%	40%
③	5%	5%
④	1%	1%

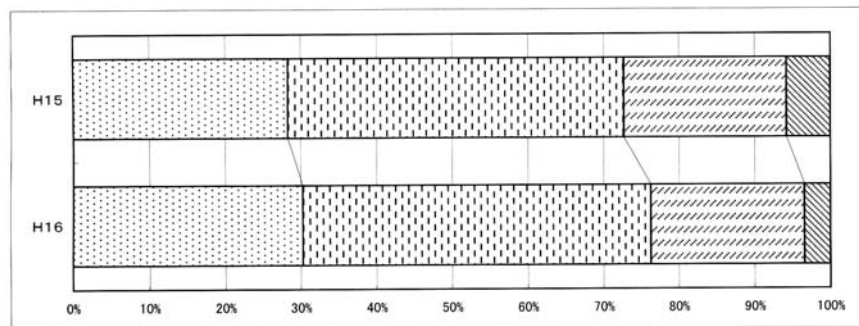
10 家の人と進路のことについて話し合ったことがありますか。

- ア よく話し合っている
- イ 時々話し合ったことがある
- ウ ほとんど話し合わない
- エ 話し合ったことがまったくない



11 中学校卒業後の進路について、はっきりした希望を持っていますか。

- ア はっきりした希望を持っている
- イ だいたいの希望を持っている
- ウ 考えたことはあるが、これといった希望はない
- エ 特に考えたこともない

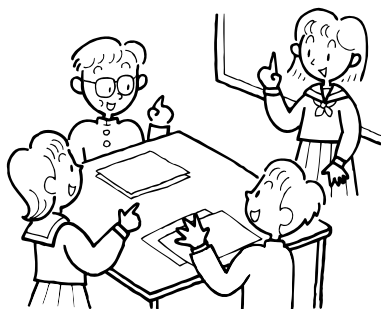


学習集団形成度調査結果

(1) 調査の様式

		学習集団形成度の評価	
		はい	いいえ
1	このクラスの人、チャイム席がきちんと守れていますか。		
2	このクラスの人、忘れ物が少なく、宿題や予習をよくやっていますか。		
3	このクラスの人、課題に対して、先生や友達にすぐ答えを聞くのではなく、自分でしっかり考えようとしていますか。		
4	このクラスでは、自分で考えてわからないことを先生に聞く前に、友達同士で教え合っていますか。		
5	このクラスでは、授業中、自分の思っていることを気楽に発表できますか。		
6	このクラスの人、友達のために、自分のわかったことをどんどん発表しますか。		
7	このクラスの人、発言するとき、クラスの人によく分かるように話していますか。		
8	このクラスの人、授業中、他の人の発表をよく聞きますか。		
9	このクラスの人、他の人の発表がよく理解できないとき、何度でも聞き返して確かめますか。		

学習集団形成度調査



[]年[]組[名前]

●学習集団とは、授業にすべての生徒が積極的に取り組み、進んで発言し、他人の考えをよく聞き、考えを深めていくことができる集団であり、みんなで支え合い高め合える集団の事です。この調査は、あなたの学級が学習集団としてどの程度 達しているのかを調べ、今後の学習に生かしていくためのものです。あなたの学級をみて、次の各項目について自分で判断をし、○をつけてください。

10	このクラスでは発言の機会を今まであまり発表していない人に譲るようになっていますか。		
11	このクラスには、授業中に一回も発言しないような人が半数以上いますか。		
12	このクラスでは、授業中、いつも決まった人だけが発言していますか。		
13	このクラスには、間違いや失敗を笑う人がいますか。		
14	このクラスでは、班の隊形になったとき、机がきちんとくっつけられていますか。		
15	このクラスでは、班の話し合いのとき、一部のだけでなく、みんなで活発に話し合っていますか。		

(2) 調査結果

		1-1	1-2	1-3	1-4	1-5	1-6	2-1	2-2	2-3	2-4	2-5	3-1	3-2	3-3	3-4	3-5	1年	2年	3年
1	このクラスの人、チャイム席がきちんと守れていますか。【はい】	84	78	84	97	97	97	29	93	44	41	58	71	68	85	88	39	90	53	69
2	このクラスの人、忘れ物が少なく、宿題や予習をよくやってくると思いますか。【はい】	45	44	38	21	37	55	26	67	41	28	26	41	76	85	88	78	35	37	73
3	このクラスの人、課題に対して、先生や友達にすぐ答えを聞くのではなく、自分でしっかり考えようとしていますか。【はい】	74	41	81	62	73	83	65	67	53	63	55	68	85	82	94	86	73	60	83
4	このクラスでは、わからないことを先生に聞く前に、友達同士で教え合っていますか。【はい】	94	78	97	93	83	93	100	87	88	100	84	97	94	97	97	92	92	92	95
5	このクラスでは、授業中、自分の思っていることを気楽に発表できますか。【はい】	84	84	81	72	63	86	58	70	47	81	68	97	82	85	69	86	75	65	84
6	このクラスの人、友達のために、自分のわかったことをどんどん発表しますか。【はい】	84	66	81	72	80	90	35	50	47	63	68	88	85	85	47	83	80	53	78
7	このクラスの人、発言するとき、クラスの人みんなによく分かるように話していますか。【はい】	77	59	94	72	73	90	77	87	81	53	61	94	88	88	88	94	80	72	91
8	このクラスの人、授業中、他の人の発表をよく聞きますか。【はい】	87	34	66	38	70	86	35	67	66	56	55	74	82	100	94	86	66	56	87
9	このクラスの人、授業中、他の人の発表がよく理解できないとき、何度でも聞き返して確かめますか。【はい】	32	63	34	66	20	55	23	33	19	44	45	47	56	52	38	28	38	33	44
10	このクラスでは、発言の機会を、今まであまり発表していない人に譲るようになっていますか。【はい】	58	50	72	45	67	76	35	53	34	41	29	65	59	64	50	58	61	38	59
11	このクラスには、授業中に一回も発言しないような人が半数以上いますか。【いいえ】	77	75	75	62	70	76	23	30	47	44	39	79	56	76	56	67	71	37	67
12	このクラスでは、授業中、いつも決まった人だけが発言していますか。【いいえ】	35	28	22	21	43	48	6	20	9	19	19	41	35	36	19	28	30	15	32
13	このクラスには、間違いや失敗を笑う人がいますか。【いいえ】	71	44	84	69	67	86	84	83	47	50	48	62	44	67	84	94	73	62	70
14	このクラスでは、班の隊形になったとき、机がきちんとくっつけられていますか。【はい】	52	72	78	69	60	83	42	33	19	31	23	47	68	24	41	53	65	29	47
15	このクラスでは、班の話し合いのとき、一部のだけでなく、みんなで活発に話し合っていますか。【はい】	87	75	78	93	67	93	71	50	44	38	42	74	74	58	75	83	81	49	73

(3) 学習集団形成度調査の結果より

今回の学習集団形成度調査の集計を見て、まず注目すべき点は「4. このクラスでは、わからないことを先生に聞く前に、友だち同士で教え合っていますか。」という問いに対してだろう。全クラスが「はい」という回答に78%以上の数値を出している。これは全教科、全領域において協同学習を取り入れ、生徒同士が協力し、お互いが高め合い学び合うという目標を常に各教員が考え、実際に行っているからといえよう。具体的には、小集団での学習活動場面にお

いて、友だちに分からないところを自然に聞くことができることが、この結果につながっていると考えられる。これが一斉学習の形態だと難しいと思われる。また、生徒は教師に聞くよりも友だちの方が聞きやすいということの表れであると思われる。したがって、教師の一方的な説明による一斉指導よりも、生徒同士の教え合いによる協同学習が効果的であるということがいえる。

「9. このクラスの人、授業中、他の人の発表がよく理解できないとき、何度でも聞き返して確かめますか。」「12. このクラスでは、授業中、いつも決まった人だけが発言していますか。」という問いに対して、「はい」という回答率が低い。これは、学級全体の場で発言することが生徒にとっていかに難しいことであることを示している。最終的には学級全体の場で自分の意見を言えるようになることが大切ではあるが、そこに至る過程として小集団を有効に使うことによってみんなの前で発言することに対する抵抗感をなくしていくことが必要である。

「5. このクラスでは、授業中、自分の思っていることを気楽に発表できますか。」「6. このクラスの人、友だちのために、自分のわかったことをどんどん発表しますか。」「7. このクラスの人、発言するとき、クラスの人によく分かるように話していますか。」「8. このクラスの人、授業中、他の人の発表をよく聞きますか。」という問いに対する「はい」の回答率が、特に3年生において高い。これは仲間づくりを積み重ねてきた成果だと思われる。このような学級の雰囲気は学習を行う上で重要である。

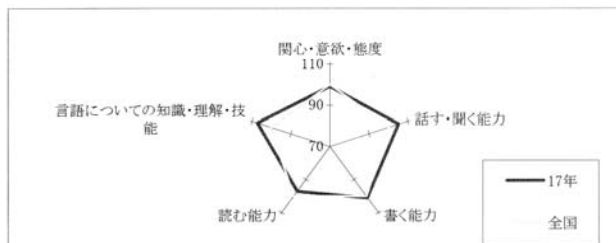
また、「1. このクラスの人、チャイム席がきちんと守れていますか。」「2. このクラスの人、忘れ物が少なく、宿題や予習をよくやってきていると思いますか。」において、「はい」の回答率が低いクラスがある。学習規律の徹底を図りたいところである。

その他、いろいろと問題点や成果があり、その状況はクラスによっても異なっている。学年または学級ごとに細かく分析し、学級担任はもちろんのこと教科担任も、この結果を意識しながら、これからの指導にあたっていかなければならない。また、教師だけが意識するのではなく、生徒もこれらの項目について意識し改善していく姿勢を作っていかなければならない。他のクラスとの比較結果ではなく、自分の学級のおおまかな傾向を知らせることで、みんなで学級をよくしていこうという気分を盛り上げていくことが大切である。再度調査をしたときに数値が改善されるよう努力していきたい。

観点別到達度学力検査（CRT）結果

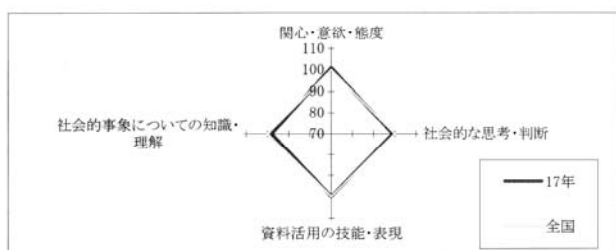
(1) 結果

観点別到達度学力検査(CRT)第1学年学年集計結果



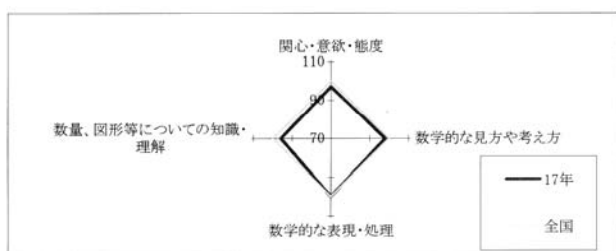
国語

領域の得点率	17年			
	15年	16年	17年	全国
関心・意欲・態度			99	100
話す・聞く能力			105	100
書く能力			101	100
読む能力			97	100
言語についての知識・理解・技能			107	100



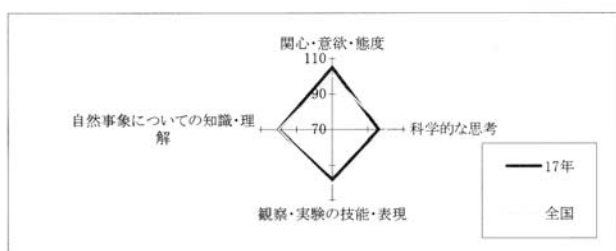
社会

領域の得点率	17年			
	15年	16年	17年	全国
関心・意欲・態度			101	100
社会的な思考・判断			99	100
資料活用・表現			100	100
社会的な知識・理解			98	100



数学

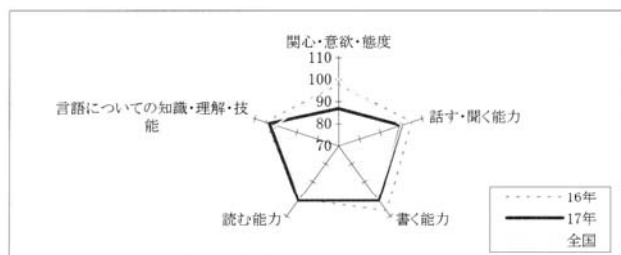
領域の得点率	17年			
	15年	16年	17年	全国
関心・意欲・態度			97	100
数学的な見方や考え方			98	100
数学的な表現・処理			100	100
数量・図形等についての知識・理解			96	100



理科

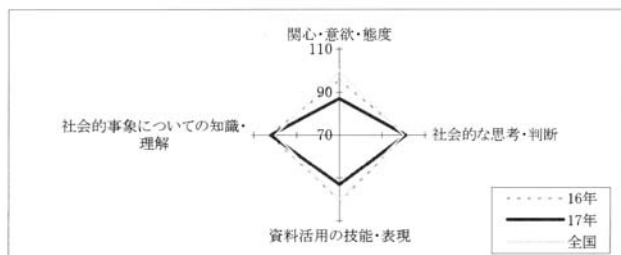
領域の得点率	17年			
	15年	16年	17年	全国
関心・意欲・態度			105	100
科学的な思考			96	100
観察・実験の技能・表現			98	100
自然事象についての知識・理解			100	100

観点別到達度学力検査(CRT)第2学年学年集計結果



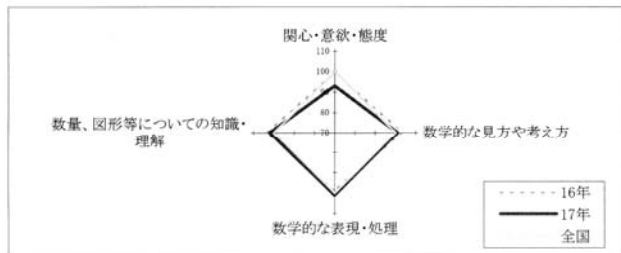
国語

領域の得点率	1年		全国
	16年	17年	
関心・意欲・態度	98	87	100
話す・聞く能力	105	100	100
書く能力	107	101	100
読む能力	100	101	100
言語についての知識・理解・技能	105	103	100



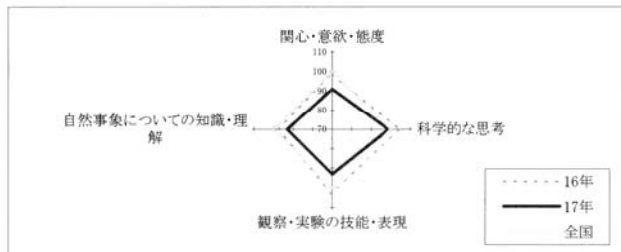
社会

領域の得点率	1年		全国
	16年	17年	
関心・意欲・態度	96	87	100
社会的な思考・判断	101	101	100
資料活用の技能・表現	101	93	100
社会的事象についての知識・理解	102	102	100



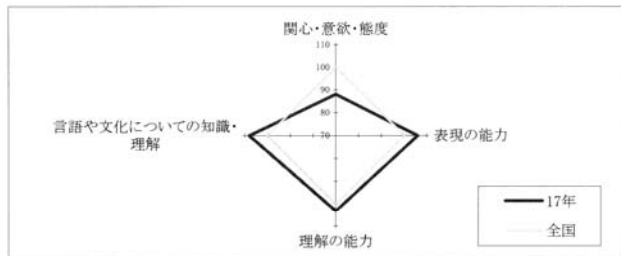
数学

領域の得点率	1年		全国
	16年	17年	
関心・意欲・態度	100	93	100
数学的な見方や考え方	103	101	100
数学的な表現・処理	99	101	100
数量、図形等についての知識・理解	103	102	100



理科

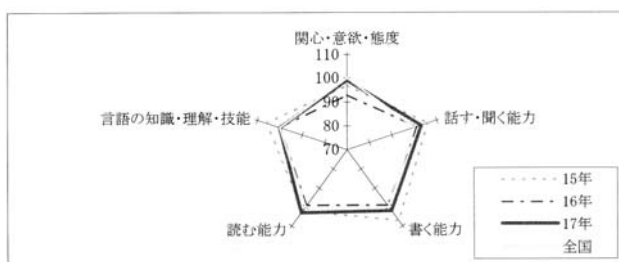
領域の得点率	1年		全国
	16年	17年	
関心・意欲・態度	99	91	100
科学的な思考	104	99	100
観察・実験の技能・表現	103	93	100
自然事象についての知識・理解	98	93	100



英語

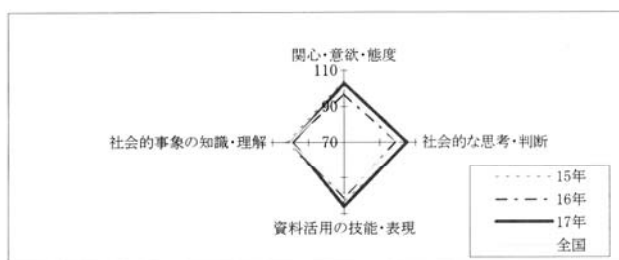
領域の得点率	1年		全国
	16年	17年	
関心・意欲・態度		88	100
表現の能力		106	100
理解の能力		103	100
言語や文化についての知識・理解		108	100

観点別到達度学力検査(CRT)第3学年学年集計結果



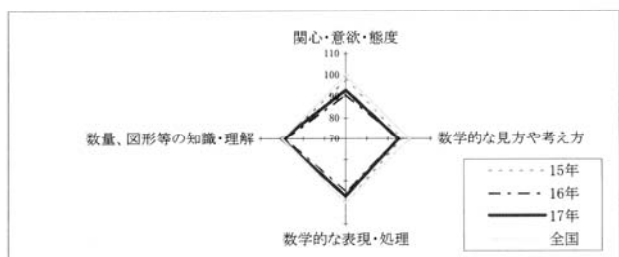
国語

	1年	2年	3年	
領域の得点率	15年	16年	17年	全国
関心・意欲・態度	97	93	99	100
話す・聞く能力	106	101	103	100
書く能力	107	99	102	100
読む能力	102	99	103	100
言語の知識・理解・技能	106	100	100	100



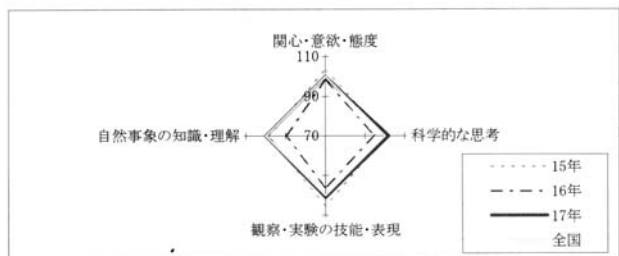
社会

	1年	2年	3年	
領域の得点率	15年	16年	17年	全国
関心・意欲・態度	104	97	103	100
社会的な思考・判断	105	99	105	100
資料活用の技能・表現	104	101	106	100
社会的事象の知識・理解	102	100	99	100



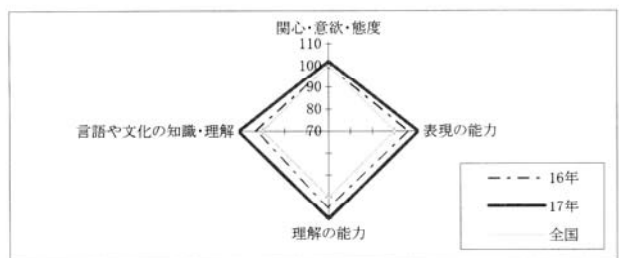
数学

	1年	2年	3年	
領域の得点率	15年	16年	17年	全国
関心・意欲・態度	98	91	93	100
数学的な見方や考え方	97	95	95	100
数学的な表現・処理	100	95	97	100
数量、図形等の知識・理解	99	98	100	100



理科

	1年	2年	3年	
領域の得点率	15年	16年	17年	全国
関心・意欲・態度	103	98	100	100
科学的な思考	101	95	102	100
観察・実験の技能・表現	105	96	101	100
自然事象の知識・理解	99	90	100	100



英語

	1年	2年	3年	
領域の得点率	15年	16年	17年	全国
関心・意欲・態度		100	102	100
表現の能力		106	111	100
理解の能力		105	110	100
言語や文化の知識・理解		103	111	100

(2) 考察

1年生 1年生は、全国値に比べ、国語の「話す・聞く能力」や「言語についての知識・理解・技能」、理科の「関心・意欲・態度」などで高い数値を出しているものの、すべての教科において全国値より低い値を出している領域が2項目以上ある。おおまかな傾向としては、表現に関する領域は比較的よいが、思考や知識・理解に関する領域が弱いように

思われる。各教科とも、細かい分析をした上で、指導に工夫を凝らしていかなければならない。

2年生 2年生は、どの教科どの領域を見てもほとんどが昨年度より低い値を出している。その中でも特に目につくのが「関心・意欲・態度」の数値の低さである。すべての教科において全国値や昨年度の数値よりも低い値を出している。小学校の学習方法から中学校の学習方法への移行がスムーズにっていないように思われる。また、生徒は学習するのが当たり前であるという教員の意識を改め、本校の推し進める協同学習によって教科や授業に対する関心や意欲を高めるとともに、学習しなければならない状況にもっていく工夫をしていかなければならない。

3年生 3年生は、ほとんどの教科、領域において昨年度よりも高い数値を出している。特に英語は全国よりも大幅に高い学力を身につけているといえる。これは班学習やペア学習などの小集団を使ってのコミュニケーション活動や聞き取り活動など、本校が取り組んでいる協同学習や問題解決学習を有効的かつ多くの場面で取り入れた結果だと思われる。また、2年生時の測定で一度数値が下がり、3年生になって数値は回復してきてはいるものの1年生時の数値まで届いていない領域が多く見られる。それをどれだけ上げるかが今年度の課題である。

全体 3年生、2年生ともに、2年生時（1年生の学習終了時）の数値が1年生時の計測より全体的に下降している。その原因として、小学校と中学校との授業スタイルの違いが考えられる。小学校では問題解決学習が当たり前のように行われており、中学校で見られる教師の解説を聞き、ひたすら板書を写すような受け身的な一斉授業形態は、小学校から上がってきたばかりの生徒には興味・関心を引かず、なじまないものである。3年生時に数値が回復したのは、協同学習の成果とともに、中学校の学習方法に慣れてきたためと思われる。また、家庭学習の不足も原因の一つと考えられる。家庭学習のやり方についても指導をしていく必要がある。来年度の計測時に同じような結果にならないよう、協同学習や問題解決学習の場면을多く取り入れていかなければならない。

全体研究会記録

第1回全体研究会記録(2004年7月 研究職員会)

2004年7月1日(木)

- 授業者：堀場善智(2年1組 理科「動物の行動とからだ」 指導案76頁)
- 指導助言：杉江修治先生(中京大学教養部教授)

1. 開会あいさつ(校長)

平成15、16年に学力向上フロンティアにおいて、班の効果的な使い方などを研究した。今年は、学び合い深め合う授業とはどうあるべきか、という問題を考えたいと思う。1月の初め頃、愛知県犬山市の学校を視察して先生方の意見を聞いた。それを一層深めるために杉江先生の講演を聴くことは有効と思う。

2. 研究の経過について(大里)

学力向上と仲間づくりはお互いに関係している。来年に向けて生徒たちが主体的に取り組めることを目標にして、仲間づくりを学活・道徳などだけでなく、教科活動にも取り入れ、学力向上につなぎたいと思っている。この度、犬山市の授業参観を経て、今回杉江先生をお招きして話を聞く機会を作ることができた。今日の堀場先生の授業は実験的要素もあった。自分だったら、授業の中でどう扱うか、意識しながら話し合いに参加してほしい。

3. 授業者の自評(堀場)

小集団を活かした内容で授業をしてほしいということだったので、小集団は実験で使うことが多いが、先生方に見ていただくために実験ではない方がいいと思い、今回のような授業形態で行った。効果的な授業をするために、ホワイトボードを使った。今日授業をした内容は、ふつうはより短時間で扱うところではあるが1時間かけて行ってみた。指導案では5器官について計画したが、他クラスで試した結果、今回は「視覚」に限って授業を行った。班活動を試みたが、6人で行う活動は無理があると考えた(お客さんが増えてしまうため)。班を2つに分けて12グループにしてみた。今回の授業は内容を減らした。12グループで授業をするとき、どうまとめるかが難しいところ。小集団を扱うときの課題は、12グループの意見を出して、それをどうまとめるか。生徒たちがもともと持っている知識から答えを出したため、グループで学習を深めることになったかどうか疑問である。子どもたちの経験などを効果的に扱えたらと思っている。

4. 研究討議

高石(司会)：今日の授業について意見、質問は？

太田：グループ生活班は5人くらい。今年度はその活動について考えたいと思っている。

今日の授業で、よかったと思うことは、指導案にない意見が出たときに発展させていた点（肌で感じる、などの意見が出たときのこと）。班で話し合ったことを最初に紙に書かせていた時点で、子どもたちの中で共通の意見ができていたと思う。ボードでアンダーラインを引いてチェックした後、もう一度それらの意見に戻って考えてみるのもよかったのでは。

土江：結果論ではあるが、同じような意見が12個出てきても新しい意見、発見が出る可能性は小さかった。例えば、班ごとに別々の課題（1班→目、2班→耳、など）を与えて意見を出させてみたらもっといろいろな意見が出たのでは。

藤本：自分の場合、「空気に重さはあるか」という質問をしたときに討論させてみた。重い、軽い、で意見を言い合うことができ、自分と違う意見を聞く機会を作る意味でボードを使う効果がある時もある。

後藤：全体的に班学習が中心になった。生徒が途中で「視野」ということばを使ってしまったため、そこからの授業の流れが決まってしまった。班活動をするのには、答えが限定されていたかもしれない。また違った活動に班活動を取り入れたら面白かったかもしれない。

勝本：今回の「理科」の授業としてみて、よくやられたと思った。いろいろな広い視野で考えさせ、実験などをさせたり、いろいろな広がりがあるテーマで課題を与え、その時迷ったり、間違ったりすることを班で学習を深め合うことができる。「答えが予測できる、またはできない」テーマ、データをとって、出した結果が一つでないとき、いろいろな意見がでる課題のときに班で話し合わせる効果がある。課題解決の場面（理科）で班活動をするのは限られる。課題を出した段階で答えが予測できるテーマで班活動をさせるのは難しい。

田中：生徒たちが楽しそうに授業を受けているのが印象的だった。楽しく、発表も多く、全員が授業に取り組み理解できたのでは。肉食動物、草食動物の違いは、おそらく多くの子どもが気付いていたと思う。自分の授業をしながらも、班を小さくしてもいいのではないかと考えている。6人で話し合っって一つの意見を出そうとすると、意見が却下されることも多い。教科によっては、3人の小グループを使った方がよいのでは。今日の理科の学習は動きがあってよかった（先生が作業をしている間、映像を見せたり、など）。

高石：ほかの教科では？

安田：10年くらい前から、思い出に残るものを作ろうということで3年生にサンドアートを造らせてきた。この学校でも、3年生に、6、7人のグループを作って今年やってみた。その結果、困っていることは、積極的に参加してやる班活動は楽しいが、その活動を邪魔する、参加しない行動があること（その都度、注意はしている）。逆に、個々では活動しない班活動にすると作業に参加する生徒もいたり、プラス・マイナス両面がある。

班でどういう作品を作ろうかとテーマを決めさせたところ、「大山」と「夕陽」とい

うテーマを選んだグループがどのクラスにもあった。美術の作品として、それでは面白くない。似たような作品がたくさんできてしまう。同じ「夕陽」でもいろんな発想で作品を作ればいいが、最初にできた作品と同じものをみんな作ろうとする。そこをどう自分で取り組ませるかが自分の課題。

藤原：家庭科では実習などでグループ活動をさせることが多いが、グループ活動をさせると個々を見失うことが多い。班活動をさせながら、個人の意見がどれだけ活かされたかを見るのが難しい。個々が意見を紙に書いてことばにしなから、人の意見も聞くという方法を取り入れてみたら、けっこううまくいった。見失いがちな個々の伸びを見ることが課題。個々が班の中で動いたと実感できる方法を考えるべきだ。

校長：今日の授業を見て、生徒指導が機能していることを感じた。「話し合い止め！」「班の体制にしなさい！」という指示にきちんと従っている。生徒指導ができて、それができるということが前提である。日頃から生徒との人間関係ができていのかと思ひ、心強く思った。肉食動物と草食動物の違いを1時間かけて授業することもないとは思ったが、今回は小集団授業の例としてこの授業をされたと思う。ごくろうさまでした。

5. 講義要旨：学力向上と仲間づくりをめざした学習指導の意義と方法（講師：杉江）

今回のような授業付きの講義に招いていただいくのはとてもうれしい。今日の授業を拝見して非常にいい授業であった。上手だと思った。生徒に対する態度が徹底している。しかし、よりハイクラスな注文もある。例えば「なぜこれだけの内容に時間がかってしまったのか」「いかに、教師が発言せず、生徒に発言させるか」など（グループで話し合ったことを先生も話している）。

先生が頑張れば頑張るほど、生徒たちは受け身の授業をしてしまう。一斉講義方式では、授業がスムーズにいくほど生徒たちは受け身になる（一斉講義が必要な授業もあることは確かであるが）。

(1) 協同学習について

私は教育心理学者ではあるが、30年間くらい、現場に出かけて授業実践を手伝っている。犬山では少人数授業を中心においた授業改革をしている。犬山では授業の中身を変えるために器を変えている。これまでの行政が主導してきた教育改革のように、中身を変えず器だけを変えるだけでは駄目。市内の各校とも月に1回は地域に授業を公開している。10月に全国に発信する交流会をするのでぜひ見に来てほしい。私は協同学習を研究しているが、私とかかわった人は必ず協同学習をすべきだと考えているわけではない。それぞれの教師が自分の個性を生かして、常に自分の授業を振り返り、次に活かす授業を作るという気持ちを持ち、次の実践に生かせるように取り組めばよい。

欧米では、協同学習は一つの重要なトレンドになっている。実践で効果をあげている。欧米は個人主義、日本は集団主義というが、「協同」とは個人主義、集団主義にかかわら

ず、人間性の根元、人間発達の原理に即している。「相手を高める」「自分を受け入れてくれる人がある」「クラスみんなが支えている」という条件がいかに有意義かという発想に基づいている。この原理を教育に適用することは当然のことだろう。シンガポール、韓国、日本は数学で国際的にはトップクラスの成績をあげている。日、韓は「勉強は好きか」という質問に「はい」と答える生徒がほぼ最下位だが、シンガポールは高い。協同学習に国をあげて取り組んでいる。

グループ学習が協同学習ではない。個別指導であれ、一斉指導であれ、協同学習は可能。「グループにしたから協同学習」であるというのは間違い。ひらたくいえば、「学び合い、高め合いを学習の目的にすること」「その学習に関わる全員が高まることを目指して学ぶこと」が協同学習である。学校全体がそういう気持ちで学ぶ雰囲気を一貫させて作ることが協同学習である。「協同」とは、みんなが高まること、励まし合うこと。一人ひとりで勉強に取り組んでいても、切磋琢磨して、高め合う関係があれば、それは協同学習である。

「協力する」というプロセスだけをもって協同というのではない。集団の仲間が互いに伸びるといふゴールを持っていることが大切。自分の知り合いに柔道家がいる。柔道の心は相手を負かすことではなく、互いに高め合うところにある。試合も、相手を高め自分を高めるためにするもの。そういう意味で捉えれば、初めと終わりの「礼」の意味がよくわかる。誰かが勝って負けるだけのことではない。

協同と競争と、どちらが効果的かという実験が数多く行われてきているが、協同の方に効果があることがわかっている。競争がいいと思っているのは、勝ち組の人。勝てる見込みのない子どもは、自我を傷つけないために初めから競争しない。「競争がいい」というのは迷信である。協同の意義についての実証的な研究をさらに詳しく勉強されたい方は『競争社会をこえて』（法政大学出版局）を読んでいただきたい。

協同には意欲づける、動機づける効果がある。また、協同学習の中では「個人の責任」という、民主社会の形成者として大切な資質の同時学習が可能になる。その責任には「仲間を高め、助ける責任」「仲間の助けに応える責任」の2つがある。本当は子どもたちみんながよくなりたいと思っているのに、お互いが牽制している場面にしばしば出合う。

協同学習のスタイルとしては、小集団形態での学習が多い。犬山では、基礎学力の定着を図って授業の初めに個別のドリルをすることがしばしばあるが、一番はじめにできた生徒ができていない子を思いやり、助けるのが協同学習。個別でやっても、早く終わった生徒が遅い生徒に対して「まだできないのか」と思うのではなく、心配し、励ましの気持ちをもって待つようになるような文化ができることが大切。

ある生徒が発表した後、「この意見についてどう思いますか」という形で、仲間にかける質問が自然に出るような、先生に対して発言しているのではなく、クラスの仲間に対して発表している姿勢の現れは、一斉学習の中での協同学習スタイルといえよう。

(2) 協同学習の進め方

3つのキーワード：参加・協同・成就 「子どもをいかに授業に参加させるか」「1回の授業で自分がどれだけ伸びたか」を実感できる授業。子どもたちを意欲づけること、勉強してよかったと思えることが次の授業を受ける励み、意欲になる。

最近流行っている構成的エンカウンターは、子どもたちのソーシャルスキルをつけるために、授業とは離れたところで行う人間関係を育む活動である。単なる仲良しを目指すようなこういった活動は本来学校ですることではない。学校で目指しているのは、ある課題と一緒に取り組む「課題解決志向的なソーシャルスキル」でなくてはいけない。仲間づくりとは、授業の過程を中心として作っていくものである。ふだんの学習の中で、自然にソーシャルスキルを高めていくものであり、そのために仕掛けを教師が作っていかなくてはならない。

では、どうすれば豊かで積極的な学習活動を行えるクラスづくりができるのか。まず、課題（今日は「これに取り組む」ということ）をはっきり示すこと。しかし、課題をはっきりさせたつもりでも、子どもに分かっているか。課題の中身をはっきりさせた上で、その値打ち（今日のところが分かっていないと次が分からないとか、高校入試で必ず出る、とか）を伝えることも大切。

さらに、学習の手続きについてもきちんと知らせておく必要がある。例えば、今日の授業では、ホワイトボードを渡してから話し合いをさせたので、子どもたちは「話し合いの後、発表しなければいけない」というその授業段階の課題がよく分かっていた。

課題の表現の仕方はいろいろある。例えば、「……について考えよう」では不十分、「……について考えて発表できるようにしよう」とすべき。「……について理解しよう」ではなく、「……について理解して、となりの人に説明できるようにしよう」など。生徒たちは、教師が思っているほど教師の指示を理解していないことが多い。教師の思いは的確な表現で伝えなくてはいけない。子どもにはっきり具体的にわかるように伝えることが大切。よく、「子どもたちが話し合いをしない」と言われるが、それは課題が明確でないため。「本時の目標」は「個人」としての目標、「グループ」としての目標、の両方あるべき。小集団での活動がうまくいかない原因は教師が「グループ活動」の目標をきちんと示さないから。

小集団を使うときのストラテジー（方略）は、はじめにしっかり個人としての意見を持たせた後でグループ活動をさせること。そうでないと、人の意見にただ乗りしてしまう生徒がでてくる。

グループ編成として多く用いられているのは4人くらい。2人ではグループとしての要素が欠けている（意見が対立したときに調整する人がいない）。3人以上いれば、意見が分かっても、もう一人の意見がある。班としては、生活集団をそのまま取り入れているところが多いが、7人では多すぎて、話し合いの過程でしばしばグループが2つに分かれてしまう。課題がしっかりしていて、司会、記録係などの役割をきちんと与えていれば急造グループ

でも活動はできる。グループになるときは、机をしっかりつける指導も大切。机をつけないということは、話し合いに参加しないという意思表示である。

自己評価能力は重要な能力。自分自身での成長の度合いをきちんと確認させる。子どもが本当に意欲を湧かせるのは「達成できたとき、やりとげたとき」。導入の引きつけ、学習過程の楽しさも大切だが、「やった！」という実感を持たせるためのまとめのステップの工夫はとても大切。総合学習だけではなく、教科でもポートフォリオ（学びのプロセスを記録したファイル）が最近取り入れられている。また、主体的な学習の構えを作るために単元全体の学習の全体像をつかませることも必要である。、犬山中学校の数学の授業では、単元の初めに単元テストを見せる。「これができるようになることがこの単元の課題である」ことを示す。

犬山では学校をあげてのティームティーチングが可能な教師集団づくりが行われている。「教師が子どもにできる最大の貢献は教師同士の協同である」といった学者がいるほど、このことは重要である。教科でティームを限定するのではなく、学校全体の教師がティームであること。

単元の始まりに、全体の課題、これから学ぶことの全体像を示す。これは「分かっている生徒」にとっては冗長かもしれないが、勉強のできない生徒にとっては大きな助けになる。目標が分かっていると家庭学習も増える。

総合学習などもまさに単元見直しを行わないとできない活動。

(3) 個性と学力

「個性」ということばはあまりに美化されていると思える。学校で使われている「個性」とはどういう意味なのか。私は、基本的に人間は誰でも同じだと考えている。「個性」は大事だが、「個性」の基礎に「人間性」という共通的なものが幅広くある。今は、「個性」を重く見て「人間性」が軽く見られている。個性の部分だけを強調して行う教育はゆがんだ教育だと考えている。今の学力論争には大きなものが欠けている。「個人」としての学力にしか着目していない。社会を受け継ぎ発展させる主体として捉えることがあまりに少ない。子どもが「何のために勉強するの？」という質問をしたとき、「あなたが幸せになるため」そして「あなたの周りの人を幸せにするため」と、大人が答えられるようではなくてはならない。

6. 閉会あいさつ（校長）

先生の講義を聴いていて、とても分かりやすいお話だったということが印象的。同じ気持ちで聴いた先生も多いのではないだろうか。遠路はるばるお越しいただき、ありがとうございました。

第2回 全体授業研究会 記録(2005年11月 研究職員会)

2005年11月30日(月)

- 授業者：高石博史(2年1組 社会科「自然環境の特色をとらえよう」 指導61頁)
- 指導助言：杉江修治先生(中京大学教養部教授)
高旗浩志先生(島根大学教育学部助教授)
松尾直樹先生(西部教育事務所学校教育係指導主事)

1. 開会あいさつ(校長)

「協同学習をどう実践すればよいのか」という課題に対して、今日の高石先生の授業は大変参考になった。1時間半、有意義な話し合いにしてほしい。

2. 授業者の自評(高石)

社会科で小集団を活かした授業をしてほしいということだったが、「地理」の時間ではよく小集団を使った授業を活用している。最後のところは時間ぎれでまとめができなかった。雨温図を作成する目的はほぼ達成したが、他のグループとの比べ合いの時間が足りなかった。生徒の方の動きとして2年1組はものおじせず、男女でも意見交換を活発にするクラス。こちらが予想しているような活動をしてくれるクラスであり、小集団での活動ができるグループである。今日は話し合いはうまくできていたが、話し合ったことをうまく全体に引き出すことができなかったのが残念。すぐ明日に続きの授業ができるわけではないが、ワークシートが残っているので、次の授業につなげたい。

3. 研究討議

後藤(司会)：質問は？

堀場：自分のクラスなので、子どもたちがどういようすか興味があった。ふだん「どうかな？」と気にかけている子たちがうまく活動しているのがよかった。女子の方が活発で、頑張って動いていたが、男子は少し弱かったかなという気がする。雨温図のグループ分けについて、数字だけの特色を見ただけでグループ分けをするのは難しくないのか？ということと、グループ分けのあと地域を推測してみる活動は今までに何か「積み上げ」があったのかどうか、お聞きしたい。

高石：グラフがあったら絶対よいと思う。TPCを使っての方がいい。その点は授業を計画する段階で考えたが、そういう活動をしたことがなかったので、計画しなかった。予備知識については、季節風、降水量と気温の変化について以外は予備知識はない。そういう点で、子どもたちがどこまで推測できるのが自分でも楽しみにして授業をした。

太田：すごく自分にとってヒントがある授業だった。子どもたちがいろいろなことを考えながら、積み上げながら授業に参加しているのが印象的だった。今日の授業は1時間では少しメニューが多すぎたかなという気がする。ワークシートを使って授業をされたが、それを掘り下げた方がよかったのではないかと、という気がする。後半、マグネットを地図に貼って確認していった点は、子どもたちも視覚的に理解できてよかった。が、本当はグラフに示して確認させて、特徴を読み取らせた方がよりよく理解できたのではないかと。2時間に分けて、気候の特色などを話し合わせたりした方がよかったのではないかと思う。日本海側と太平洋側は季節風によって雨温図が変化するが、そういう点でもグラフに示した方がよかったと思う。

後藤：社会科は、特に地理が最近大きく変わった。そういう意味で、いろいろと考えさせる授業が必要になってくる。

土江：昔の社会を習った者の意見として（笑）、自分のときは雨温図を丸暗記していた。「これはどこか？」と言われたらすぐ「どこ」と答えられるようにするような授業はもうやってはいけないのか？ 雨温図を書く作業を省いて授業を行えば、最初の活動は省略され、能率がいいと思うが……………。

高石：今は、雨温図を「読み取り、書ける」ということが必要になっている。「読み取る」だけなら、はじめからでき上がったものを見てどこか判断できればよかった。今は、自分で作ることができる、ということが一つのポイントなので、苦労して書かせる活動をしている。実際、自分にとってもこういう活動をさせたのは初めてで、今までやったことはなかった。

後藤：自分も今までやったことはなかったが、今日の授業を見て「これはできそう」と思った。グループの中で、すぐ雨温図の点検ができ、それをもとに他のグループとの推測活動に移せる作業としてとてもいいと思った。

松本：今日の授業をみて、この内容を土台にしてもっといい内容にしていける授業内容だと思った。いろいろな方法がこれから派生して可能だと思った。自分だったら、まず昔どおりに「まず説明をして……………」という通り一遍の授業になったと思う。今日の授業は、考える時間もあり、作業する時間もあり、次につながるような授業でよいと思った。

後藤：雨温図のグループ分けを推測するとき、教員が最初から雨温図を用意しておくこともできたと思うが、3つの項目にしぼった理由などあるか。

高石：教員が用意することもできが、そうすれば子どもたちがそれに依存することにもなると思った。子どもたちが出した結果がいいものだったので、結果的にはよかった。

藤本：今日の授業で、仙台、鳥取、東京などが同じ気候だと判断したグループがあったが、あれは間違いなのですか？

高石：あれは間違いで、そこが間違いやすいところであった。

松尾：今日の評価基準は？

高石：第2次のウとエとワークシート。

松尾：「推論の根拠となるものを説明する」というところがあいまいだった。二つの雨温図を比べてみて一緒だと思ったとき、「こういう理由で一緒だった」ということを多角的に説明できる、という点が抜けていたのではないかと思う。そこで意見を言わせておけば、例えば、高松と長野は降水量が似ていて同じグループだと思ったが、そこで気温はちがうから違う地域だ、とか、いろんな視点で意見を言わせるチャンスがたくさんあったが、そういう場面がなかった。例えば「山の気温は変わりやすいから……」とかそういう意見も出ていた。そういういろんな視点からの意見を言わせる機会がもてなかったのではないか。

高石：自分でも、机間巡視でグループごとにアドバイスはしたが、評価として、そういう点を見ていくことが足りなかったような気がする。

大里：自分も小集団を使う授業をしているので、今日の授業で3人くらいずつで話し合いを進めているのは参考になった。最後にどういうまとめをするのかは自分でも難しいと思っているところ。発表させる方法はとてもいいが、時間が限られている中、いかに手際よく無駄を省きながら、大事なところを押さえていくかというのは悩むところ。今日の授業を見ながらも、最後をどういうふうにとまとめるかを考えながらみていた。みなさんの意見をお聞きしたい。

藤本：大里先生の話と重なるが、時間数の点で考えると、理科の場合、実験をさせてデータをとらせて、それをみんなの前で発表させるやり方がいいのかもしれないけど、すごく時間が足りないし効率が悪い。だから、自分が結果を説明してしまった方が早い。今日の授業を見て思ったのは、社会ではそうやらない、自分で考えさせるのが子どもたちの力になるのかなと思った。そうはいつでも時間はないが……。

後藤：マグネットを貼った点はよかったが、どこの班がどのマジックかが分かりにくかった。マグネットに「1班男子」「2班女子」などが見て分かるように準備ができていればよかったと思う。

高石：その点は、自分も授業をしながら「しまった」と思った。今日、よかったことは、自分が班を指名しただけで、すぐに自主的に発言したことがスムーズに授業が進んだ理由だと思う。あそこで、誰が発言するかもめていたら授業がもたついたと思う。その点、ふだんからのクラスの雰囲気、そういうふうに行っている、そこに助けられたと思う。

松尾：今日は久しぶりに箕蚊屋中学校にきて、子どもたちが成長しているという印象を受けた。今日の授業では、例えば、子どもたちが黒板にでてきて、地図に印をつける作業も生徒にさせてもよかったのではないかと思う。授業の中で、生徒が動ける場面ができてよかったと思う。

高石：授業をしながら、そういう点にも気づいた。

大学生：質問ですが、今日グループ学習を取り入れて授業をされて、今日の2つのグループ活動について、グループ学習をする狙いとは？

大里：以前だったら、教員が「こうだよ」と説明をして、書き方を教える一斉パターンが

主流だった。しかし、それでは今の指導要領にあるような課題解決力をつけることができなくなってきた。それが今日のような授業では、本当に自分の出した答えが正しいのかどうか、友だちと相談して、クラスの仲間と関わりを持ちながら学び合う姿勢を育てるのに役立っている。これからは、仲間づくりも視野に入れている。教員がすぐに答えを与えてしまうのではなく、子どもたちに考えさせる授業を模索しながら考えている。

伊藤：指導案の書き方について、3と4で、例えば4のところに評価基準のアはない。それでもいいのか？

大里：（違う資料を配っていた）実際の指導案にはアが含まれている。

伊藤：評価基準について、全部を含まなくてはいけないのか。

松尾：時間数のことを考えると難しいとは思いますが、全部含まなくてはいけない。例えば社会科では、放っておけば知識量だけに大きく傾いてしまう。何もしなければ、バランスが悪くなる。ただ、どの時間にもそれをするのは難しいので、「この時間はこれ」と焦点化していくことはできると思う。

高旗：今日はほかのクラスも見せていただいたが、ほかのクラスでも頻繁に班隊形にしたり、最後のまとめのところでは一斉にされていた。その理由は？

高石：自分の授業に関していえば、最初のあいさつは前を向いてさせたい。今日の授業は、最初の活動は一人ひとりに、集中してさせたかったので、一斉の形にした。そして、最後はあいさつがあるので、一斉の形に戻した。自分の授業に関していえば、最初と最後は必ず一斉の形にするようにしている。

堀場：班の活動をするときには班のかたちにする。集中度が全く違うので、班活動のとき以外は一斉の形にしている。

高旗：そんなに集中度が違いますか。

堀場：違います。

土江：箕蚊屋中学校はかなり前から小集団活動に取り組んでいて、1日中班隊形で生活していた学年もあったが、最終的に今のスタイルに落ち着いた。学年によっては、班の形でずっと続けていくと落ち着かなくなる。

高旗：授業の中の時間を効率的にするために、グループの形のままで続けていくのもいいのではないかと思って、そういう質問をしてみた。雨温図を書く練習は今までしたことがあるのか？

高石：鳥取県のものを作ったことはある。

高旗：2つの要素が入ったグラフを作る、その作り方はとても高度な技術だと思うが、どういう教え方をされるのか？白い紙に書くこともできるだろうか。

伊藤：折れ線グラフと棒グラフが混ざっていても、どちらかを隠せば、1つのグラフになるので、それほど難しくはないと思うが。

太田：折れ線グラフを書くときは気温のことを考える、棒グラフを書くときは降水量のことだけを考える。目盛りを大切にしているので、全く白紙の状態で書かせるのは難しい

と思う。

平尾：時間数の短い中で、小集団で内容の多い授業をされてすごいなと思った。今日の授業では、自分のグループで作業したこと以外は理解できていないから、次の時間で理解させなければいけない。そこで、どのようにまとめられるのか参考としてお聞きしたい。

高石：今日の授業で気候の特色と降水量の特色が出たので、それをまとめたいと思う。

後藤：講師の方に講評をいただきたい。

4. 講評（杉江先生）

授業に即して感じたことを7~8つ、お話ししたい。

最初に、子どもたちの積極的な活動を見ることができてよかった。

① まず、「単元の中での流れ、本時の流れをどれくらい子どもたちが理解していたらうか、子どもたちの見通しはどれくらいあったらうか?」「今やっている勉強の中で、今日の授業がどのような位置づけか、どんな意味があるのか子どもたちが理解していたか?」。学習ステップは多様である。私の好みで言えば、今やっている活動の理由が生徒にわかっていればよかった。

② 12種類のデータについて、男女別になっていた。2年1組は4時間目の英語の授業に女子が積極的に男子に話し掛けているのが印象的な授業だった。その点でいえば、あえて男女を分けなくてもよかったのではないかと思う。英語の授業では班隊形にするときに机がぴったり合っていなかったが、社会ではきちんと合っていた。それは大事な点。

③ 授業が一斉の形で始まった。一番初めに主体的な学習の構えができることは大切。最初の段階で、「なぜ個別でやっているのか」が分かっているともっとよかった。その時点で、「このあとにグループで話し合っ、どこの地域のグラフなのか推測する活動をする」ということもわかっていたらよかった。

④ グループ学習をしているとき、前もって行っておくべき個人での活動が足りなかったと思う。ただ乗りをする子がいた。分からない子どもが、分かっている子どもの答えを写す、ということになってもいいと思う。それでもいいが、考えてから写すのと、ただ写すのでは意味が違ってくる。少なくとも、「分からない」というところまでいたるステップが必要だと思う。

⑤ 途中でグループ分けをしたのは面白かった。私も大学でよくやる。ジグソーという方法がある。そこで養われるのは「個人の責任、グループに貢献するためには自分が頑張らなくてはいけない。責任を果たさなければいけない」という姿勢。それは社会に出ても大切なこと。今日の授業でいえば、各班に6つのデータを与えて活動をさせることもできたかもしれない。

⑥ 雨温図に適する地域を推測するとき、もっと「当てやすい」方法がよかったかもしれないと思う（成功体験がより多くできるから）。

⑦ 個人の取り組みとグループの取り組みをもっとはっきり指示した方がよかった。最後

のところで「グループで相談しなさい」という指示を出した後、「1班どうだった？」という質問に、実際に答えていたのは、その子個人の意見だったと思う。「グループで話し合っ、グループとしての意見を出すのか」「個人で意見をまとめるためにグループで話し合うのか」はっきりとした指示をした方がいいと思う。

- ⑧ 授業の最後に、次の授業の予告や、その授業の「振り返り」の時間が持てるのもっとよかった。自分の達成感を評価したり、自分が達成できたことだけではなくて、仲間からどれだけのことがらを得たか、というような、友だちとの学び合いのよさを振り返ったりするような場面があるといい。
- ⑨ 最後のまとめかたについては、そこまでの授業プロセスが大切だと思う。例えば、残り時間が5分しかない、という場面では教師が正解を言ってしまってもいいと思う。ただ、その時間中、生徒たちが受身で活動をしてきて教師がまとめをしてしまうのと、少なくとも生徒たちが議論を重ねたあとで教師がまとめをするのとでは、受け止め方が全く違うはず。教師が主体の授業をして、まとめも教師がした場合には、理解度が低くなり、生徒主体の授業をしていけば、まとめだけを教師がしたとしても、生徒の食いつきがよく、理解もよい。子どもたちが、いかに見通しをもって授業を進めていけるかということが大切である。今日の授業は生徒が主体的でよかった。
- ⑩ 今日、4時間目のようすを見て思ったことは、教師との信頼関係ができてきているということ。生徒相互の横のつながりをもっとできるとよいと思う。「先生、先生」と教師の了承を求める姿が多かった。教師に了承を求めるのではなく生徒同士で教え合う関係ができるといいと思う。ファイルを使っている先生が多かったが、それをどのように活用するかも工夫してほしい。犬山の「教科のポートフォリオ」についても参考にして欲しい。以上が感想である。

協同学習に取り組むことについて、協同学習はグループ学習ではないということはすでに述べたとおり。協同というのは、学び合い、高め合う、ということ。助け合いではない。大事なことは課題（Task）解決志向を目指す。人間関係をよくすること、仲よしであることが目標であるように考えられることが多いが、仲よしになることが目的ではない。本当に社会に出て必要なことは、共に仕事ができる関係。同じゴールに向かって、信頼関係を築けることは協同学習のメリットの一つである。

もう一つは、豊かな同時学習が生じること。知識だけではなく、共に社会を生きていく仲間としての同時学習ができる。それは、同和学習にも通じるもの。それも同時に育成できる。学習態度の形成を通して、子どもたちの勉強に対する関与が違ってくる。受身の学習ではいつまでたっても、「学びは他人事」のまま。私の大学の学生の中には「授業は先生が教えてくれるもの」と思っている者がたくさんいる。「学びは我が事」という姿勢を学ぶことが大切。中にはドリルをさせた方がいいような教材もある。それに乗ってくるのが競争好きな子どもだけではいけない。進んでいる子が遅れている子を助けるようなド

リルであればよい。いつでも先生に「これでいいですか」とお伺いを立てるような子どもたちがいるようではいけない。

何よりも、子どもたちに「何が解決すべき課題」か、わかるような指示を出さなくてはならない。「相談しなさい」ではなく、「説明できるように話し合いなさい」のような指示でなくてはならない。話し合いに参加しないような子がいる場合、その子が参加できるような方法を工夫、仕込みをしておく必要がある。学習の場だけではなく、全生活場面において、グループ討議ができる学級集団づくりをしていく必要もある。

先生方自身の指導観、子ども観をお互いに話し合っしてほしいと思う。生徒に対しては、高い要求水準をもってほしいと思う。いい実践を見たら、それを基準にしてほしいと思う。

協同学習をすれば、個を意識した指導と矛盾があると思われるかもしれない。時間が余った子どもに対しては補助的な教材を準備することが必要になってくる。文部科学省が言っている「個性」は「個人差」と思えてしかたない。私は、個性とは「個人差+それぞれの子どもたちが共通にもっている人間性」だと思っている。

5. 閉会あいさつ（校長）

感心したのは、「全員が授業に参加している」という意見が聞かれたこと。今年15学級の中で、教科によっては生徒の取り組みに差があるのではないかと思う。生徒にしなければならないことを「させる」「させきる」という押しの強さが必要なのではないかと思う。これは難しい、というのも実態としてあると思うが、1、2年生のころからもっと押しを強くしてもいいのではないかと思う。

先生の話をお聞きして、進むべきルールをはっきり敷いていただいたという気がする。ご指導ありがとうございました。

第3回全体授業研究会記録(2004年2月 研究職員会)

2005年2月15日(火)

- 授業者：岡 美由紀(1年3組 数学科「平面図形」 指導案68頁)
- 指導助言：宮邊 満先生(西部教育事務所学校教育係長)

1. 開会あいさつ(校長)

岡先生、今日のごくろうさまでした。

本校で取り組んできた学力向上フロンティアでは、今年度は7つの教科で研究授業をしてきた。全体の研究職員会としては今回が最後になると思う。お互いに、朝の会などを含めて、授業を自由に見させていただき、見ていただくという雰囲気を作りたい。先生方の中には「協同学習」には抵抗があるという人もいると思う。私の考えとしては、生徒が「自分が受け入れられている」「認められている」と感じられる学習が協同学習だと思う。「小集団を使っていないから」「一斉授業ばかりだから」協同学習ではないという議論ではないと思う。「協同学習」を否定すると、本校の教育目標である「仲間づくり」なども否定することになる。「協同学習」についてよく分からないという場合は、もう一度資料などを見返したりしていただきたいと思う。今日の授業の感想としては、学習の困難ないろんな子を含めて、ほかの人が発表するのを聞くことができたり、学習の雰囲気がいいのを見てうれしく思った。

2. グループ討議(司会：勝本)

勝本：では、声をかけ合って4~5人のグループになってください。指導案に書かれた点を考えながら、それぞれ授業参観でメモしたことをもとに話し合いをしてください。その後、代表者を決めてもらい評価をまとめて討論してください。

大里：大きい紙を各グループに配っていますので、同じような意見をまとめて紙に書いてください。

<話し合い約20分間>

3. 授業者の自評(岡)

今回の単元に入るにあたっては、杉江先生からの指導を参考にした。生徒たちには、今日の授業までに、単元で何を学習するかという点を確認させ、目標をはっきりさせていた。生徒たち自身が頑張ろうという気になるので、そういう話が事前にできてよかったと思う。今日の授業でもそうだったが、「今日は何を狙いにするのか」という、毎時間の目標を「線対称な図形をいろいろ書いてみよう」などと黄色い字で黒板の右に書くようにしている。

これを書くことによって、自分で目標を意識しながら学習できるくせができてきたと思う。

今まで平面図形の学習では何度か班活動を取り入れているが、時間的にうまくいかない。なかなか班活動を効果的に使うことができなくて、それが私の今後の課題である。今日は、ふだん慣れ親しんでいるアルファベットを使って、あえて最初から「線対称」ということばを出さずに導入してみた。アルファベットを用いて、身近なものから具体的に図形を意識できるように試み、実際にいろいろ描いてみるという「関心・意欲・態度」を見る授業となった。班になり、ほかの生徒の図形を見ることで、曲線を使ったりイラスト的なものを描いたりするようないろんな対称性の幅のある図形を描くアイデアが得られたと思う。今回は、特に図形の定義にはこだわらなかった。もっと班隊形を生かした授業をすることが今後の課題である。

4. 全体討議（各グループの代表者が発表。）

第1グループ（田中）：さきほどの岡先生の話聞いて、「ああ、今日は何を描いてもよかったんだな」と思った。話し合いで出た意見は、「導入にアルファベットを用いた点が身近な話題でよかった」「班隊形になって人の意見を聞いて考えが深まった点などがよかった」などがあった。マイナス面としては、「線対称をより分かりやすく見せるために、透明な紙を使った方がよかったのではないか」「班になる前に個人作業をさせた方がよかったのではないか」「生徒たち自身が、教室内を歩いて他の班のアイデアを見てもよかったのではないか」「図形の定義があいまいだったのではないか、例えば、漢字は図形になりうるのかどうか」などの意見が出た。あとは、「今日の授業の『評価』はどこで見るのか」という意見もあった。

第2グループ（井上）：班の学習規律がよく、人の話をよく聞けていてよかった。挙手、発言も多くよかった。ただ、班隊形になっていても、自分の学習にのみ集中していた印象がある。班で活動したあと、岡先生が「代表作」を選ばれたが、班に話し合わせて生徒たちに代表作を出させてもよかったのではないかと、という意見があった。協同学習への工夫として、対称の図形を確認するとき、小集団を使ってみたらよかったのではないかと。

第3グループ（堀場）：学習規律、教材、小集団、指導案、の項目に分けてまとめてみた。静かに話を聞けていた。雰囲気もよかった。教材としては、楽しい題材で、生徒の意欲、関心をひいていたと思う。弱い子でも頑張ることのできる教材だった。小集団としては、班になって何をするのかという意図がはっきりしなかった。一応班隊形になってはいたが、やっていることは個人の活動だった。ほかの子の図形を見るという点ではよかったが、班になったときの課題が明確ではなかった。1枚目のプリントに「線対称」と書かれていて、生徒たちは何をするのかわかっていて逆にやりにくかったのではないかと、「気づき」の場面がなかったのではないかと考えた。班になったときに「静かにしてよ！」という発言があったのはよかった。指導案に関して、4番の評価でAとBとあるが、その違いがよく分からなかったため、具体的なことを教えていただきたい。

第4グループ（加藤）：プラスの面としては、「導入の場面でアルファベットを使った点
が楽しくてよかった」「挙手が多く、雰囲気が良い」「導入の作業がすでに学習になっ
ていてよかった」などがあげられた。チェックカードを使っていた点もよかった。マイ
ナス面としては、線対称の図形を書かせたときに、もう少し細かい指示あるとよかった。
班学習の意図がはっきりせず、個人の作業に終始していた印象がある。「作図を正確に
させる」のか「線対称を意識させる」のが目的なのか明確にしてあるとよかった。

第5グループ（松原）：みんなが一生懸命、熱心に取り組んでいて、学習意欲があるのが
よかった。導入の一つの方法として、例えば26枚のアルファベットを6人に配って、班
の中でおりがみのように折って、仲間分けをしながら発見をさせるなどの作業をすると
気がついてよかったのではないかと。紙の質も工夫するとよかったのではないかと。班
隊形になっても、私語がなく、みんなが作業に取り組んでいてよかった。なぜ班を作る
のかという意図が明確でなかったために、個人作業になってしまった。班活動の必然性
を作るのは難しいが意図的に活動をさせてみてはどうか。

勝本：ありがとうございます。では、堀場先生から質問があった点について、岡先生お
願いします。

岡：Aは、身の周りのものを図形に抽象化したり、逆に図形から身の周りのものに照ら
し合わせていくなどの、考え方を広げていくようなこと。Bは、教科書の基本図形がで
きているのかの評価。

勝本：では、今まで出た意見をまとめると、すべてのグループから出た意見として、集団
の学習規律がしっかりしている、教材のアルファベットがよかったというプラスの面が
あった。マイナスの面としては、評価の部分が明確でなかった、小集団になる前の指示
がもっとはっきりしていたらよかった、などがあった。これが、これからの課題。これ
から、指導助言の先生のお話をいただきたいと思います。よろしくお願ひします。

5. 指導助言（宮邊先生）

私の感想と、県、国の動向を話したいと思う。最初に、今日の研究会の持ち方について、
今までこういう形の研究会はなかったのではないだろうか。今日はKJ法でやってみた。
すなわち、いろいろな多様な意見を聞きながら、フリーカード方式で意見を出し合う方法。
自分はどこを見ていたのか、他の人はどこを見ていたのかを気付くことができたのではな
いかと思う。研究会の持ち方としては有効な方法だと思っている。

年末から年明けにかけて、非常に現場がゆれ動いている。国の動向であるが、一番最近
の文部大臣の発言（1月20日に全国の教育委員会にあてて出された書類の原稿）を資料と
して持ってきた。発言は、大臣の感想を述べたまでのことであった。今後のことについて
は中教審で検討していくということであり、2月中にはおそらく報告があると思う。

その中で中山大臣が「甦（よみがえ）れ、日本」という取り組みをはじめた。12月に国

際的な学力調査の結果が新聞にのった。その一つは「PISA 2003」。資料に出てくる「リテラシー」とは「日常生活に必要な技能」という意味。もう一つは「TIMSS 2003」。その結果、日本は全体として国際的に見て上位であり、学ぶ意欲、家庭学習に問題があるという結果がでた。文科省も「低下傾向」であるといい、二極化しているのが特徴。記述式の問題に答えを書かない生徒が多く、読解力に課題があるといえる。数学にしても理科にしても、「日常生活に関連させた指導」が大切である。

一次関数、二次関数だけをやっていてはできない問題。実生活に関連のある問題なので、面白い問題の例としてのせた。

どういふふうに学力を上げるか。少人数指導、能力別指導をしているのは「手段」であって、結果としては学力向上が求められる。例えば、今日の小集団にしても、それ自体が目的になってしまっはいけない。

今日の授業に関しては、指導案について、「3. 単元の目標と評価基準」の前に「内容のまとめりごとの評価基準」が必要だった。観点別評価をもとにした、目標に準拠した評価をする。いかに目標に到達しているかということを見なくてははいけない。到達しているかどうかを日ごろの授業から見ていく必要がある。気をつけなくてはいけないことは、例えば積極的に手をあげているから、「感心・意欲・態度」の評価がいいということにはならないというようなことである。

「具体的評価基準」について、これは「少なくとも、この段階まではみんなをもっていく」という基準である。「感心・意欲・態度」をみる評価は難しいといわれている。ペーパーテストでその問題を作るのは難しいので、授業の中でノート、作品を見ていること、を常に生徒たちに示していく必要がある。ある程度、子どもたちが納得できる評価づくりが必要になっている（客観性・信頼性）。

箕蚊屋中学校の話として、「生徒は大変なことがあったけど、先生方がとてもよかった」という話を聞いている。今後も頑張っていたきたい。

6. 閉会あいさつ（校長）

今日は、先生方が意見交換をされて、若い先生方、ベテランの先生方が交流して話し合うことができよかったのではないかと思います。杉江先生の話の中で「学び合い、高め合う雰囲気づくり」ということばがあったと思う。班活動をするときに「班になって、こうしなさい」という指示をはっきりさせることが大切だと思う。今日は先生方、ごくろうさまでした。

第4回全体授業研究会記録（2005年6月 研究職員会）

2005年6月23日（木）

- 授業者：田中由美（2年2組 国語科「読書で視野を広げよう」 指導案53頁）
- 指導助言：杉江修治先生（中京大学教養部教授）
松尾直樹先生（西部教育事務所学校教育係指導主事）

1. 開会あいさつ（校長）

今年度、外部の方に来ていただくのは最初、杉江先生に来ていただいてご指導いただくのは3回目になる。松尾先生にもお忙しい中、来ていただいた。次は11月22日で、そのときは松尾先生にもお世話になる。田中先生には職場体験、期末テストなど忙しい時期に快く引き受けていただき感謝している。「協同学習」については、未だに特別なもの、難しいものという考え方をもっておられる先生方が多いのではないかと思う。私の気持ちとしては、「協同学習」という考え方を理解してもらえたら、と思う。本校の学習の根本になる考え方だと思う。短い時間ではあるが、今日そのことについて杉江先生にご指導いただきたいと思う。

2. グループ討議（5人ずつのグループに分かれて意見を出し合う。約30分間。）

3. 授業者の自評（田中）

今日は大切な時間をさいていただき、ありがとうございました。みなさんの研究の材料になるかどうか不安で、内容を何にしようか迷ったが、年間計画通りに授業をした。単元の見えて、目標は、細かく作品を読み取るのではなく、「読書に楽しみ、興味を持つ」ということだった。読み取りが不十分だったため、今日の学習で、ほかの生徒の感想を聞くことによって読み取りが深まるのではないかと思った。ホワイトボードを使って今日子どもたちが発表したことは、どれも私はいい意見だと思った。生徒があげた点については、どれも間違ったところはなかったと思う。緊張していたので、一人ひとりの生徒に関わることができなかったと思う。

4. 全体討議（各グループの代表者が発表。司会：土江）

第1グループ（青田）：課題の指示がはっきりしていて、グループに分かれてからも子どもたちが今何をするのかわかっていてよかった。生徒の態度についても、聞く方も発表する側もよかった。学習規律についてもほとんどの生徒が参加していてよかった。ただ、話し合いをするのに6人のグループが多かったのではないか。4人くらいだとお互い向き

合えると思った。疑問点として、それぞれの生徒が見つけたところを発表していたが、先生からの評価や、他の班からの相互評価はどういう風になっているんだろうかと思った。時間的なこととしては、10分間で読み取りをしてアンダーラインをしていたが、ゆっくり読む子どもにとっては10分では少し少なかったのではないか。はじめから、頁の割り当てをしていた方がよかったのではないかという意見もあった。

第2グループ（多根）：学習規律について、後ろを向いている生徒がいたこと、発表の音が小さかったことが気になった。プラス面としては、板書がきれいで読みやすく、単元の目的が分かりやすくてよかった。マイナス面としては、アンダーラインを引くのに、個人での作業が多すぎたと思う。せっかく全体から探したのに、班ごとに頁で区切るのはいかが。発表した内容について、ほかの班からの意見を聞くことができたよかったです。文章表現のすばらしいところとして、例をあげた方がわかりやすかったと思う。小集団については、一つの班の人数が多かったという意見、人数の割には話し合いがうまく進んでいたという意見があった。その他の意見として、「これからは聞く時間です」などの切り替えの声かけがあるとよかった、という感想もあった。

第3グループ（花田）：学習規律について気がついたことは、緊張のせい子どもたちの音が小さかったが、とても静かで先生の音が通ってよかったということ。「大きい声で言って」などの声があつてよかった。やる事が多くて、時間がきつかったのではないかという意見があった。

第4グループ（西村）：目あてや質問が明確でよかった。田中先生の姿勢、語りかけ方がよかった。時間の設定が明確で、メリハリのある授業だった。最終的に全体を捉えることのできる授業だった。最後の個人評価をみんなが一生懸命書いていたのがよかった。気持ちと表現について、板書の色を変えるなどしたらよかったのではないか。班隊形になるとき、鞆がじゃまになっていたのが気になった。机間巡視のとき、全体の声かけだけでなく、個別の声かけもあるとよかったという意見があった。

第5グループ（足立）：聞く態度はよかったが、発表するときの態度、聞いている人におしりを向けたままの発表はどうか、と思った。ホワイトボードの使い方について、気持ちと表現について書く色を変える、もしくは「気持ち」か「表現」か、どちらかに絞った方がよかったのではないか。話し合いがよくできていたが、後ろを向いている生徒がいるのが気になった。田中先生が、ちょっと質問がでたときに肯定的に声かけをされていたのがエレガントでした。評価用紙に一生懸命取り組んでいたのがよかった。

土江：指示がはっきりしていて、いい授業だったというのは私たちの共通の感想だが、われわれがこれから知りたいと思っている「協同学習」の視点から見て今日の授業はどうだったでしょうか。

松尾：今日の授業は、課題が明確に提示されていたために、子どもたちが見通しを持って、落ち着いて授業ができた。「課題を明確にすること」は、小学校ではよくするが、中学

校ではあまりしない。どうせわかっている、と思っているからである。しかし、子どもたちにとってはきちっと見通しをもって目あてを明確にすることが大きな手助けになる。支援の必要な子どもがつかずくことが少ない。今日の評価規準と目あての関係はどうだったのか。今日の姿が本当に田中先生が期待していた姿になっていたかどうか、を振り返ってみると今日の授業がどうだったか、が分かる。

土江：やり方を変えた方がよかったと思われませんか。

松尾：はい。波線を引いたところについて、田中先生も「どうしてそう思ったのか」という理由のところまで持っていきたかったと思うので、その部分は変えた方がよかったと思う。

大里：今回の単元は読書教材なので、深く読み取るというよりは、多くの視点から見て「自分はここがいい。なぜなら、こうだから。」という意見をもつことができればいいと思う。読むことに親しむという点で、今回の授業の形態はよかったと言えるのではないか。

5. 指導助言（杉江先生）

協同学習とは「クラスの特定の誰かと誰かが協力し合う」ということではない。「学級全体が高め合い、協力し合うという」ことが大切である。そしてその背景にあるのは「自分を高めたい」と思っていること、他の仲間もそう思っているということを全員が理解し合っていることだ。そういう環境があると、生徒に学習意欲が生まれる。自分には仲間を高める責任がある、という気持ちの中で学習するのが協同学習である。この学校の目標である人権教育の目的と重なる。当然のことであるが、成績も上がるし、教科に対する姿勢も変わってくる。私はそういうところに、協同学習の意味があると思う。それを念頭において、授業を組み立てる必要がある。

今日の国語の授業はいい授業だったと思う。その前に、ほかのクラスの授業を見ていたときも思ったことだが、2年1組の教室に入ったとき、はじめは机が乱れていた。授業中の基本的な態度については、机の並び一つとっても、生徒一人を前に出して教室を見せて、「これでみんなが一緒にできると思うか」と聞いたら生徒であっても、それでよいか悪いか分かるはず。形が大切だと言っているのではない。学習集団のまとまりとして、一体化を作ることが大切だと思う。5時間目の国語の授業のときは、最初机が裾広がりになっていたが、先生が知らない間にきちっと整えられていた。あるところで、生徒同士の机の距離が開いているということは、その子どもたちの心理的な距離も開いていると言っている。今日のクラスではそういうことはなかったが、クラスによっては男女が班隊形で離れていることがある。そういうときは「机をつけなさい、君たちは一体なんだから」と指導することが大切。規律として指導するというよりは、共に学習する姿勢と気持ちの持ち方を示さなくてはいけない。子ども自身は、意味が分かっていないのであって、きちんと理由を教えて指導することが大切である。

何をやるべきか、がはっきりしているというのは重要なこと。はじめに流れの説明がき

つちりなされていたことはよかった。しかし、私はまだいろいろな説明の仕方ができると思った。「なぜ、個人で考える必要があるのか。それはグループに貢献するため」「なぜ、グループで考える必要があるのか。それはクラスに貢献するため。全体を高めるため」である。「そのくらいのことは、わかっているでしょう」と思うかもしれないが、ときにはことばで伝えることが大切である。

今日の学習の目あてと評価のところの一貫性はどうかだっただろうか。これがびしっとしている子どもたちにはとても分かりやすい。個人が一生懸命考えること。→グループでの話し合いをすること。→クラスで意見を共有する。それによって、個人として振り返ることができる。個人表の使い方として、はじめに提示していくやり方もあったと思う。最初にゴールを見せておくと、はじめから首尾一貫して子どもたちはやるべきことが分かる。

最初に時間を明確にしたことはよかったと思う。活動の途中で、時間を延ばしてやることがあると思うが、基本の時間は決めておくこと。やむを得ず伸ばしても「5分」などとはっきり言うことが大切。

班での役割分担を明確にされるとよかったと思う。例えば、ホワイトボードを書く人、発表する人、司会、タイムキーパー、など。学びの技法を学ばせるためにもいいと思う。

「アンダーラインを引く」という個人の課題は明確だった。「後で話し合いをする」とは言われたが、「個人で今していることが、後でグループにどういう貢献になるのか」をよりはっきり言うておくことができればもっとよかった。そうしておけば、子どもはより取り組みやすい。見通しを持って学習する目的は、それによって子どもたちが主体的に学ぶことができるからである。今やっていることの目的、意味が分かっていると、1時間のなかですること、より主体的に取り組める。学力の高い子どもは、言われなくてもそれが自然にできる。学力の低い子どもはそういうことが分からないので、学習の見通しを示してやると手助けになる。

グループで取り組んでいる時間のことについて、一つ意地悪な見方をしたら、田中先生は個人思考の時間に1分間に1回くらい子どもに声かけをしておられたが、ほとんど子どもたちは聞いていなかった。一度、生徒に作業を任せたら最後まで任せの方がよい。田中先生は、すごく我慢しておられるのがわかった。大変いいことだと思った。

6人グループというのは話し合いをするのに人数が多いと感じられた人も多かったと思うが、それは机の距離が長かったからかもしれない。机を4つにして6人にしてもいい。身体的な距離が近くなると話し合いも盛り上がる。理科ではよくやることだが、実験のとき子どもたちを集合させると子どもたちは盛り上がる。割合、協同学習をやっているところでは4人グループを使っているところが多い。もう一つ感心したことは、ホワイトボードをよく読める大きな字で書いていたこと。しっかりとよくわかる字で書いていたところがよかった。「なぜホワイトボードに書くのか」というと、クラス全体に貢献するために書いているので、そのことを理解させることが大切。時間的なこともあったと思うが、残念だったのは意見を発表するところまでになってしまい、それを深めることができなかつ

たところ。それは先生も感じておられることと思う。出てきた意見について、「自分とはちがう」と思った生徒もいたと思う。やり方を変えることもできたのではないか。

ホワイトボードに書いて発表するという形を、パターン化して当たり前の形にしない方がいいと思う。発表の仕方にいろいろな工夫があった方がいいと思う。

生徒の参加度が大変高い授業だった。これはとても重要。これは後で「勉強が楽しかった」という子どもたちの感想につながる。生徒の発言と授業の満足度についての研究結果があって、それは正の相関関係になっている。参加度が高いと満足度も高くなる。

ほかの授業も見たが、子どもの学びを促すことを考えた授業が多くてよかった。協同的な活動を子どもたちがしたときには、その授業だけでなく、お互い高め合う活動をしたという「協同学習」自体に対する振り返りをたまにしてみる必要がある。

午前中に見た授業についての感想を話したい。理科の時間には、本時の流れをあらかじめ、子どもに示しておくとうよかったと思う。それぞれのステップに向けて、見通しをもって取り組むことができるから。科学的な思考の訓練と平行して常に授業が進められていると思う。

英語はチームティーチングだった。少し、全体でドリルをやってから、生徒全員が立って「読む」練習をしていた（スクランブル授業）。2、3サイクル目で盛り上がっていた。どの子と練習をしたのかチェックリストがあって、同じ生徒とばかり練習しないようにしていた。

音楽の時間は、チェンバロとピアノの違いについて学習していた。生徒たちは意欲的にやっていた。やはり音だけ聴いて違いを考えるのは難しそうだった。専門ではないので分からないが、音の出方はどうだろうかとか、いろいろな気づきをさせてやるといいのではないかと思った。

美術の時間は、デザインを描いていたが、デザインをしている生徒以外の生徒がすることがなかったように思った。描いているデザインをほかの子が頭を寄せ合って手助けするように持っていくにはどうすればいいのか。いろいろな緊張の持たせ方があるのではないかと思った。

国語の時間は、非常に配慮の行き届いた授業を拝見した。子どもたちの協同的な活動が促される工夫がなされていた（メッセージカード）。課題もはっきりしていて、協同学習がうまくできていたのではないかと思う。グループで話し合う前に班長に指導されていたので、スムーズに流れていた。このやり方は短時間で済むことということもあり、とても効果的。リーダーがわかっていると班での作業が整然と進む。

数学の時間は、非常に熱心で誠実な授業をしておられる印象を持った。机間巡視をしているとき、先生が評価をされていた。子どもたちは自分の取り組みを評価されているという実感があったと思うが、あの場合は先生からの評価であり、外側からの評価である。別の言い方をすると、子どもの内面からの評価もあった方がいい。子どもたちがすでに解いていた問題を黒板に書かせてやっていたが、子どもはもうすでにやっているのだから、それは

しなくてもいいのではないかと思った。

技術の時間は、残念ながら中身までは見るができなかった。

社会の時間は、子どもたちを指名して答えさせていたとき、生徒たちの声が小さかった。グループで考えたことを発表するとき、先生に対して報告していたことが多いと思う。そうではなくて「みんなに向かって言おうよ」という指導が必要なのではないか。今日の授業では、グループで話し合ったことをワークシートに書かずに、最後に先生がまとめたことを書いていた。自分の考えを書く欄と、先生がまとめた答えを書く欄があればよかった。

5. 閉会あいさつ（校長）

杉江先生には3回本校に来ていただいた。「学び合い、高め合う」ということを何度も聞いたが、学校現場ではあらためて議論するまでもなく、当然のことである。生徒同士を関わらせて、どの子も成長させて、高めていくこと。なんら特別なことではない。大里先生に作っていただいた資料に、今まで話していただいたことも書いてあるので、もう一度読んでいただきたい。

今日話されたことで、机の並び方についての話が出た。学び合う学習環境として、机だけでなく、いろいろなことを整備していく必要があると思う。管理ということではなく、そういうふうにしなくてはいけない理由を生徒に理解させることが大切である。

田中先生の授業も、遠藤先生の班長さんに対する指示についても、小さなことではあるが、先生たちの工夫や、生徒に対する指示がはっきりしていることが大切である。「今は聞くときですよ。」と、どの先生も言えること、「今日の課題はこうですよ」とはっきり示しておくことが大切である。

あとがき

平成 15・16 年度に学力向上フロンティア事業、平成 16・17 年度に米子市中学校教育総合研究校に指定され、「豊かな心と学力を育み、共に支え合い高め合う生徒の育成」を研究主題に設定し、全職員が力を合わせて研究と実践を進めてきました。

本校は、従来より同和教育・仲間づくりを中心に据えた教育を行ってきました。学力向上の指定を受け、学力向上と仲間づくりをいかに関わらせながら成果を上げていくか、職員間でもずいぶん議論をいたしました。そのような中で、島根大学助教授の高旗浩志先生、中京大学教授の杉江修治先生に出会い、協同学習こそが本校が目指す教育活動に合致したものであると確信し、研究を進めてきました。

本日、米子市中学校教育総合研究大会と箕蚊屋中学校区人権教育研究発表会を同日開催させていただいたのも、学力向上と人権教育・仲間づくりが相反するものではなく、互いに関連し合って伸ばしていくものであるという理念のもと、実践しているというところを見ていただきたかったからです。しかしながら、理論面の理解や各教科における具体的な学習方法が、まだまだ不十分だと思います。この度の研究発表を新たな出発点として、皆様のご指導ご助言をいただきながら、なお一層の努力を重ねていかなければならないと考えています。

終わりにりましたが、本日の研究発表会を開催するにあたり、これまでご指導ご助言をいただきました中京大学教授の杉江修治先生、島根大学助教授の高旗浩志先生、鳥取県教育委員会、米子市教育委員会の諸先生、並びにお世話になりました関係の皆様方に厚くお礼を申し上げます。

研究同人

平成 17 年度

馬田真寿美	青木 勉	遠藤 良子	長谷川郁代	井上 道彦	安田 道夫
田中 由美	藤原由美子	後藤 譲	土江 良一	高石 博史	青田 恵子
太田 正康	足立 恭子	藤本 敏秀	大里 守	山根 正康	玉野 伸也
白石 隆俊	米原 真吾	堀場 善智	家本 智紀	三宅 久子	多根由紀子
岡 美由紀	上垣 智美	花田 憲二	板 義道	西村 幹也	福庭 直子
庄倉 健士	大西 淑子	山中ひとみ	田縁由香里	大東 裕美	池田 純子
中村 茂子					

平成 16 年度

松本 範史	勝本 秀人	伊藤 一志	松原くみ子	福谷 直樹	加藤 隆文
柴田 昌子	実信 憲明				

監修者あとがき

この実践研究資料は、米子市日吉津村中学校組合立箕蚊屋中学校が「平成16・17年度米子市中学校教育総合研究大会」を2005年11月22日に開催した折に出された研究紀要がその中身となっています。教科教育と人権教育を一貫性、統合性の観点から、協同学習の原理を踏まえて実践された貴重な記録です。また、校内研究会の記録集積に見られるように、研究成果の積み上げを一貫して企図してきた実践研究のアプローチは非常に効率的で効果的であったように思います。学校をあげての研究の方法への提言も含まれていると考えます。

研究大会参加者に留まらず、国内の多くの実践者の実践づくりのヒントとして、より広く活用される場をと考え、『協同教育実践研究資料 1』という形にしました。内容は紀要の内容ほぼそのまま、監修とはいっても若干の語句と体裁の調整をしたに過ぎません。

多くの方の目に触れ、お役に立てば幸いです。

2006年1月20日

中京大学教授 杉江 修治

豊かな心と学力を育み、共に支え合い
高め合う生徒の育成
(協同教育実践研究資料 1)

2006年3月3日 第1刷発行

著者 米子市日吉津村中学校組合立箕蚊屋中学校

監修者 杉江修治

発行 日本協同教育学会

〒839-8502 福岡県久留米市御井町 1635

久留米大学文学部 安永悟研究室内

TEL. 0942-43-4411 (ext. 393)

制作 一粒社出版部 (代表 都築延男)

475-0837 半田市有楽町 7-148-1

TEL. 0569-21-2130